
円城寺まどかの悪文排斥！

円城寺まどか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円城寺まどかの悪文排斥！

【Nコード】

N2128S

【作者名】

円城寺まどか

【あらすじ】

三流物書き、円城寺まどかが尊大な態度で小説を語る。スローガンは「悪文排斥」。良い小説、上手い文章とは何かを考察します。

第一回 はじめに

どんな世界にも「コーチ魔」という奴がいる。自分の實力は大したことなくせに、初心者を見つけては聞いてもいない講釈を垂れる。しかもその解説は解りやすいと言い難く、間違っではないのだけれども持って回った言い方をする。

「要はこういうことだね」

と一言で済むことを、要領と頭が悪いせいで延々一時間ぐらいかけて喋るのだ。小説に例えれば、原稿用紙五十枚で済む短編を、構力がないせいで二百枚かけて書くことに似ている。教える本人は気持ちいいのかもしれないが、こんな奴に教授される方はたまったものではない。

はつきり言つて災難以外、何ものでもない。

もちろん小説の世界にも「コーチ魔」は存在する。しかし本当の實力者、公募の選考に残るような人ほど低姿勢で、偉そうなことは一言も言わず、批判に対しても「勉強になりました」と、真摯な態度を見せる。そうして、ただひたすらに「小説を書く」。

本当に話をお聞きたいのはこういう方たちなのに、「いや、未熟者ですから」と、どこまでも奥ゆかしく、その奥義を語ってくれようとしなない。他者の小説には愛情を持って接し、長所を見抜く審美眼に長けている。

とてもかつこいいいし、憧れるが、凡人には中々真似できない。

反対に才能のない奴は、「俺のような天才の作品を理解できる奴など誰もいない」と、自分の作品は公表せず、他人の小説に対しては常になから目線で「ここが悪い、あそこがいけない」と、批判を繰り返す。しかもその指摘はほとんど挙げ足取り。

非の打ち所のない素晴らしい作品には、感想欄に誤字、脱字の指

摘だけを残す。まるで五百円の申告漏れを見つけた新米税務署員の如く自慢気に。

こういうことを、誰彼構わず手当たり次第にやる。

プロ志向でもない、ただ単に趣味で楽しんで書いているだけの人にまで「そんなことでプロになれるか！」と、自分がプロでもなくせに言う。

みんなでわいわいボーリングを楽しんでいるときに、

「今、ライン踏んだからファールだよな」

と、得意気に言う奴と同じだ。心が狭くて友達がいなくて、会社で決して出世しない。

そしてまた、実力がない奴ほど精神論が大好き。

「おまいにとつて小説って何？」

「小説ってのは文芸、文章の芸術なんだよ！」

「。。。最近の作品はさあ……」

小説に対する愛情はあるのに、才能には恵まれなかった残念な人得てして小説における「コーチ魔」は、こんな奴だ。非常にかっこ悪い。こんな大人になつてはいけない。

しかしこのエッセイの著者、「円城寺まどか」は、こんなみつともない大人である。尊大な態度で理論を語る。才能溢れる皆様、どうか嘲笑をこらえて読んでやってください。

第二回 視点ってなんだ？（視点講座 その？）

まずは、小説の技術としては基本中の基本、視点について。

「視点って何？」とか言わないように。要は物語をどこから、誰の目を通して見ているのか。別の言い方をすれば、「物語における作者の立ち位置」ということです。映画のカメラワークとはちょっと違うので、映像をイメージすると勘違いの元となります。

小説においては、ひとつの事件を目の前にして、視点が違えば物語そのものが違ってくるといっようなかな重要なものです。

えーっと、まず、視点というのは、大きく分けて一人称と三人称があります。（二人称というのもあるけど、普通は使わないからパス）。一人称というのは、「ぼくは〜」というやつで、読者は主人公として世の中を見えています。

利点としては、主人公により深く感情移入させられることと、視点の乱しような点で初心者にとっても書きやすいこと。欠点は、主人公が嫌いな読者にとっては物語そのものに入り込めないことと、一人が見聞きする世界には限界があり、長い物語には向かないことです。

つまり、

『一人称は主人公が知覚すること以外、書けません』

じゃあ主人公がいない場合はどうするのだという人がいますが、馬鹿を言っちゃあいけません。

『一人称小説において主人公がいない場面など無い』

のですよ。だってあなたがこの世から消え去ることなどないでし

よう？ 気絶したり寝てたりしたら、世界のことはわからないのです。「ぼく」は、「ぼく」としてしか、世界を見ていません。

だいたい、より深く主人公に感情移入してほしいから一人称なのに、他者の視点に切り替わってしまったらそもそも一人称で書く意味がありません。

まあ、「表現の自由」なんて言葉を出されたら何も返せないのと、とりあえず「公募作品においてはこうした方がいい」という話に限っておきましょう。くれぐれも、主人公が気絶したら、あれれ三人称になっちゃった、という離れ業を演じてはいけません。（なぜ一人称と三人称の混合が禁じ手なのかについては次話にて説明します）

一元視点だの多元視点だのという言葉があるようですが、難しいことはよくわかりません。私にとって視点なんてものはあまりに当然のこととして身についているので。どうしてわからないのかわからないという代物なんです。

というわけで、実践でいきますね。シチュエーションとして、「なろう」における恋愛ファンタジーの金字塔、『センロノハテニ』より。カシアンがミハルに愛の告白です。

ちなみに作品の著者である日比谷碌樹先生の許可は取ってあります。

・カシアンの一人称

「え——？」

ミハルが驚きの声をあげて私を見た。

向けられた眼差しの中には、驚愕と恐怖、そして嫌悪の色が渦巻いている。彼女に青ざめて震えている私はどんなふうに見えたのか。その不安は激昂となり、私は思わず声を荒げた。

「何回言わせるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、

ミハル」

・ミハルの一人称

「え——？」

あたしはびつくりしてカシアンを見た。

カシアンの細い、整った顔は蒼ざめ、ひきゆがんでいた。その両拳がにぎりしめられ、わなわなと震えているのをあたしは見てしまった。ただならぬ雰囲気恐怖を感じ、思わずあとずさる。

「何回答させるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、ミハル」

あたしは言葉を失った。

・三人称・神の視点

「え？」

ミハルが叫んだ。

カシアンは青ざめ、引きつった顔でミハルを見つめた。その両拳は堅くにぎりしめられ、かすかに震えている。ミハルは呆然と口を開いたまま、怯えた表情で一步あとずさった。それがいつそうカシアンを激昂させたかと思えた。

「何回答させるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、ミハル」

・三人称・ミハルの視点

「え？」

ミハルは思わず叫んでいた。

カシアンは青ざめ、引きつった顔でミハルを見つめていた。その両拳はにぎりしめられ、わなわなと震えていた。ミハルは恐怖と嫌悪を感じ、怯えて一步あとずさった。しかし、それがいつそうカシアンを激昂させたようだった。

「何回答させるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、

ミハル」

・三人称・カシ안의視点

「え？」

ミハルは叫んだ。

カシアンは自分が青ざめ、ひきつった顔をしているのをはつきりと感じながら両拳をかくにぎりしめた。ミハルが怯えたように一歩あとずさる。それは、カシアンに対する明らかな拒絶に他ならなかった。そして、それがカシアンをいつそう激昂させた。

「何回言わせるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、ミハル」

一人称は問題ないですね。三人称を解説しましょう。

？ミハルは「怯えた表情」で一歩あとずさった。それがいつそうカシアンを激昂「させたかと見えた。」

？ミハルは「怯えて」一歩あとずさった。それがいつそうカシアンを激昂「させたようだった。」

？ミハルは「怯えたように」一歩あとずさった。それがいつそうカシアンを激昂「させた。」

？の三人称・神の視点の時は、全ての人物の内面に立ち入るか、誰の心理にも立ち入らず、外側で止まります。全ての人物に入り込むと、大抵は誰が誰だかわからなくなってしまうので、主人公を含めて外側で止まることを選択した方が無難です。

で、外側で止まると「怯えた表情」はどこからでも見えますし、激昂「させたかと見えた。」で、見ているのは作者と読者です。第三者には、他人の内面を断定することはできません。

？では、ミハルは「怯え」を感じた。しかしカシアンの激昂は、ミハルの目を通してしか読者には見えません。だから「ようだった」になります。

反対に？では、ミハルが「怯えたように」カシアンの目を通して見え、それがカシアンを「激昂させた」わけです。

《ミハルは怯えてあどさつた。それがカシアンを激昂させた。》

これが視点の乱れです。このシーンをいつたい誰の目を通して見ているのか、誰に共感すればいいのか、読者は混乱して「誰が誰だかわからない現象」を引き起こします。

この視点は、中・短編では変えてはいけません。一人称の作品は、たとえどれだけの長編でもダメです。

補足として、一人称で主人公のいない場面を書きたい場合は、『これはあとから知ったことだけど』とか、人から聞くなど、伝聞形にしておきます。ただ、これでさえ効果を計って使わないと物語が興醒めしてしまいます。

とにかく一人称である限り、その人のいないところは書けないし、能力以上のことは見聞き経験することはできません。

「三人称・人物視点」では、きちんと章立てし、その章ごとに視点が変わることは許されます。（ひとつの章の中で変わるのは避けるべきです）

この方法は、

・原稿用紙100枚以上の長編であること。

- ・ひとつの章で決して視点が乱れない、視点に関しての知識と技術を習得していること。
- ・主人公をはつきりさせた上で、完全に性格心理のくつきりした人物の書き分けができる筆力のあること。
- ・これを効果をはかって使える構成力のあること。

が、条件になります。また、主人公のいる場面は「三人称・主人公の視点」、主人公がいない場面は「神の視点」というのもOKです。

章立てごとに主人公が変わる三人称を「複数主格三人称」と言います。（流行の言葉で言うところこれが「多元視点」というやつでしょうか。）これが有効なのは、恋愛要素を含む小説で男女のすれ違いを際立たせるときや、その時々「決断」を描かねば面白くならない戦記物などです。

この「三人称・人物視点」は別名、「疑似三人称」とも言われ、事実上、一人称の延長でしかありません。「ぼく」や「私」を「彼女」に置き換える＋αで事足りるので、一人称が書ければ「三人称・人物視点」は容易に書けます。もちろん一人称と同じく「主格となる人物が知覚すること以外は書けない」というルールが適用されます。簡単である分、制約も多いです。

「事実上一人称である『三人称・人物視点』が、章立てごとに語り手を変えてOKなら、一人称だって章立てごとに主格となる人物が変わってもいいじゃないか！」

と言われそうですが、まさしくその通り。本来、これを良しとすると、その意見に反論できなくなってしまいます。（だから本当の三人称ではないという意味で、「疑似」という否定的な言葉がつきます。）

ただ、一人称と違うのは、「主人公」語り手ではなく、第三者、

つまりは「主人公の目を通して語る別人」でありますから、読者に違和感を与える事実はあるにしても、その立ち位置を変えることは許されるのです。（その条件は前述した通りです）

もつとも難しいとされる「三人称・神の視点」。（または「純正三人称」）

神の視点が難しい理由として、人物の心理がそのまま書けないということが挙げられると思います。しかしながら、「内面に入り込まないと心理は描けない」は誤りで、「まるで。。。と言いたげに」や、「さも。。。と言わんばかりに」という推察+表情や行動で、いくらでも描くことができます。

さらにはこれに台詞が加わることで、充分すぎる心理描写が可能です。（もつとも、これを可能にするためにはかなりの筆力を要しますが）

これは一人称においても重要なことで、初心者の一人称小説にありがちな「主人公が他者への感心が無く、キャラクターがただの記号と化している」ということを避けるためにも必須の技術です。

神の視点は、物語との距離感と言いますが、誰に対しても同じ立ち位置で語るため、主人公のいない場面でも読者に違和感を与えることがあります。別の言い方をすれば、神の視点とは「私は」と名乗らない作者の一人称とも言えます。

というわけで、あまりの上から目線にさつそく皆様の不快感が募ってきたようなので、一旦この辺りで終わりにします。今回は人称と視点の続き、「なぜ一人称と三人称を混合してはダメなのか」を尊大に語ります。

第三回 混合人称はなぜダメか（視点講座 その?）

一人称と三人称を混合してはいけません

ラノベを筆頭に混合人称の作品が溢れる昨今、こいつは何を言っているんだと思う方もいるでしょう。実際、ラノベ作家を養成するスクールでも「混合人称、および章ごとに語り手が変わる一人称はOK」と教えるらしく、古くから小説に親しんできた者は戸惑うばかりです。

私としては、せっかく高い志を持ちながら、どうかそんな低レベルな現状に迎合しないでほしいと願うばかりですが。

なぜ混合人称はいけないのか。なぜそこまで否定するのか。

説明しましょう。

小説というのは、読者が手に取った瞬間、作者との間に暗黙の了解とも言えるある契約をかわします。それは、

『読者は作者が提示した設定を無条件で受け入れる』

ということです。この契約をかわすことによって、小説は小説として成立します。

一人称が始まる、つまりは読者に、「あなたはこの世界の主人公ですよ」と言っておいて、突然視点が変わる、別の人格になるなんていうのは、読者に対する一方的な裏切りになります。

現実の世界だって、「自分」として生を受けながら、その生をまっとうしようと一生懸命生きてきたのに、もしもある日別人になってしまったら神を恨みますよね。これは魂が別人に移り移ったのは違って、人格も別人になったらと考えてみてください。そんな不条理は許されないのです。そして、そんなことは決してあり得ません。それが「筋」というものです。現実の世界だって小説だって、

一番大切なことは「ちゃんと筋が通っている」ということです。一人称で始まっておきながら突然別人の視点に切り替わってしまうという筋の通らない作者の裏切りに対し、読者は「わからない。理解不能」をもって答える以外にありません。（普通はね）

つまり、章立てごとに語り手が入れ替わる複数主格一人称や混合人称は、小説として成立しないのです。

もうひとつ心情的な理由を挙げるなら、読者はそんな都合のいいものではないということでしょうか。

小説を綴る「言葉」というのはなかなか不便なもので、作者のイメージは読者に百パーセント伝わりません。よく言われることですが、同じ景色を見て、みんな同じように「美しい」と言ったとしても、その感動をそのまま表す言葉、「どう美しいか」を表現することとは不可能です。

「言葉はまるで六色のクレパスのよう」とは、某直木賞作家の言葉ですが、文章というのは、どうしても誤解や齟齬を生んでしまいます。そこを読み解くのも小説の面白さのひとつなのですが、語り手はなるべくわかりやすく、誤解のないようにイメージを伝えなければなりません。比喻もそうですが、視点だって読者にわかりやすく伝えるための技術なのです。

その技術は昨日、今日できあがったものではなく、先人たちが「どうすれば読者に自分のイメージを正確に伝えられるか」を、試行錯誤して確立されてきたものです。それをやってみようともしない、できもしないうちから「小説にルールなどない」と否定し、表現の自由を標榜するのは、あまりに横着、思い上がりすぎるのではないのでしょうか。常識の無い人に常識を打ち破ることはできませんし、基礎がない人に、基礎以上のことはできません。

凡人には理解不能の絵を描くピカソだって、基本のデッサンは誰よりも上手いのです。

また前述のとおり、そもそも客観記述であつてもいくらかでも内面

を描写することができないのに、なぜわざわざ読者に違和感を与えてまで視点を変更しなければいけないのか。単純に自分の技術不足を糊塗しているだけのようには思えて仕方ありません。

実際、混合人称が（少なくともラノベにおいて）許されるようになったしまった背景には

「ラノベしか読んだことのないラノベ作家に統一人称で書けと言ってもできない」

「読者も客観記述から内面を推察できる『読み解く技術』がない」

「もはや誰もそんなことを求めなくなった」

という経緯があるようです。

そんなことを言っただって、私はあの人の気持ちも、この人の気持ちもわかって欲しい。そしてすべてをひっくり返して私の小説世界に共感してほしい。

……その心情はわかりますが、無理です。読者は物語のたった一人に感情移入することにより、共感と理解を深めます。あれもこれも詰め込んで、結局何も伝わりません。作者が思っているほど都合良く、読者は心を動かしません。だから混合人称は論外にしても、三人称であつてさえ視点は（せめて初心者の方は）ひとつに統一した方が無難なのです。

こういうことを言うと、「プロはやっている、そういう小説がある」という人がいますが、すでに評価の固まったプロと、これから一作、一作が世に認められるかどうかを問うアマチュア作品は別物です。

それこそ「小説にルールはない」わけで、上手い人は何をやってたっていいんです。

「三人称・神の視点を含め、客観的に心理を描写するなんてできない。難しいし、面倒くさい」

これが混合人称を使う人の本音ではないでしょうか。

とは言っても現実には低きに流れ、プロでさえ「三人称・神の視点」が書けない人がいるようです。実際、出版されている小説のほとんどが、――さすがに一般文芸において混合人称はないにしろ――「三人称・人物視点（複数主格）」ですし。

そう考えると、この理論はもはや時代錯誤なのかもしれませんね。

第四回 プロっぽいと言われる文章（文章作法）

今さらですが、このエッセイの方向性として、小説における文章を考察してゆこうと思います。「プロットの立て方」や、「面白いストーリー」、「伏線の張り方」というのは、このエッセイでは触れません。円城寺まどかはストーリー作りに不自由な人なので、そういうものは逆に教えを請いたいぐらいです。

さて、その小説における文章ですが、日本では識字率が高く、文字が書ければとりあえず文章が書けるせいで、「小説なんて誰でも書ける」という誤解がはびこってきました。

特に最近はその技術がないがしろにされ、「面白ければ文章のウマヘタは関係ない」という風潮があるようです。

しかしながら、小説を書くには技術が必要ですし、誰でも書けるものではありません。「プロ作家」という職業があるとおり、難しいからプロが存在するのです。誰でもできるようなことにプロは存在しません。

ことに小説のプロは、相撲や将棋の世界と同じく、「どんな一流のアマチュアも、その技術は決して三流プロにはかなわない」のであります。（最近はそうでもないかな……）

小説において文章は、大切な要素ではあるのだけれども絶対ではありません。ゴルフに例えるならドライバーショットでしょうか。飛ぶに超したことはないし、飛ばばプレーの幅が広がるし、華がある。けれどもスコアとは関係ない。小説では、文章が上手ければ何かと便利だし、文章力がない人よりは、あつた方が執筆はずっと楽になります。けれども文章の上手い小説が良い小説ではないし、文章のヘタな小説が悪い小説でもありません。

ただ、「面白ければ文章のウマヘタは関係ない」と主張する人の小説が面白かった試しがないことも事実です。
なぜでしょう？

例えば空前絶後のストーリーを思いついたとして、それを伝えるためには最低限のリアリティというものが必要になってきます。それがあり得ないような話であればあるほど、リアリティを持たせるための文章力は高いものが求められるのです。（だから現実にはあり得ない世界のSFやファンタジーは、エンターテインメント小説として最高に文章力を求められるジャンルなのです）

なぜ小説にリアリティが必要なのか

先程も申しましたが、リアリティの感じられない世界に、誰も自分の身に置き換えて共感しないからです。このご時世に大変恐縮な話題ではありますが、「大地震の恐怖」という話であれば、誰がどのように書こうと、現在ならばいつ自分が被災してもおかしくないリアルな話として、自分のこととして恐怖を感じます。

しかし、これが「宇宙人が侵略してくる」という話ならどうでしょう。確かに物語としては面白いかもしれないけれど、いったい誰がそんな話を我が身に置き換えて「怖い」と感じるのでしょうか。

これを「大地震の恐怖」と同じレベルで感情移入させるには、それこそ並大抵の文章力では不可能です。つまり、いくら素晴らしいストーリーを思いついたとしても、それを小説で表現したいのなら最低限の文章力がなければ誰からも見向きはされません。

ちなみに物語において「もっとも面白い話」は、「もっともよくある話」であります。面白いからあの手この手で語られ、よくある話になってきました。しかしながらこういう決まり芝居を、「もっとも面白い話」にするためには、独創的な物語を書くよりもずっと高いレベルの技術が求められるのです。

というわけで、繰り返しになりますが小説において文章は絶対ではないけれども大切な要素です。物書きならば誰もが卓越した文章力を身につけたいと思うのですが、残念ながら世の中には「文章の上手い人」と「文章のヘタな人」が存在します。どうすれば上手い文章が書けるのか。

誤解を恐れず衝撃的なことを言いますが、

『文章は才能が大きく左右するので、本質的に上手くなりません』

「そんなことはない！」

「修練すれば絶対に上手くなる！」

きつと皆様そう思われるでしょう。私もそのように信じていました。でも文才というのは生まれ持った才能、センスであって、容姿と同じで美男、美女もいれば、どうしてもその……という人もいるのです。上手い人は最初から上手いし、センスのない人はいくら修練を積んでも——もちろんそれなりの上達はあるにしろ——いつまでたっても垢抜けません。

華やかな文章が書ける人、センスのある言い回しや比喻の使える人、文章の絶対音感を持ち、リズム良く的確な描写のできる人。これらはみんな才能で、文才に恵まれない人が同じように真似しようとしても無理なんです。いつだって神様は不公平です。

だいたい、文才のある方というのは私がこのエッセイで述べるようなことは最初から知っていて、

「円城寺は当たり前前のことを何を偉そうに言っているんだ」
か、もしくはせいぜい、

「私が漠然と感じていたことはこういうことだったのか」

ぐらいに思っていることでしょう。（あ、私が上手いと言っているわけではありませんよ。ただ理論武装しているだけですから）

といってあきらめるのは早計。容姿だって、自分に似合う化粧やファッションでいくらでも取り繕えるように、文章だって「ヘタな部分の隠し方」というものがあります。それに、先程も申しましたが「文章の上手い小説が良い小説」ではありませんので。

「文章が……」と言われる人は、自分の弱点を知らないだけなんですね。そしてそれを取り繕う術は案外簡単だったりします。それは本当に知っているか、いないかだけの些細なこと。誰もが簡単に「プロっぽい」と言われる文章が書けるようになります。（当然ながら「プロっぽい」というだけでプロの文章が書けるようになるわけではありません）

それではさっそく、前回同様、上から目線でいきます。とりあえず文章の「身だしなみ」を整えることにしましょう。人様に小説を読んでもらう、人前に出るわけですから身だしなみは大切です。

『文章は見た目と中身がよく似ている』

という格言があります。人を見た目で判断してはいけないと言いますが、人間だって案外見た目と中身は乖離しないものです。

文章も同じ。

一文ごとに改行する箇条書き、

無駄な改行や

一行空きを乱発するスカスカの文章は

中身もスカスカ。(こんな感じ)

反対に、段落の少ないぎゅっと詰まった文章を書く人は、純文気取りの難解な文章を連ねている。

もちろん効果をはかって、あえてそういう書き方をする場合もありますが、とりあえず「文章が……」と言われるような人はやめた方がいいです。

だいたい、一行空きの文章が読みやすいなんて勘違いするのは普段から小説を——まともな小説を——読んでいない証拠ですからね。

それから、一般的な表記原則を守ること。さいわい「なるう」には多くの指南書が存在し、その多くが原稿の書き方を説明していますので、すでにご存知の方も多いと思います。軽く復習しておきましょうか。

- ・書き出しは一行空けて二行目から。
- ・改行後は台詞も含め、一マス空ける。(注1)
- ・『――』、『……』は、二個一セットとして使用する。
- ・『？』、『！』の後は一マス空ける。
- ・台詞の最後の「。」は不要。

こんなところでしょうか。まあ、これを言うとき必ず「そんなルールはない」という人もいますけどね。

でも、ルールと言われるものは確かに存在します。「戦後出版業界表記原則」ともいうべきルールが。前述を含め、『当て字、難読漢字の使用を避け、接続詞、基本名詞、基本代名詞、副詞はひらがなで』というものです。

「どこにそんな記述があるか」って？ ありませんよ。物書きを

自認する者にとっては「常識の範疇」ですから。

人に会ったら挨拶をする。

食事中、喋りながらものを噛まない。

公共の場で騒がない。

こういう事柄に対し、「そんな法律どこにある」って言っているのと同じです。

「俺は別に出版するつもりはないし、そんなことを言われる筋合いはない」

という方もいるかもしれませんが。しかし出版するかどうかはともかく、たとえweb掲載であろうと、「読んでもらうために」投稿しているわけですよ。読んでもらいたいなら、ルールを守り、礼節をわきまえ、「どうか読んでください」と作品を差し出すのが道理ではないでしょうか。

すみません。話が逸れました。

少し補足しますと、「程」^{ほど}、「等」^{など}、「様」^{よう}には、基本的にひらきます。ひらがなにすることを「ひらく」と言います。「兎に角」、「折角」なども今さら漢字で書いてはいけません。

もちろん、時代物などで演出効果を出す場合などはこの限りではありません。これを含め、表記原則を破るのが許されるのは

・説明できるだけのちゃんとした理由があり、

・それが自己満足に終わらず確かな効果をあげていると認められる。

という場合です。

無駄な行空きをなくした上で、これら表記原則を守り、段落をこまめにつける。段落は原稿用紙一枚につき四つが目安ですね。でき

れば五つか六つ。これ以上だとアマチュアの記事は密度が薄いので、読みやすいを通り越して薄っぺらい文章になってしまします。

これだけで、見た目はずいぶんとプロっぽくなったのではないでしょう。

前回の視点でも申しましたが、けっきょくこれらは読みやすく、伝わりやすくするためのルールですので、自らを天才と自負している人以外は守った方が無難です。

今回はあまり大したことは書けませんでした。すでにこんなことは出来ていて、退屈な話だったという方もおられるでしょう。次回は「描写」について語ってみます。

第四回 プロっばいと言われる文章（文章作法）（後書き）

（注１）・製本されたとき、カギ括弧が天から（一番上のマスから）始まるか、一マス空いているかというのは出版社ごとに異なる校正規則の違いで、本来は原稿は例外なく一マス空けるのが基本でした。しかしながら、現在はほとんどの出版社において「台詞は天から」に統一されており、原稿も台詞は一マス空けなくてもよいというのが主流です。私は古い人間なので空けています。

第五回 それは小説ではありません（あらずじ文体とは）

『円城寺まどかの悪文排斥！』第五回でございます。今回は「描写とは何か」について語ります。

まずは私の新作小説からご覧ください。

ぼくはどこにでもいる平凡な高校生だ。学校が終わったある日、ぼくは家までの道を急いでいた。しかし、途中で工事現場に遭遇したのでいつもと違う道に行くことにした。

するといつの間にか、知らない道を歩いていることに気づいた。ぼくは少し悩んで、今来た道を引き返した。

しかし、どこまで行っても知った場所に出ない。

焦ったぼくは通りすがった男に道を聞いた。

「すみませんA……町に行くにはどうすればいいですか？」

「……を右に曲がれば行けるよ」

肝心なところが聞こえない。しかし、聞き直そうとしたら男はもう立ち去っていた。

ぼくは再びあてもなく歩き出した。しばらく知らない町をさまよっていたが、ついにA……町にたどり着くことはなかった。ぼくは疲れて、その場に座り込んでしまった。

気がつくといつの間にか日が暮れている。

……いきなりの駄文で申し訳ありません。なんとなくホラー仕立ての物語。さて、この文章を読んでどう感じたでしょうか。

読みやすい？ 単調な文章？ なかなか味わい深い？ ヘタくそ？ 感じ方は人それぞれです。しかし、少なくとも「上手い」とは思わなかったはず。どこがヘタくそなのでしょう？

お分かりの方も多いと思いますが、実はこれを「小説」とは言いません。こんなものは小説以前、ただの「あらすじ」です。こんな文章に、上手いもヘタもありません。

どこがどう、なぜこれが小説ではないのか。わからないという人はちよつとヤバイですよ。

なぜなら、

『説明ではなく、描写をしないと小説にはならない』

ということがわかっていないからです。これは小説を書き始めたばかりの人がやりがちな、「あらすじ小説」なんです。小説の骨組みだけ。これに肉付けし、血を通わせないと小説にはなりません。こんな書き方をしたら、歴史の年表だって小説になってしまいますよ。例えば――

昭和六年、日本は中国の排日運動と経済的大恐慌を解決するため、満州事変を起こし、翌年中国北部を分割し、満州国を建国した。さらに昭和十二年、日華事変に突入。中国侵略への泥沼戦争に突き進んでいった。

これに対し、中国は共産軍と蒋介石のひきいる国民政府との内乱を一時中断し、一致団結して排日運動に立ち上がった。

日本は石油などの資源を必要とするため、昭和十六年、日本軍は仏印に侵略し支配下におさめた。

……ね、こんなものは小説じゃないでしょう？ これと同じ書き方をしているのが、私の書いた小説（と思って書いたあらすじ）です。

冒頭の「ぼくはどこにでもいる平凡な高校生だ。」なんて一文はもっともいけない。平凡な高校生ならば、平凡であることを描写しなければ小説にはなりません。

ではどういう書き方が描写なのか。

お手本として、立川マナ先生の『鈴木君の平均的な非日常』というコメディ小説から、平凡な高校生、鈴木君を描いた一文を紹介します。もちろん立川先生の許可は取っております。

（中略）

平均といえば、彼の見た目もそうだ。保健の教科書に描かれるイラストのような、一般男子の体系。中背中肉。顔は目立つわけでもなく、かといって、ブサイクでもない。おそらく、ランダムに三十人ほどの男子生徒の顔写真を用意して、その平均値を割り出せば、彼の顔になるだろう。似顔絵が描きづらい顔、といえば分かりやすいだろうか。とにかく、特徴がない。だから、なかなか覚えてもらえない。それなのに、しょっちゅう、見知らぬ通行人に声をかけられる。よくある顔、というのも大変なのだ。

（後略）

これは私が絶賛した一文です。いやー、上手い。お見事！

どこが上手いのか。

コメディならではの軽快な文体はもちろんですが、しかし私が感心したのはそこではありません。特徴がない人の特徴として、「似顔絵が描きづらい顔」だとか、「なかなか覚えてもらえない」ということは、案外多くの人が思いつくことでしょう。しかし、

それなのに、しょっちゅう、見知らぬ通行人に声をかけられる。よくある顔、というのも大変なのだ。

これがすごい。これは思いつかない。少なくとも、他人を遠ざけるような生き方をしてきた私には決して思い至らない。

美男子は美男子の苦労があるように、ブ男にはブ男の苦労があるように、どこにでもいる平凡な顔の「鈴木君」にも、よく誰かに間違えられるという苦労がある。そこに気づく立川先生の人間に対する洞察力と想像力。

この効果は絶大で、学園コメディであるはずの小説世界が、この一文のおかげで確かなりアリテイを持って感じられるようになるんです。

私がこれ以上のものが書ける自信がなかったので、お手本に引用させていただきました。

こう書かないと小説にはなりません。私が書いたものを読んで、すぐに「これは小説じゃない」と見抜けなかった人。あなたの小説も「ただのあらすじ」である可能性があります。

抽象的な言い方になりますが、小説の文章は、そのものずばりを言い表してはいけません。核心を突いた言葉で世界を広げるのが短歌や俳句なら、小説の文章はその対極に位置します。現実と小説世界の溝を埋めるように、丁寧な言葉を敷き詰め、核心を浮かび上がらせる。それが小説における描写です。

私の書いたものと立川先生が書いたもの、どうしても違いがわからないという方は、とりあえず百冊ほど小説を読んでください。でないと、これから先、あなたの書くものはすべて「あらすじ」でしかありません。

もちろん全部を描写してゆくと大変なことになるので、説明で済ませてしまう部分というのはあります。次回はそのあたりを、「どれだけ描写するべきか」を考察します。

第六回 描写肥大という病気

『悪文排斥！』第六回。今回は「あらずじ小説」とは反対、贅肉のつきすぎた肥満小説について語ります。

実はこのエッセイを始めてから、何を、どこまで描写すればいいのか解説してほしいというご意見を数名からいただきました。リクエストは受け付けておりませんが、そういう方の参考になれば幸いです。

「何をどこまで書くべきか」

おそらくこれも、小説を書き始めた人の多くが悩むことだと思います。

そこで、今回もひとつ悪い例を出します。あ、これはもうひとりの私、矢岳秀斗が書いたものです。

「何だつて！」

ぼくは驚き、座っていた椅子からはじかれたように立ち上がった。その勢いで、グレーに塗られたスチールフレームに薄い木板を張っただけの椅子は、その値段と同じぐらいの安っぽい音を立てて床に転がった。掃除したばかりの綺麗な床に、わずかについてしまった傷がやけに目を引く。でも、ぼくも彼もそんなことを気にしている場合じゃなかった。

「すぐに行こう」

ぼくはまず右足の筋肉に力を入れて足を床から持ち上げると、前方に出して五十センチほど先の地面を踏みしめた。それと連動させ、右腕は肘を曲げて後方に振る。もちろん左腕は前だ。前方の地面をとらえた右足に力を込め、こんどは左足を持ち上げる。それを右足

より前に出し、合わせて腕の動きも逆に。繰り返すその動きは速くなり、一瞬両足は宙に浮く。

ぼくは走っていた。すれ違う十人ほどの生徒が、驚きの表情を浮かべて振り返る。階段を一段とばしに駆け下り、一階へ。降り立った廊下を右へ三十メートル行き、突き当たりを左に折れる。すでに誰もいないはずの体育館に、ぼくは急いだ。

……（絶句）……

アホかい！　こんなものは――

「何だって！」

ぼくは驚いて立ち上がった。その勢いで椅子は転がり、乾いた音を立てる。

「すぐに行こう」

言うが早いか、ぼくは教室を駆けだしていた。すれ違う生徒が、何事かと振り返る。

でもそんなことに構っちゃられない。ぼくは誰もいないはずの体育館へと急いだ。

で、済むぢやないかつ！

……失礼しました。

しかし笑ってはいけません。実はこういう書き手が意外に多いのです。しかも確かに長い描写を支えるだけの記述体力もあり、よく

小説というものを知らない読者からは

「豊富な語彙と圧倒的な文章力に驚きました！」

と、感嘆符をつけて褒められたりするものだから、なかなか自分がそういう書き手であるとの認識がありません。

前述の悪い例では、転がった椅子が高いか安いかなんて関係ないし、床についた傷がのちの伏線でもない限り、どうでもいいことです。

後半の走る描写など論外。『まず右足を持ち上げ、それから……』なんて、主人公がこのあと空でも飛ぶのでなければ、明らかな過剰描写ですよ。まるで『キャプ。ン翼』のスローモーションじゃないですか。

こういう人の小説は、無駄を省けば半分、ヘタをすれば三分の一の分量で書けてしまえます。長編を書いているのに、実はそれは本来、短編のネタだったということに気づいていません。「あらずじ小説」と同じく、これも小説にはならない。

おそらく、小説をパソコンで書くようになってしまった弊害でしょう。どんな長い文章も楽に書いてしまうものだから、とりあえず全部書いてしまう。三百枚、四百枚の原稿用紙に立ち向かい、そのマスをひとつずつペンで書いて埋めてゆく、という経験のある方々には、あまり見られない傾向です。

もしあなたが、

- ・短編が書けない、もしくは苦手。
- ・公募に挑戦はしてみたいけど、俺の小説のスケールは規定枚数には収まらないぜ！
- ・書き出した小説が一向に終わる気配を見せない。（最初から大河小説として書いているなら別です）

の、どこかに当てはまるのであれば、あなたは間違いなく無駄な描写を連ねています。

こんな書き方をしていたら、小説なんてどんどん長くなってしまいますよ。そりゃ短編なんて書けるはありますがありません。

またこういう人に限って、肝心なところを説明で済ませている傾向があります。描写しなければいけないところなのに、前述の「ぼくは平凡な高校生だ」という説明になっている。

説明と描写が逆になると、実際の原稿枚数よりも物語が長く感じます。どれだけ描写を連ねても淡々としてしまっ、というのもこれが原因です。読者が何を知りたいのか、与えるべき情報は何なのか、理解しないまま執筆に入るから何もかも書いてしまっんですね。

本来は小説のネタを掴んだ瞬間に、「これは原稿用紙〇枚の話」ということを把握しなければなりません。それがわからないという人は、まずはきっちり五十枚で終わる短編を十本ほど書いてみましょう。

五十枚の短編に、無駄な描写を書ける余裕はひとつもありません。一語一句だっておそろかにはできない。この一文は必要か必要でないのか、見極めるための練習になります。

たしかに長編であれば、多少の無駄を交えて枝葉を茂らすということも必要ですが、基本的にはなぜこの描写は必要なのか、説明のつかないことを書いてはいけません。

執筆はもつと神経質に。トッププロともなれば、描写はもちろん、どうしてここは「。。。だった。」ではなく、「。。。であった。」となるのかについても説明ができるほど、文章の隅々にまで気配りを行き渡らせています。

無神経なままで小説は書けません。文章には、神経を使いすぎるぐらい使ってちょうどいいのです。

しかし、前述の「あらずじ小説」は、けっこう簡単に治りますが、「描写過多」の修正は、かなりやっかいだと思います。なんせ文章

のダイエットですから。いつだって、太ることより痩せることの方がずっと大変なのです。

短編と長編では確かに違う部分もありますが、短編が面白い人は長編を書いても上手いです。短編が書ければ長編は書けます。小説が上手くなるためにも、短編の執筆はお勧めです。

どうしても描写の取捨選択がわからないという人は、自分の崇拜する作家の小説を書き写してみましよう。もちろんコピペじゃないですよ！

文章の鍛錬はもちろん、「何をどれだけ書くべきか」がわかると思います。同じ文体になると恐れる人がいますが、自分がそう思うだけで、第三者が読めばまったく別物です。決して同じにはなりません。（一冊書き写したぐらいでプロの文章が書けるわけがない）私が誰の文章をお手本にしているかだって、おそらくわかる人はいないはずです。

次回ももう少し描写について。「どのように描写するのか」を考えてみたいと思います。

第七回 円城寺まどかがナンボのもんじゃい！（『かいな』批評公開）

『悪文排斥！』第七回。今回は予定を変更して、このエッセイの著者である円城寺まどかの実力を公開したいと思います。

執筆歴一年半。公募にも挑戦しておりますが、結果は残せていません。何が足りないのか、自分でも感ずるところは多々ありますが、一度プロの意見を聞いてみよう、と、公募の選考経験もある編集者に作品を見てもらったことがあります。

この経緯は自身の活報でも一部を紹介したことがあるのですが、今回は完全ノーカット、言われたことの全てを掲載します。

今まで散々上から目線の講釈を垂れてきましたが、たまには徹底的に叩きのめされる円城寺まどかを見て、溜飲を下げてください。

批評を受けたのは拙作『かいな』です。

<http://ncode.syosetu.com/n1131n/>

批評されるのは大きく分けて記述、人称、構成の三点。各項目では『』のついてるところが私の評価です。それでは行きます。

●記述面について

文法精度が確保された安定感のある日本語です。

・ところどころ品詞の重複、主語と述語の不整合、能動態と受動態の混在、文意の飛躍および断片などが見られます。

問題ありません。違和感を誘われる読点利用が皆無なのは、作者が十分な「構文解析力」をお持ちだからだと思います。また、漢字の使い分けも水準をはるかに上回るレベルで、作者の丹念に辞書を引く姿勢が窺えます。

ただ、たぶん二カ所だけ「主述不整合」と考えられる記述が見られました。この「文章冒頭に『。』は』を配置しながら、それを主語として扱わない書き方」は、力不足の書き手の特徴とも言えますので再確認してください。

×空はどんよりとした灰色の雲が覆い尽くしていた。
。どんよりとした灰色の雲が空を覆い尽くしていた。

×平日のこんな時間に家にいることは、奇妙な解放感と、まるで社会から取り残されたような孤独感が入り交じった、奇妙な気分だった。

○平日のこんな時間に家にいると、奇妙な解放感と、社会から取り残された孤独感が入り交じった、奇妙な気分が襲われる。

ラノベで多用される「……」「――」ですが、これは一般賞への応募を考えた場合、利点になりません。現状の本作でも利用頻度が多すぎる印象で、再確認をお勧めします。また、「一行空けの代わりに《……》を挿入」も、「意図がよくわからない」と判断されるリスクをはらみます。

よほど特殊な読ませ方をさせるのではない限り、名前の初出時のルビは不要です。煩わしいと感じる人もいます。

● 人称面について

・「セリフの味」「地の文の声」とともに実現された真性三人称小説です。

・「客観的に書こう」という意図が窺える記述もありますが、「自由間接話法（＝地の文における独白）の多用」＋「地の文の主観、すなわち記述者の視点が作中当事者となっている記述も目立つ」＋「地の文において『声』を持つに至らない説明のための説明が多く行われている」という理由で、「疑似から真性への過渡期にある混合人称」と考えられます。

地の文が作中当事者の主観で書かれており、また、それが作者の意図だと考えられることから、疑似三人称作品と判断できます。

・他者への目配りができた、きちんとした一人称です。

・「他者への感心・洞察の不足（＝事実上の欠落）」が特徴的で、初心者と女性応募者に目立つ「自分語り一人称」と言えそうです。

・「描写の不足（＝事実上の欠落）」＋「地の文のほぼすべてが『説明のための説明』である」という理由で、「初心者に多く見られるあらずじ文体」・「三人称」と感じられます。

典型的な疑似三人称作品で、「疑似三人称のルールから外れる記述」は見られませんでした。

ただ、本作の場合はすべての場面に主人公・理沙が登場していますので、「一人称の方がつきりする」、「記述を主人公の知覚の範囲内にした方が恐怖感の醸成に効果的」とも感じました。

●構成面について

・吟味されたストーリー展開と感じられます。

読者に違和感を与えてしまうと思える要素が散見します。

記述レベルが相当に高いため、読むこと自体に晦渋が伴うことはありません。しかし、「なにを・どのように書くか」「事件のどの部分を切り取って読者に提示するのか」といった部分の理解度、実践度に関しては、多くの応募者と同レベルにあると感じました。

以下、箇条書きですが、気づいた点をお知らせします。

・セリフを大切にしてください

小説におけるセリフは「それぞれのキャラの人格を表現し、書き分ける」上でとても大切なツールと言えます。したがって——すべてをそうするのは事実上不可能とも言えますが——小説におけるセリフは「それぞれのキャラの価値観・社会観・人生観などを内包した、読者の内面にも届くだけの効力を持つもの」であった方が、明らかに有利と言えます。

一方、現状の本作のセリフには「はい」「もしもし」といった、キャラの人格表現とは無関係の心底どうでもいいセリフが多く含まれており、やはり見直し（「自分の大切な小説のキャラに、そういうセリフはただの一言も口にさせない」というハードルを設けること）あなたが敬愛する作家がその種のセリフを書いているか確認すること）が必要と感じます。

生きた、有効なセリフとは――？ これはもう、「お手本となる作品」を読み込むことで身につけるしかないのかもしれませんが、作者ご自身の「自分はこういう言葉を（他者に）かけてあげたい」「自分はこういう言葉を（他者から）もらいたい」という「想い」が基本になると思います。

本作で多用されている『（ ）』でくくった独白体。これは本来、地の文での内面記述がしにくい真性三人称で意味を持つもので、内面記述に制約のない疑似三人称で用いるのには違和感があります。また、その使われ方の多くが「地の文の連続を避けるためのワンポイント」であるため、区分としては「独り言」となり、「応募作で書いてはいけないこと」に相当します。悲鳴や擬音とともに幼稚さ・安直さを醸してしまうこの独り言を避ける方策は実に単純、要は「主人公ひとりしか登場しない場面は書かない」です。地の文での解説や独り言ではなく、「主人公と他者の生きたやりとり」を通じて、読者に知らせる必要がある事実を提示してください。

・主人公のキャラ設定を見直してください

疑似三人称である本作は実質一人称ですので、私が紹介している一人称のルールが適用されると考えられ、つまるところ「人格的に劣った大人を主人公にしてはいけない」に抵触しているように感じます。

「小説の主人公は際立った才能を持つ優秀な人間しか勤まらない」

とは言い切れませんが、しかし、「どこにでもいる、つまらない女」を主人公にした実質一人称が、——記述レベルはAクラスであるにしろ——「どこにでもある（＝誰にでも書ける）つまらないもの」にしかかなり得ないのもまた事実です。（作劇上つまらない人間を主人公にしなければならぬ場合は、真性三人称のスタイルで「書き手自身の『つまらなくない人間の声』を与える必要があります」）。

キャラに魅力を与える方法は「魅力的なセリフ」、そして「魅力的な行動（＝誰でもできるわけでない、意地・価値観・想いを体現するための行動）」で、それらが可能となる形の作品構成を執筆前に吟味することこそが本来必須なのです。その観点で、現状からの改変度を最小にしながら理沙に魅力を与える方法を勘案すると、「鋭敏な洞察力ゆえに息子の犯行と察知し、『自分の腕を切り落としていい、殺していいから、これまで犯した犯罪の責任を負いなさい』と詰め寄る母の思い」を打ち出すことではないかと思えます。

・「読者がどこまで察知するか」と「現実世界との整合性」を再確認してください。

「母子二人しかない家で腕が発見された」＋「息子の部屋に猟奇的な本があった」が提示された時点で、読者は「聖也の犯行」と察知します。したがって、その翌日の理沙の言動は、読者にとって「とつくにわかっていることを何ぐだ言ってた」でしかなく、有害と言えます。つまり、「書いてはいけない」のです。

また、「校門に置かれた生首事件」ほどではないにしろ、「民家から片腕が見つかった」は大事件で、警察が早期に立ち去ることはあり得ません。（母子二人は警察によって徹底的に監視され、大拳して押し寄せたマスコミに蹂躪されます）。加えて複数連続殺人犯の特徴は「支配者と奴隷」ですので、「聖也が支配者、勇人が奴隷」という描き分けは最低限しておくべきです。（ただし、読者から見た魅力的な猟奇殺人犯は、「体に障害を持ちながらもすべての犯行を単独でやっのける優秀な犯人」なのだと思います）。

これら「当然踏まえていくべきこと」がぼつかり欠落してしまうと、やはり「現実との整合性吟味が不充分」と言わざるを得なくなるようです。

聖也の容姿・雰囲気につわる記述は有効で《く伶俐という》《く不具者ならではの艶やかさ》などは作家性を窺わせる表現と感じます。（ただ、「不具」は明らかな要注意語句ですので、使用にはリスクが伴います）

「動物が事故に遭う」にナーバスな読者もいるため、本作冒頭の記述はいかんせん避けるべき——その時点で「こんなもの読みたくない」と拒絶される危険をはらむ——と感じます。読者にとって作品は「どこの誰が書いたかわからない、それを読むことでどんな精神的ダメージを強いられるかわからない危険物」でもありますし、読者に対する十分な配慮が必要だと思っています。

「ホラーとは何か」は案外と難題で、「記述を通してぞわつとする恐怖を味わわせる」のもありなのでしょうが、現状の本作の骨格が「幼少期に片腕を失った少年が成長してから連続殺人犯になった」という猟奇性ですので、それを中心にした記述で作品を構成するのが基本となってくるように思えます。

ある事態に直面した主人公が、その価値観を根拠にある判断をし、それ（価値観）を体現すべく行動するさまを描くのが本来の小説です。まず打ち出すべきは主人公の魅力。そして全体を通して描くべきなのは、「読者の心にある『想い』として残る価値観・情感」なのだと思います。

これが言われたことのほぼすべてです。そんなに「ツマラナイ、ツマラナイ」と連呼しなくても……

しかし、悪いところに気づかないまま、いくら書き続けたってムダですからね。

これを踏まえて改稿したのが、拙作『初恋』（原稿枚数98枚）です。

<http://ncode.syosetu.com/n50890/>

残念ながら力及ばず、落選しましたが。

私の実力はこの程度ですが、よろしければ引き続き本作をご覧ください。

第八回 巧い文章とは？

第八回、『悪文排斥！』。このエッセイの最大のテーマでもある、巧い文章とは何か。今回はこれを交え、描写について考えてみたいと思います。

さて、「文章力のある人」や、「巧い文章」とは、いったいどんなものを指すのでしょうか。皆様はどんな文章を読んで、「巧い」と感じるのでしょうか？

『なろう』では文章評価という項目があり、五段階で点数が入られるのですが、その評価は人によって様々です。同じ作品を読んでも、ある人は「巧い」と感じて5点を入れても、別の人は「そうでもない」と、低い点数を入れる。

私の文章に関しても、思うところは様々のです。みんながみんな最高の評価であればありがたいのですが、残念ながらそういう方ばかりではありません。「1」や、「2」を付ける人だっています。もちろん、自分の文章が万人に受け入れられるなどと自惚れているわけではないし、読む人によって評価が分かれるのはむしろ当然のことです。

思えば私が評価するときだって、明確な基準があるわけでもなく、ものすごく感情的に点数をつけていると思います。

誤字脱字が目につくのが、視点なんて無いに等しいぐらい乱れていようが、はっとさせられるような言い回しがあったり、気の利いたセリフがあったりすると、それだけで「5」を入れたり、反対に「巧いのだろうけど、妙に鼻につく」と感じると低い点を入れたり。客観的な評価というよりは、ずいぶんと自分の好みが反映されます。我ながら、理不尽な点数の付け方をしていると思っていますのですが。

しかし、自分の中では巧い文章の定義というのは決まっ
ていて、『究極に巧い文章とは、文章の存在を感じさせない文章である』
と考えています。

読んだ人に文章が巧いと思われるなんてまだまだ。読んでい
るとにさえ気づかない、空気のような文章。

「なんだ、小説なんて簡単に書けるじゃないか」と思わせてお
いて、やってみるとできない。これが私の目指すところです。

例えば音楽においても、アマチュアバンドは、曲の中でひたす
ら超絶なテクニクを入れてきます。「どうだ、凄いだろ。参った
か」と言わんばかりに、ギターもドラムも自分が目立つことしか考
えていません。

それはそれで凄いものだけでも、しかし本当の意味の巧さとはか
け離れている気がします。事実、プロの音楽というのは、やってい
ること自体は非常にシンプルです。できるだけ余計なものを排除し、
リハーサルの中で音の調和をとってゆくことで洗練された音楽を作
り上げる。無限のパターンの中から作る音のバランス——それは、
プロの耳でしか成し得ない、究極の「巧さ」なんです。

何も知らない人にとっては、一見、アマチュアバンドの方が凄
いことをやっているようですが、プロはもっと別の次元で音を聞
いている。本当の巧さはそれじゃないと知っているんですね。

文章においても、それと同じ事が言えるのではないでしょう
か。陳腐な形容は避けるべきですし、センスのある比喻や形容を連発
すれば、「巧い文章」になるわけではありません。

- ・ 形容は控えめに、
- ・ 意識的に段落を取って読みやすく、
- ・ なるべく平坦な描写を心がける。

形容って、ファッションに例えるとアクセサリだと思います。どんな高級なものだって、ありったけ身につけていたらただのチンドン屋ですよ。使うなら最適なものをセンスよく。それは別に高価なものじゃなかったって——文章で言えば多少つたないものだって——使う場所と見せ方で、充分に効果を発揮するんです。

これは「プロっぽい文章」でお話した、「ヘタの隠し方」のひとつです。いくらダイヤモンドを持っていたても、それを他の宝石の中に置いたら目立たなくなります。でもガラス玉だって、黒地に置いて光を当てれば人目を惹きますよね。

ところが安っぽいガラス玉しか持っていない人に限って、文章の中に色とりどりのガラス玉を敷き詰めたがるようです。「ここ一発」の描写を浮き立たせるためにも、それ以外の文章は平坦に。これが巧い文章、少なくとも巧いと思わせるコツではないでしょうか。

平坦というのを、もう少し具体的に挙げましょう。

- ・ルビを振らなければ読めない漢字や、傍点を不必要に使わない。
- ・体言止めを連発しない。
- ・擬音や、『！』『？』を多用しない。
- ・おさないこどものせりふだからといってぜんぶひらがなにしない。（だって大学教授の台詞に難読文字を入れたからって、賢い雰囲気が出るわけじゃないでしょ）「モチロン外人ノ台詞ダカラッテ、カタカナデ書イタラダノギャグデスヨ」
- ・いくら時代物でも旧仮名使ひはやり過ぎでせう。
- ・陳腐な文章を書かない。
- ・巧く書こうとして妙な表現をしない。

この中で難しいのは体言止めでしょうか。小説を書いていれば絶対に使う場面は出てきますし、効果的に使えばリズム良く、読み

やすい文章になります。具体的に説明はしにくいのですが、いくつも連続して体言止めが続くと落ち着きがない印象になります。

擬音に関しては、一部の小説マニュアルにあるように、絶対禁止とは思いません。ただ、使うならよほど神経質に。使う場所を間違えなければ、センスのない形容詞を連ねるよりずっと効果的です。しかし不用意に擬音を使えば、その一文で小説全体がぶち壊しになります。

陳腐な文章というのは、今まで散々言い尽くされてきて、「またこれか」と思わせてしまうものです。例えば……

『その岩壁は、まるで嘗々と築き上げてきた人類の英知を嘲笑うかのように傲然とそびえ立っていた。』

とか、
『もちろん、。。。であったのは言うまでもない。』
とか、

『桜花爛漫の春の訪れ』
などなど……

こういう類のものは書いても書かなくても一緒。紙とインクのムダ。だったら書かない方がいいです。読んでいて興醒めしてしまえますので。

「妙な表現」というのは、なかなか自分では気づかないものです。二重形容だったり、相容れない言葉で意味不明になっていたたり、違和感が感じられる文章のことです。これも例を挙げると、

・「真夏の暑い盛りに」

真夏が暑いのは当たり前です。

・「私を見据える黒曜石のような双眸は、冷たく青い光を放っていた。」

いや、そりゃあ青い黒曜石だってありますけど、普通は黒曜石と言ったら黒を想像するんじゃないでしょうか。これは別のものに例えるべきだし、どうしても「青い黒曜石」になぞるのであれば、

『私を見据える双眸は、稀に見る青い黒曜石のような冷たい光を放っていた。』

とすべきじゃないでしょうか。

・「凜とした、涼やかな眉を大仰にひそめて見せた。」

『凜とした』と、『涼やか』が同じような形容の重複。そこにあまり良い意味ではない『大仰に』とくることで、統一感のない悪文と言えます。（これが悪文と思わない人は文章音感のない人です）

以上が、私の考える「平坦な文章」です。要はあまり肩肘張らず、カッコつけないように言い換えることもできます。

『それは小説ではありません』、『描写肥大という病気』、そして今回の『巧い文章とは』で、悪い例ばかりを挙げてきました。描写をそぎ落とした「あらずじ」はダメで、無駄を連ねる描写過多もダメ。ついでに陳腐も美文調もダメとなると、「じゃあどうやって書けと言うんだ！」ということになりますね。

私自身が巧い例文を書けないのはもちろん、「小説はこう書かねばならない」と決めつけることは、発想や表現の幅を狭めることになり、自戒としてそういう考えを持たないようにしています。ただ、「こう書くのは望ましくない」ということは確かにあると思っています。

ます。

そういうわけで、私が具体的に「こうやって書くんだ」ということは言えません。強いて言うなら、「安直に言葉を選ばない」ということではないでしょうか。

与太話 その？ 読むことと書くこと

『小説が上達する上で、読むのと書くのとどっちが大事だと思う？』

なんて会話をよく聞きます。この質問に、「読むこと」と答える人は執筆量が足りない人、反対に「書くこと」と答える人は読書量の足りない人ではないでしょうか。

結論、というか私の考えを申しますと、当然ながら「どちらも同じぐらい大事」であって、もし毎日二時間小説を書く時間があるのなら、一時間読書して一時間執筆するのが理想だと思います。現実には難しいですけど。

しかしまあ、「読むのと書くのとどっちが大事だ」なんて疑問を持つこと自体、明らかな読書量不足だとは思いますがね。

だって、小説なんて、読むことに飽き足らなくなったから書くんじゃないのですか？

「小説家は読書家のなれの果て」

とは、プロ作家・清水義範氏の言葉ですが、小説の巧い人、ましてやプロになる人というのは例外なく読書家であります。現在の流行作家、東野圭吾氏は「あまり本を読まなかった」と公言していますが、それは「他のプロ作家と比べて」という意味で、間違いなく千冊単位の本は読んでいますよ。

「本は読んだことないし、たまたま書いて応募したら入選。プロになっちゃった」なんて言葉を本気で信じている人は、「街を歩いていたらスカウトされて芸能人になった」っていう話を鵜呑みにしているアホと同じ。そんなことはあり得ません。まあ、そう公言し

た方がかつこいいですからね。いかにも才能があるみたいで。

「読むことと書くことは違う」というのは確かに事実ですが、「読まなきゃ書けない」というのもまた真理です。

ただ、「どれだけ読めばいいんだ」と聞かれても、それこそ数量の問題ではありませんし……少なくとも「活字中毒を自認するぐらいいには」だと思います。というか、それほどまでに小説が好きでない人がどうして小説を書こうと思うのか、私には理解できませんが、別に自己表現の手段は小説だけじゃないですからね。

「音楽は聴かないけれど、作曲が好き」と言っているのと同じです。

確かに「とにかくたくさん書くのが上達の近道」ではあると思うのですが、ただしそれには条件があつて、「自分がちゃんと小説の審美眼を持った上で」のことだと思います。何も知らずに、もしくは何も考えずにたくさん書いたって、ヘタのまま固まってしまふのではないでしょうか。それを避けるには、たくさんの本を読むしかないと思います。

でも、何事も例外があつて、「なろう」においてもすごく良い小説を書いているのに、自己紹介欄に「あまり小説は読みません」なんて書いてある方もいます。思わず「本当かよ！」と驚くのですが、事実、そういう文才のある人はいらつしやるようです。

もちろん、「例外」ですけどね。とりあえず自分がそういう天才だとは自惚れない方がいいし、小説を書く上で読書が役に立つか立たないかは、たくさんの本を読んだ後に判断しても全然遅くないと思います。

私はたくさん読んでいてもこの程度ですが、それでもやはり、書くことよりもまず読むことが大切と考えております。

第九回 『KAG・ROU』は読みやすい？（小説における文体とは）

『読みやすい文章は巧い文章なのか』

話題作、『KAGEROU』の文章を例に取り、これについて語りたいと思います。

小説が人に読んでもらうものである以上、文章が「読みやすい」ということはとても大切な要素です。このエッセイでも申し上げてきた、人称と視点、基本的な記述の仕方や段落を意識的に取るということも、すべては読者に読みやすく、わかりやすいと思ってもらうための配慮です。

ただ、読む人によって「読みやすい」の基準は違いますし、中には「読みやすい」の意味を履き違えている人もいるようです。

よく言われることですが、物語を伝える手段として、小説は漫画や演劇、映画よりもとっつきにくく、敷居の高いメディアです。

その理由は、小説は単に文章を読み流しただけでは理解できない——読んでから文章を映像なり、画像なりのイメージに置き換えるという、読解力を必要とするからです。映画や芝居の鑑賞のように、一方的な受け身では何も入ってきません。読むことが苦手という人は、結局のところ読解力の無さが原因なのです。

と言ってしまうては身も蓋もないのですが、とにかく普段から活字に馴れていない人にとって、「読んで理解する」、「読解する」ということは、ことのほか面倒な作業のようです。

以前、私は「小説の描写は核心をついてはいけない。堀を埋めるように周りを囲み、言いたいこと（＝核心）を浮かび上がらせるのだ」と申しました。

しかし、活字が苦手、読解力のない人にとっては、そういう書き

方をしたものは難解に感じるでしょう。（もつとも、難解である原因は書き手にあることも多々ありますが）

・彼はいつも清潔な白いシャツを身につけている、銀ぶち眼鏡の似合う男だった。

という文章より、

・彼は神経質な男だった。

と一言で書いた方が、「読みやすい」、「わかりやすい」と言われてしまう。

おそらく、『なるう』においても多くの方が否定的であろうケータイ小説。

あれを「読みやすいから」と好む若者が大勢います。しかしながら、多少でも小説というものをたしなんだ人ならば、「読みやすいの意味が違うよ」と、嘲笑を交えて一蹴するでしょう。文章に何の技術もこだわりも感じられない、情景も心理も作者の身勝手な「説明」に終始する、ほとんど中二ポエムでしかない文字の羅列。

あんな書き方をしたら、読者は何も考える必要がありません。そもそも文章の中に読解しなければならぬ情報はほとんど含まれていませんから——あまりに稚拙な言い回しに思わず意味を考えてしまうことはありますが——「読みやすい」となるのでしょうか。

（ケータイ小説は小説とは違う「別物」とすれば、あれはあれで楽しめますが）

ケータイ小説は極端な例ですが、一般的な小説においても読解力を必要としないがために「読みやすい」と言われるものはあるようです。

やり玉に挙げて申し訳ないのですが、少し前に話題作となった『KAGEROU』。ご覧になった方も多いと思います。少し前に、

私も読んでみました。某レビューでは散々にこき下ろされていて、いったいどれほど酷い小説なのか、やっかみも多分に入っているのではないかと思っていたのですが……

なるべく先入観を持たず読んだつもりですが、その内容はともかく、やっぱり残念な文章でした。この小説の褒め言葉として、「読みやすい文章」というのがよく挙げられていましたが、これは「読みやすい」ではなくて、先ほど申した「中身のない」文章だと思うんですよね。

小説の文章というのはただ状況を描写すればいいのではなく、文章そのものが小説世界を内包する小宇宙でなければならぬというのが、僭越ながら私の持論です。

文体は書く小説によつて使い分けるべきですし、学園ものと同じ文体でSFは書けません。

例えば『昨日の夜に出会った女はとても美しかった。』ということを書くのにも、その描写の仕方はジャンルごとに異なるはずですよ。わかりやすい一人称で、ちよつと実践してみましよう。

・SF

私とその美しい存在に遭遇したのは、たしか昨夜のことだった。わずか数時間前のことなのに、今となつては夢か現実か定かではない。それは彼女の美しさがおよそ人の想像を超越するもので、そのせいか、私は次元を越えた世界に迷い込んだような錯覚に陥ったからだ。

・中世ファンタジー

私がサーラの化身とも呼ばれる彼女に出会ったのは、昨夜のこと

だった。サーラとは、美を司る月の女神のことである。それは彼女が物腰と微笑の優にやさしく、類い稀なる美貌の持ち主でもあったからだ。噂どおりのその美しさに、私は言葉を失った。

・学園もの

ぼくがさいしょに彼女と出会ったのは、昨日の晩のことだ。

出会った瞬間、ぼくは馬鹿みたいに口を開けたまま、その場に固まってしまった。なぜって、こちらにむかって颯爽と歩いてくる彼女はあまりにきれいだったから。

・時代もの

わたくしがあのお方をお見受けしたのは昨夜のこと。月に照らされるその顔は、夜目でもわかるほどうつくしいものでした。

・ハードボイルド

俺があの子を見たのは昨夜のことだ。

美しい女だ。

朴念仁と揶揄される俺でもそう思った。

・エッセイ調

昨夜、確かにひとりの女性と出会ったはずなのに、今となってはあれは夢ではないのだろうかという気がする。というのも、私は生まれてこの方、あんな美しい女性にお目にかかったことがないからだ。

……と、まあ巧いかへたかは別にして、なんとなく違いはわかるのではないでしょうか。

この例で言えば、時代ものの文章では

・話者は女。

・おとなしい、内気な女性。

・教養のある喋り方をすることから百姓女ではない。おそらく武家か、商家の内儀。

・「お見受け」と言っていることから、相手は自分より身分が上。という情報が含まれています。

小説世界とキャラクターが決まれば文体はおのずと決まるし、小説世界と乖離した文体で小説を書くことはできません。（面白いかもしれないけど）

特に一人称小説においては、不用意な文末ひとつで小説そのものをぶち壊してしまうこともあります。言葉遣いはもちろん、改行のタイミングや、何を漢字で何をひらがなにするか、それによって文体のニュアンスを作り上げていきます。

『夜目でもわかるほどうつくしいものでした。』が、『夜目でも判るほど美しい物でした。』となつては、雰囲気がるで違ってしまいます。

ハードボイルドの例文だって、

オレがあのおんなを見たのは昨夜のことだ。
うつくしいオンナだ。

と書いては、同じ文であっても文章のトーンの違いから軽薄ポルノみたいになってしまいますよね。

あまりに流暢な文章に、あえて違和感を伴う言葉や漢字を入れて目を止めさせるといふ高等テクニクもありますが、それこそ「この人は悪文でさえ巧く使いこなせるのだ」ということが見抜けるほ

どの読解力を持つ読者でないと、単に「ヘタクソ」と言われてしまいます。

「何を、どれだけ描写するか」というのも以前に少しお話ししましたが、本来はそれだって書くものによって変えてゆくべきです。

学園ものなんかでは人や風景はあまりくどくど書かず（というか、できる限り排除して）「くつきりした顔立ちが印象的な背の高い女性」と、一言で済ませてしまうような投げやりな書き方に、心理描写は感傷的な言葉で綴ると雰囲気醸成に効果的です。

反対に中世を舞台のファンタジーなんかでは、人物や風景はくどいぐらいに書き込み、人の生死や運命をあつさり書くことで原始心性を浮かび上がらせます。こうすることで小説から近代臭さが抜けます。

で、翻って『KAGEROU』です。読んでみて、「文体で小説世界を構築する」なんて芸当はまったくできていません。妙なところがカタカナになっていて鼻につくし、書かれていること以上の情報は何もない、中身がない文章だから、普段あまり本を読まない人にとっては「読みやすい」となるのでしょうね。でも、それは決して褒め言葉ではないと思います。

ただ、文章はともかく、物語自体は面白いと思います。伏線の張り方や、破綻のないストーリー運びはさすがプロだと感嘆します。「よくある話」という意見もあるようですが、小説のテーマが人々の憎愛に集約される以上、「よくある話」がもつとも面白い話でもあるのです。しかし、本来それにはオリジナリティ溢れる小説よりも、ずっと高いレベルの文章力を求められるのですが。

小説にしろ何にしろ、エンターテインメントにおいては「面白いこ

と」が第一条件ではありますが、「面白い小説」「良い小説」ではありません。

単純に面白い話を作りたいのなら、何も小説である必要はありません。漫画だって映画だって、それこそシナリオライターだって、面白い物語、感動する話はいくらでも作れます。

どうして小説なのか。自分を、物語を表現する手段としてどうして小説を選んだのか。小説が文芸、文章の芸術である以上、文章に対するこだわりや技巧のない小説は、いくら面白くとも「良い小説」とは言えないのではないでしょうか。

第十回 キャラクターのDQNネーム

「悪文排斥！」第十回。早くも書くネタがなくなってきたので、今回はキャラクターの名前について語ってみます。

「キャラクターの名前なんてテキトーだよ」とか、「名前なんて何でもいいんだよ」と言う人もいるかもしれませんが。

もちろん、ほとんどの作者はこだわりを持ってキャラクターの名前をつけていると思いますが、残念ながらごく稀に主人公の名前を知った瞬間に萎えてしまふ、読む気が失せてしまふような作品もあります。

「名は体を表す」という言葉もありますが、すべてを文章で表現する小説において、キャラクターの名前は「顔」であり、特にプロほどのくつきりした性格心理によるキャラの書き分けができないアマチュアにとっては、「誰が誰なのか」を見分ける上でとても重要なファクターです。

極端なことを言えば、『沙也香』という女の名前で男のキャラだとしたら、違和感があるどころか感情移入なんてとてもできません。そうでなくても、『雄介』や、『強志』なんてイカツイ名前で、『病弱で蒼白い顔をした』とか、『伶俐という言葉がぴったりの』という描写をいくら重ねても、説得力はないでしょう。

反対に、さわやかで明るく、友達も多い男が『颯太』だったりしたら、（なんて安直な名前だ……）それほど多くの描写を必要としなくとも、なんとなくイメージは湧きやすいのではないのでしょうか。

現代が舞台なのに決してあり得ない名前というのも、はなっから

「この世界は嘘だ」と言いふらしているようなものです。

『すめらぎしおん
皇城紫音』

『みなつきみこと
海那月命』

いったいどの暴走族ですか？

しかもこんな名前のキャラが「どこにでもいる普通の高校生」だったりした日には！

……まあ、リアリティを持たせる筆力に自信があるなら結構ですが。

ファンタジー小説においても、主人公や主要キャラはすごくカッコいい名前がついているのに、王様がしょぼいネーミングだったりすると一気に興醒めです。

あり得ないでしょうけど、『サム』なんて庶民的な名前を王様につけてはいけません。（例え本当に『サム』という王様が実在したとしても！）どんな重々しい台詞も、すべて上滑りしてしまいます。（コメディならいいかもしれない）

以上は極端な例ですが、案外やりがちな失敗を挙げてみましょう。

・ひとつの作品の中で名前の語感が被るキャラが存在する
『せいぜ聖也』と、『せいじ誠司』、もしくは『こうせい康生』など。

・同じく漢字が被る
『せいぜ征哉』と、『まさし征志』など。

・語感が悪い

『レカ』、^{ふじきよしき}『藤木芳樹』など。

・小説に限らず、漫画や映画に登場したキャラクターの名前に似ている。もしくはまったく同じ名前のキャラがすでにいる。

意図的でなくとも偶然の一致はあると思います。しかし、みんなが知っているようなキャラを連想させてしまうような名前は、いくらオリジナルを謳ってもそれまでのイメージが強すぎて、なかなか「別人」として認識してもらえません。

もちろんこれを逆手に取ることもあって、例えば実在する人物をモデルした場合などは、その名前も似せておくと書き手も読み手もイメージしやすくなります。

これは例えば、東野圭吾氏の『ガリレオ』における主人公、『湯川学』も、物理学者『湯川秀樹』をもじっているのでしょう。

ちなみに私のペンネーム『円城寺まどか』は、少女漫画『ガラスの仮面』に出てくる登場人物と同じだそうです。これは偶然であり、何の関係もありません。

アマチュア作家が完全に人物の書き分けができるのは四人が限界、と言われる。読者が混乱しないためにも、主人公を含めて主要な登場人物はちゃんと見分けのつく、特徴的な顔（名前）を与えるべきです。

もちろん、「あり得ない名前」「特徴のある名前」ではありません。よく言われることですが、推理小説における名探偵の多くは、「特徴的な姓＋平凡な名前」です。

『明智 小五郎』

『金田一 耕助』

『伊集院 大介』

『江神 二郎』

『巫 弓彦』

決してこんな名前の人はいないのだろうけど、リアリティはある。過不足のない、絶妙のネーミングですね。

話は少々脱線しますが、今年の『日本ホラー小説大賞』受賞作、『お初の繭』^{まゆ}に出てくる脇キャラの名前が最高でした。

物語は明治の製糸工場を舞台にしたホラー小説なのですが、繭を買い付けに来たロシア人バイヤーの名前が、なんと『フルチンスキー』。(笑)

「フ、フルチンスキーさん……！」

文章のセンス、文章音感の有無というのは、こんなところにも出てしまうようです。

第十一回 痛々しい台詞

第十一回『悪文排斥!』。今回は台詞について。

台詞と言えば私、円城寺まどかの苦手とするところで、第七話の『円城寺まどかがナンボのもんじゃい!』でも散々に突っ込まれていました。自らの傷をえぐるようですが、もう一度蒸し返してみます。

・セリフを大切にしてください

小説におけるセリフは「それぞれのキャラの人格を表現し、書き分ける」上でとても大切なツールと言えます。したがって――すべてをそうするのは事実上不可能とも言えますが――小説におけるセリフは「それぞれのキャラの価値観・社会観・人生観などを内包した、読者の内面にも届くだけの効力を持つもの」であつた方が、明らかに有利と言えます。

一方、現状の本作のセリフには「はい」「もしもし」といった、キャラの人格表現とは無関係の心底どうでもいいセリフが多く含まれており、やはり見直し(「自分の大切な小説のキャラに、そういうセリフはただの一言も口にさせない」というハードルを設けること)あなたが敬愛する作家がその種のセリフを書いているか確認すること)が必要と感じます。

……と、いうことだそうです。

そんな私がおこがましくも台詞について講釈を垂れようというんですから、説得力なんぞあるはずありません。言えることも基本以下の低レベルなことにとどまるでしょう。

「痛々しい台詞」。充分に自戒を込めています。

痛い台詞 その一

「「ええ〜！」」

と、カギ括弧を重ねる台詞。

『異口同音』という言葉を知らないのでしょうか？ どうしようもなく稚拙に感じます。どだいこんな日本語表記は「無い」のですよ。

しかし『なろう』の作品において、確かに「カギ括弧を重ねることでは表現できない台詞」というのをお見受けしたことがあります。（厳密にはカギ括弧ではありませんが）。それは設定や諸々の条件が重なったことですが、一概に禁止とは言えないのかなとも思いました。まあ、極めて例外的なことですが。

痛い台詞 その二

「ワハハハハハハ！」

「うわあああ！」

と、台詞で笑いや悲鳴を表現する。

いや、これも絶対ダメとは言いつれないかな。笑いはともかく、悲鳴は私もやってしまっているし。でも読む人によっては

「無神経な日本語」

「デリカシーの欠如」

に、感じられるようです。とりあえずやらない方がいいみたいですね。（なんか弱気だ……）

痛い台詞 その三

「いやあ、今日もいい天気だ」

ぼくは窓を開け、伸びをして呟いた。

「あれ、なんだこれは」

窓辺に見たこともない虫がとまっている。ぼくは不思議に思って顔を近づけた。

「何だろう。見たこともない虫だ」

見る角度によって羽の色が変わる。赤いと思うと次の瞬間には緑色に。そしてすうつと色が薄くなる。

「辞典に載ってないかな。調べてみよう」

ぼくは書棚に手を伸ばした。

台詞がイタいというよりはキャラがイタい。こんだけ独り言の多い奴っていったい……。

そういえば、「三人称・神の視点は地の文で心理描写ができないから」と言って、思ったことを全部台詞で独白している自称、神視点の作品があつたっけ。作法としては間違っていないけど、小説としては間違っている気がします。

痛い台詞 その四

「あ、あれは確か昨日ぼくが作ったカレーライスじゃないか。朝

出かけるときはちゃんと戸締まりを確認したはずなのに。隣の鈴木さんがどうしてこの公園で食べているんだ？」

台詞の状況はさておき、キャラクターに都合良く説明的な台詞を吐かせてはいけません。

「まさか……どんな巨大なドラゴンも一撃で倒すと言われる伝説の剣がこんなところに！」

誰がそんなこと言ったんだよ。伏線もなしに。

「誰か、その子を捕まえて。私のお婆ちゃんが三年も可愛がつている黒猫が……！」

だから、台詞で説明しちゃダメだって。やるならせめて自然な会話の中で。

痛い台詞 その五

「七瀬美波って言ったっけ、アイツ。ちくしょう、惚れちゃったじゃねえか！」

のたうちまわるほどこっ恥ずかしい台詞を吐かせてはいけません。

「実は俺、君のこと……」

「え？」

「いや、なんでもない」

やめてください。ジンマシンが出そうです。

「見ろよ、夕日が真っ赤に燃えてるぜ」

おまえも燃えてしまえ！

台詞を書くときはまず自分で言ってみましょう。恥ずかしくなければOKです。

痛い台詞 その六

「いいわ。それじゃあ約束は明日でも良くてよ」

今どきさあ、「良くってよ」なんて言う女いるの？ 見たことがあります？

ねえ、あなた。おありになって？ 私、知らなくてよ。

まさか台詞の末尾を「ざます」にしたらマダムの言葉になるとか、「ござる」をつければ武士の言葉になるなんて思っている人はいないでしょうけど。

ついでに言うなら特徴的な話し方をさせればキャラの書き分けにつながるわけでもありません。これらは全て知識と想像力の貧困によるものです。

まとめ

いろいろ言ってきましたが、私もほとんどに該当する「痛い台詞」を書いてきたみたいです。集約すれば、冒頭の指摘になるんじゃないか。

- ・小説におけるセリフは「それぞれのキャラの価値観・社会観・人生観などを内包した、読者の内面にも届くだけの効力を持つもの」とする。
- ・キャラの人格表現とは無関係の台詞はただの一言も言わせてはならない
- ・当然、独り言はダメ
- ・会話は一定数繰り返し、ひとつのシーンとして成立させること

はい、出直してきます。

第十二回 円城寺まどかの良文万歳！

『悪文排斥！』第十二回。今回は「円城寺まどかの良文万歳！」^{マシヤ}と題して、私が感銘を受けた文章、描写を紹介します。

まずはプロの作品から。プロなんだから、どこの一文を切り取っても上手いのは当たり前ですが、その中でも「絶品」を選びずぐつてみました。

ジャンルも合わせて記載します。それでは行きます。

グイン・サーガ外伝 『十六歳の肖像』 「闇と炎の王子——ナリス十六歳」より（ファンタジー）

ことに印象的なのはその双の眸である。それは十六歳にしてはあまりにも底深く、考え深く、静かだった。どこか、悲しみに似たものをさえはらんでいる。生来の気品と誇りの上を、けだるい、ものに倦んだようなおちつきがおおっているので、よけいかれは大人っぽく、他の十六歳の少年たちとはまるっきり別の生き物のようにさえ人々の目にうつるのである。

ほっそりとやせたからだはいかにも病弱そうな感じを与えた。かれには、じつと見つめていると、ついと溶けて消え去ってしまいそうな、はかなげな、少女めいた感じと、非常に賢い少年に特有のひそやかで確固たる自負、そして年に似あわぬ、何か諦観に似た老成が、奇妙に混ざりあっていた。その三つの相容れぬものが、とけあうことなく混ざりあって、その結果として、甘やかでつかみどころのない、さし入る光によつてたえずそのひらめきを変える貴タンパク石にも似た、ちよつと例のないこの少年の個性をかたちづくっていたのである。

白い絹のチュニツクに、黒ビロードのサツシュをぎゅつと結び、美しいつややかな髪をぶつとりと肩で切りそろえた、十六歳の病弱で聡明な少年——かれこそは、中原の大国パロの王子アルド・ナリスであった。白くなめらかなひたいを飾っている銀の、宝石を編みこんだ《王家の環》が、かれほどに似つかわしく、かれほどにその血を誇っているものも他になかったであろう。

・解説

個人が書いたものとしては世界一長い小説、『ゲイン・サーガ』の外伝より抜粋しました。物語において重要な役割を果たすパロの王子、「この世でもっとも美しい」と言われるナリス様の描写です。「筆舌に尽くしがたい美しさ」を、筆舌に尽くしてみたのだとか。
(笑)

当然、これ以外にもナリス様の描写は随所にあるのですが、よく考えると「絶対にこんな奴いない!」と断言できます。なのにこのリアリティ……。文章力」って、あると便利ですね。

アルスラーン戦記? 『風塵乱舞』より(ファンタジー)

ダリユーンは人間の形をした災厄であった。力強く、しなやかな腕が宙で舞踏すると、陽光を弾いた長剣が海賊たちの頸部を両断し、潮風に濃い人血の匂いをまじえるのだ。海賊たちは腕力にすぐれ、身も軽かったが、ダリユーンの剣に対抗できる者はひとりもいなかった。右に左に倒され、血の匂いを濃くするばかりである。

ダリユーンの後方につづくふたり、ギーヴとジャスワントの剣技も、海賊たちを圧倒した。流れるように優美なギーヴの剣さばきは、流血の四行詩を歌い上げ、ジャスワントの剣勢はシンドウラの太陽のように激烈だった。

海賊たちの屍は、甲板に次々と横たわり、彼らは天国の寸前で地獄へと追い落とされた。ギーヴが甲板上を走り出す。せまい階段の上に舵輪があり、それを動かしている海賊を斬ろうとしたのだ。階段下に着くまでに二度、刃鳴りがひびき、階段を駆け上がるうとしたギーヴはさらに上方から刃を突き出された。

落下する剣を受けとめ、飛散する火花をあびながら、そのまま自らの剣を突き上げる。強烈な手ごたえが、ギーヴに勝利を知らせた。頸すじから血を噴きあげて、海賊は階段を転落していく。

この間、フランギースの弓弦が潮風に共鳴し、死の曲をかなでている。

・解説

アルスラーン一行と海賊との戦闘シーン。たったこれだけの文章に四人の個性的な戦いぶりを描き、風景の描写まで織りまぜる。まったくムダがないですね。

他にもダリユーンの獅子奮迅の戦闘シーンを描いた一文で、『その様子を未熟な吟遊詩人であれば、「斬って斬って斬りまくった」としか表現できなかっただろう。』

なんていうのがありましたけど。初めて読んだのは二十年以上も前ですが、今も心に残る一文です。

凡人が真似すれば「形容が多すぎる」、「まわりくどい」と感じる文章も、田中芳樹先生が書くとなぜかそれを感じさせません。やはり天才です。

『しあわせは子猫のかたち』より（ファンタジー・推理）

子猫、死んでしまったね。本当に残念。もしかすると、自分が死んでしまったということに、今は気付いていないかもしれない。わ

たしも最初のうち、自分が殺されたことに気付かず、普通に生活を続けているつもりだったから。

でも、子猫もやがて、自分が死んだことに気付くにちがいない。そしてきみのもとを去ると思う。でも、その時が来てもあまり悲しまないでほしい。

わたしも、子猫も、自分が不幸だとは思っていない。確かに、世の中、絶望したくなるようなことはたくさんある。自分に目や耳がついていなければ、どんなにいいだろうと思ったこともある。

でも、泣きたくなくなるくらい綺麗なものだって、たくさん、この世にはあった。胸がしめつけられるくらい素晴らしいものを、わたしは見てきた。この世界が存在し、少しでもかわりあいになれたことを感謝した。カメラを構え、シャッターを切る瞬間、いつもそう感じていた。わたしは殺されたけど、この世界が好きだよ。どうしようもないくらい、愛している。だからきみに、この世界を嫌いになつてほしくない。

今ここで、きみに言いたい。同封した写真を見て。きみはいい顔している。際限なく広がるこの美しい世界の、きみだってその一部なんだ。わたしが心から好きになったもののひとつじゃないか。

・解説

『失踪HOLIDAY』、および『失はれる物語』に収録されている乙一先生の短編。

人目を避けて生きる大学生の主人公と、何者かに殺され、幽霊になった雪村サキ、そして彼女の飼っていた子猫との共同生活が始まる。

抜粋したのはラストシーンで、雪村サキが主人公に宛てた手紙の一部です。

小説に年齢は関係ないけれど、若くして乙一先生の目に映る世界はすでに芸術家のそれであることに、深く感じ入ったものでした。ストレートな言葉が、胸に突き刺さります。

『ヘヴンリーブルー』より（恋愛）

（赤ちゃん……て？）

——信じられない、とか。

（誰と……誰の、赤ちゃん？）

——認めたくない、とか。

そんなこと以前に、脳みそが麻痺してしまつて、うまく働かなかつた。いろいろな考えの断片は浮かぶのだけれど、そのすべてが、まるでビー玉みたいに頭の中のテーブルをころころと転がっていつて、何ひとつ意味をなさないまま向こうの端からぽとりと落ちる。

くずれおちるように枕もとの椅子に座ると、お姉ちゃんの横顔が近くなった。

（中略）

心はもちろんずたずたに傷ついていたけれど、お姉ちゃんのことは今でも好き……なんだと思う。歩太くんにいたっては、憎いけれど、本気で憎いけれど、それでもやっぱり好きで好きでたまらない。その気持ちはどちらもほんとうなのに——そもそも歩太くんからはとつくの昔にきっぱり振られているというのに、どうして私は、二人のことを許してあげられないんだろう。

自分自身があまりにも見苦しく感じられてたまらなかった。あんなにはプライドがないのか、と思つてみる。

ないのだった。少なくとも歩太くんのことに関する限り、私にはとつくの昔にプライドなんかないのだった。

・解説

恋愛小説のバイブルと謳われた、『天使の卵』のアナザーストーリー。『おいしいコーヒーの入れ方』シリーズでもおなじみ、村山

由佳先生です。透明感のある、コバルトブルーのような文体が大好きです。意外性のストーリーよりも、とにかく「文章で読ませる」。
懂れます。

『楽園に酷似した男』より（恋愛・官能）

金を掛ければ掛けただけ執着するというつまらない言い回しはしかし私の身の回りではいかにも本当らしく口にされていた。

やらせてもくれないキャバクラだのクラブだの女の子に大金を費やして費やして費やしただけきつと大きく元は取れるとほとんど新興宗教のいじらしいいじましい信念で今夜も金だけ払いに行く男達とか。

人が見ても神様が見てもただの無職の低脳の癖に性欲と虚妄だけは人一倍だという自称実業家だ芸術家だ役者だの男に貢いで貢いで貢いだだけ必ずや薔薇色の未来となつて彼ではなく私がその薔薇色の人生を甘受できると思い込んでいるあんたの方がろくでもない奴かもと周りに呆^{あき}られている女達とか。

一回騙されたら懲りればいいのに元ヤンキー姐ちゃんが売り捌いている原価の百倍の値段がついた補整下着だの商品を売っているんじゃないやしません愛を夢を売って分けて差し上げているのですとアダムとイブを騙した蛇の口調で迫ってくるマルチの商人にデモンストレーションされる洗剤だのを屠られる子羊の如き眼差しで買って買ってただ買わされるだけの主婦達とか。

けれどそんな奴らに囲まれる私だつて決して高処から彼らを笑って笑って笑っているだけで済むはずがないのは誰よりも私がわかっていることなのだからせめて私は私を笑わないでいられるようにしたかったのに。

・解説

はい、とっても読みにくい文章です。これは冒頭ですが、この小説、なんと全編にわたって読点がありません。一冊丸ごと、ずっとこの調子の文体が続きます。セオリーで言えば悪文なのに、なぜかイメージは心地よい音楽のように頭に流れ込んでくる。

作者は岩井志麻子先生で、もちろんこれ以外は普通の文章でお書きになります。超絶技法を持つ、ごく一部のプロだけに許されるお遊び。生まれ持った文才というのは努力じゃどうにもならんのだなあと、打ちひしがれた作品でした。

かなり私の趣味が出てしまいました。もっと紹介したいのですが、とりあえずこの五作品で。どれも個性的な文体、そして、密度の濃い文章ですね。好みの違いはあるかもしれませんが、誰が読んでも「上手い」と感じるのではないのでしょうか。私もこのレベルに、少しでも近づきたいものです。

第十三回 ファンタジーは何でもあり!?

お久しぶりの『悪文排斥!』第十三回でございます。

前回の続きで『良文万歳?』^{マンセー}をやるつもりでしたが、ちよいと予定変更。今回はとても大切な小説の基礎を語りたいと思います。

というのは、先日、「なろう」においてとても興味深いエッセイを拝見しました。作者様の許可を取っていないので作品名は挙げませんが、「なぜ『なろう』では異世界ファンタジー作品が多いのか」ということを語ったエッセイで（あ、ほとんどタイトルそのままかな……）、その内容を要約すれば、「ファンタジー＝何でもあり」と勘違いしている人が多いのではないか、ということでした。（思いつき要約しました。実際には、この作者様独特の言い回しでファンタジーを語った面白いエッセイです）

なるほど……。確かにファンタジーに限らず、ある意味小説は「何でもあり」ですよ。物語のルールなんて存在しません。ただ、そこにはひとつ条件がありまして、

『小説は例えファンタジーであろうと、現実の社会を映し出していることが基本中の基本』

なのです。

いや、別にとんでもない設定がいけないと言っているのではありません。十八歳の女社長が存在しようと、魔王を一撃で倒す勇者がいようと、ある日突然異世界に迷い込もうと、それは一向に構わないのです。

ただし、「ちゃんと納得できる理由があれば」。別の言い方をすれば、「矛盾のない世界設定で、ちゃんと筋が通っていれば」。

『視点』のときにも言いましたが、小説は読者が手に取った瞬間、作者との間に「どんな設定も無条件で受け入れる」という暗黙の了解とも言える契約を交わします。ですから提示された設定世界を「ありえない」と突っぱねることはできません。

ただ、明らかな設定の矛盾や掘り下げの甘さは「何でもある」とは許されない。なぜなら、（これも繰り返しますが）現実の世界も小説世界も、「ちゃんと筋が通っていること」が最も大切なことだからです。

例えば、殺人がいけないというのはこの世の倫理であって、異世界を舞台にすればそれがまかり通る世界であつてもいいのです。

では、果たしてそんな世界で、人々はどんな生活をしているのか。人を殺すことさえ許されるなら、文字通り無法地帯です。人殺しが許されて、ものを盗むことは許されないなんてことはないでしょう。強い者しか生き残れない。そんな世界に女性や子供は生きていないし、つまりは遠からず滅亡を迎える頹廢の世界です。

百歩譲って、その世界では性別の区別なく『強い者は強い』のだとしましようか。生まれたときから強い奴が生き残る！

……もはや住んでいるのは人間じゃありませんね。（笑）

設定が現実離れするほど、説得力を持たせる文章力は高いレベルが求められます。

それをも無理矢理説得させたとして、いったい誰がそんな世界やキャラクターを自分の身に置き換えて共感するんですか？

よく言われることですが、異世界に飛ばされた主人公が、どうしても言葉が通じるのか。通じるならなぜなのか。高度な文明を持つていて、異人との言語障害がないとか。であれば、他のことはどれだけ発達しているのか。そんな世界に飛ばされた現代人は、どう感じ

るのか。

例えば、黒船を初めて見た日本人がどれほどびっくりしたのか、想像はつきますか？

「正しく想像」するには、当時の時代背景の知識はもちろん、人間への深い理解が必要になります。これは異世界を描くにしたって同じことです。

（うん、これはとても大切な事だと思う。文章が云々、視点が云々よりもっと大切なことだ）

『現代物は書けないからファンタジー』という人もいるのかもしれませんが、現代物が書けない人に異世界ファンタジーは書けません。以前も言いましたが、あり得ない世界にリアリティを持たせるという点で、ファンタジーは現代物とは比べものにならないほどの筆力を必要とするのです。

・なぜファンタジーに現実社会が関係あるのか

それを語るには、まず「小説とはなんぞや」ということです。かなりの難題でいろんな答えがあると思いますが、私はその答えのひとつに「小説とは人を描くことである」というものがあると考えます。

それには、自分のキャラを生きた人間として扱うこと。（これは多くの方が賛同していただけるのではないでしょう）

そうすればおのずから、その人にどんな感情があつてこの台詞を口にするのか——ということ、この人はどんな性格で、どういう境遇で——するとその人格が形成するに至ったどんな『社会』が背景にあるのか、が問題になってきます。

つまり、ちゃんと生きた人間キャラクターを描こうと思ったら、矛盾のない世

界を作り上げ、その社会で育ったことを人間に反映させることが必要となるのです。

そして、小説というのは書き手による現実社会と人間への理解度が、まともに小説世界を形成してしまいます。

一般的に『ライトノベル』を大人が読まない理由は、「現実の社会を映し出しているとは言えない」からです。もちろん、すべてがそうだとは言いませんし、一般小説であつてもそれができていないものは小説として失格ですが。

しかし、例えば「すぐに異世界に適應できるなんて、どんな神経で、こういう育ち方をしたのか」という根本的なことさえ解決していないものを、多少なりとも社会というものを知っている大人は、小説として面白いとは思わないんです。

架空の世界だから——いや、架空の世界だからこそ、虚空であつてはならない。そこはちゃんと感情を持った「人」が住む世界であり、「社会」を形成していなければなりません。

よく、「小説を書くには人生経験が必要である」なんて言われます。人生経験とは、すなわち社会常識の把握と人間への洞察力のことです。もちろん、ただ歳を食えばいいというわけではありません。無駄に年を重ねた大人だっているし、若くても人や世界に対する洞察力を持った人はいますからね。

私が好きな『なろう』の作品に、おこき先生の『ミリオン』というSFファンタジーがあります。技術的なことを言えば、正直申し上げて、これより上手い作品は多々あると思います。しかしながら、これが文章云々なんて言わせないほど面白い。理由はやはり、おこき先生の世界と人間への深い理解度、そしてそれを根本とした確かな想像力があるからなんです。だから私のような中年読者も虜になる。

「現代が舞台の小説は書けないから」、「ファンタジーなら何でもあり。いざとなれば『魔法』の一言で片付くから」という逃げの理由でファンタジーを書いているなら、そんな小説はろくなものではありません。自らの無知と稚拙さを糊塗するために、異世界ファンタジーを選んではいけない。

……とは言っても、私自身も中高生の頃はファンタジーばかり書いていました。それはやっぱり「現代物なんて書けないから」だったし、自分の書いている世界と現実社会がどう違うのかさえわかりませんでした。ファンタジーが理解できないという大人たちを「想像力の貧困」と決めつけていました。今から思えば、自分が何も知らないことさえ知らなかったのです。

社会常識を身につけ、ちゃんと人と付き合い、世界と人間のやることに共感しようと努めること。

ファンタジーに限らず、良い小説を書くためにもっとも大切なことだと思います。

第十四回 小説のオリジナリティとは

『悪文排斥』第十四回です。今回も文章ではなく、良い小説とは何か。ことに、小説のオリジナリティについて考えてみたいと思います。

・オリジナリティの意味

物語のパターンは、無限にあるといえは無限にあるし、限られているといえは限られています。

「物語は二つのパターンしかない。すなわち穴に落ちる話と、そこから這い上がる話」

とか、

「ストーリーはとつくに尽きた」

なんて言われるとおり、正直、今さら完全なオリジナルの小説なんて書けるはずありません。

書けたとしても、一生のうちでせいぜいひとつか二つでしょう。

また、そう幾つもオリジナルの物語が書けるのだとしたら、とつくにプロになっているはずです。

そんな独創的な話は誰も望んでいないし、訳のわからん独自の世界を造るより、誰かの世界観（設定という意味ではなく、例えば「○○の世界」と言われるような、物語の雰囲気）を踏襲する方が、ずっと有効的で理解が得られやすいはずです。

『なるつ』においては「似たような話」は、そこらじゅうに溢れかえり、別の人が書いた違う小説なのに「どこかで読んだ気がする」ものが多いようです。

ファンタジーでは異世界もの、ホラーではゾンビものですか。別段、それが悪いわけではないのですが。

ところが、同じような話でも、片やたくさんの支持が得られ、一方はアクセスが伸びないという現象が起きます。もちろん、文章力や構成力といった技術の差もあるでしょう。

しかし、肝心なのは技術ではありません。

私は以前、「もっとも面白い話や感動する話は、この世で一番ありふれた話だ」ということを申しました。

言い換えれば、「人間の感情で重大なものはすべて、一番ありきたりで普遍的なものだ」ということです。

例えば、恋。——誰かを好きで、嫌いで。好きな人に、自分のことを好きになってももらえない。好きな人に嫌われた、去っていった、死んでしまった。親子の情や嫉妬。または欲望、金銭欲、情欲、独占欲など。

小説というのは基本的にはこうした人間のもっともありきたりな感情を描くもので、決してそう多くのバリエーションがあるわけではありません。

思いついたとした凄く独創的な話——例えば、ある日突然、巨大な昆虫になってしまったなんていうのは、文学かもしれないけれど、いったい誰がそんなものを我が身に置き換えて感情移入するのでしょうか？

これは文章に関してもそうですが、個性を標榜するあまり、とんでもない形容詞を編み出そうとしたり、理解不能の世界を造るなんていうのはアホのやることです。

ともかく、小説の描く感情が普遍的なものである以上、それをもたらしシチュエーションというのは、やはりいくつかの人間関係に収斂しゅうれんされるということです。

そうしてまず、あまりにパターン化されつくして、今さら自分のテクニクではどうにもならないような話ひとつと諦めましよう。

好きな人が不治の病にかかって、残された日々を一生懸命生き、愛し合う——とか。

まあ、『セカチユウ』や『美丘』以上のものが書ける自信があるなら別ですが、まず無理でしょう。

長編なら、多少ありきたりでも展開を売りにすることもできますが、中、短編ではたったひとつの売りが命です。このキャラ、この台詞、このシーン。それがすでに誰かがやっていたのだとしたら、その話はおしまい。書いても意味はありません。

・ではどんなものが「オリジナリティのある小説」なのか

一番大切なのは、「自分はこの小説の、何を一番書きたいのか」を考えることだと思います。いや、『テーマ』なんていうご大層なものではありません。

自分が惚れたこのキャラクター、この決め台詞、感動するに違いないこのワンシーン。何でもいい、何かひとつでいいから、「自分の書きたいもの」があること。そして、それをどう書いたら読者に一番伝わるかを考えること。

ただ何か書きたいだけ。

書きたいものはないけど、小説が書きたい。

みんな、どんな小説が読みたいですか？

こんな動機で書かれた小説は、ただのゴミです。書くのも読むのも時間の無駄。自己満足で書くならいいけど、『なるう』に（もち

ろん公募にも）投稿してはいけません。

なぜなら、小説とは人に何かを伝えるものだから。小説は、読者のために書くものではありません。小説を通し、自分をわかってほしくて書くものです。自分の中に伝えたいイメージがないのなら、小説を書く必要はありません。

ダメな小説とは、ヘタな小説でもなければ平凡な小説でもありません。書き手の感動がないままに書かれた、「伝えたい」という気持ちのないものや、誰にも理解できない独りよがりの小説です。

あんな話がウケるだろう。いや、こっちの方が面白そうかな。

こうした安直なストーリー選びはそのまま中身の薄さに直結し、「またこの話か」と思われるのがオチです。これがオリジナリティの欠如です。

作者自身が自分の作品に惚れ込んでいないままに、読者の共感を得られません。

物語を思いついたら、書く前に「自分の書きたいものは何なのか」を明確にする。そして、それを読者に一番伝わるように書く。

それが、「物語のオリジナリティ」ではないでしょうか。

第十五回 小説と作者

お久しぶりです。円城寺まどかです。『悪文排斥』も第十五回を数えました。

ネタはとづくに尽きているのに、「書きたいことが出てきたら書く」つもりで、完結させないまま放置プレイしています。おかげで約三ヶ月ぶりの更新となっていました。

今回はまたも小説の精神論を語ります。「はじめに」で申し上げたとおり、実力のない人ほど精神論が大好きなんです。ええ、私のことですよ。

このエッセイも、もはや酔っぱらいオヤジの戯言たわごとと化してきましたが……とりあえず自分のことは棚に上げ、今回も立派なことを語ってみせましょう。

すみません、前置きが長くなりました。それでは行きます。

『小説には自分が表れる』

いえ、小説に限らず、絵画や音楽など、芸術と言われるものには自分の心が映し出されます。小説とは自己表現なのだから、自分を出して当然。小説を書く人は、誰だって自分の考えた物語に共感してほしくて書いているはずです。

「でも、本当の自分をさらけ出すのは恥ずかしい」

「こんなことを書いて、嫌われたらどうしよう」

そんな心配をして、自分を出せずにいると感じている人もいるのではないのでしょうか。

もしくは、「小説の中でだったら違う自分を出せる」と思ってい

る人もいるかもしれませんが。

でも大丈夫です。「自分を晒せ」と言っているわけではありません。小説には「自分が出てしまおう」と言っているのです。

作品と作者は別物とする人もいますが、私はそうは思いません。

むしろ小説こそは何よりも雄弁に本人を語ります。普段、どんなに良いことを言っている人でも、根が嫌な奴は嫌な小説を書くし、ケチな奴はしみつたれた小説を書きます。

いくらそれを隠そうとしたところで、偽っていることそのものが本人を表してしまっているんです。

そもそも本来の自分がそうなのだから、自分を出していることにも気づいていません。小説に表れる人柄こそが、その人本来の人間性なのです。（だからって作者の人格否定までしていって意味じゃないですよ。念のため）

小説とはただ紙に（パソコンに？）向かって書けばいいというものではなく、壮大な小説を書こうと思ったら、小さな自分が大きくなるほかはありません。志が卑しいままに、素晴らしい小説を書くことはできないのです。

これは別段、「立派な人間になれ」という意味ではありません。

「立派な人」の書く小説なんて、きつと最高にツマライですからそうではなく、小説を通して読者に自分がどう見られるかを恐れなくて済む人間でありたいのです。

私は、陰惨なホラー小説ばかりを書いています。生まれつき腕がない不具者。病弱な薄命の美少年。受け入れがたい不条理な運命――。

「ありのままの自分」がどうしてもそういうものに惹かれてしまふのだから、それを一番に出してゆくほかはないのです。

書いていて楽しくないことは、一行だって、一文字だって書いて

はいけない。それが、自分の書いたものに責任を取るということではないでしょうか。

もちろん読者に対しても、気に入られようとして自分を枉げてはいけません。誰が、何をどう書いたところで、百人が百人に気に入られる小説などどうして書けるでしょう。全員の意見がぴったり合うことなど、決してないのです。

どう見られるかを気にするより、どんな批判を浴びようとも「これが自分だ」と言い切れる自信を持ちたい。しかし、そのためには自分を磨きたい。センスや好みが違うのは仕方ないけれど、無知や非常識をそしられたくはない。そのときのベストの自分を読者の前に出せなければ恐ろしくて裸の心を晒せるものではありません。

「私が書きたいのは私小説や純文学でもなければ、エッセイでもない。だからこんなことは関係ない」
と思うでしょうか。

自分自身と作品を別物ととらえるかもしれませんが、むしろ無意識に選ぶ言葉やストーリーにこそ「本当の自分」が出てしまうものなのです。それが怖い。だから小細工などせず、どこからどう見られてもたじろがぬ自分になるよりほかはないのです。

「小説とは、その人の内面をすべてうつし出す鏡である」

これは私が崇拜する作家の言葉です。実は私は今でも、「小説に映し出される自分」が恐ろしくて仕方ありません。だからアクセス数や評価ポイントに一喜一憂するし、寄せられる感想を読むのが嬉しくもあり、怖いのでしょうか。「どう見られてもたじろがない自分」になるためには、まだまだ修行が足りないようです。

与太話 その？ 役に立たない応募原稿のルール

今さら基本的な原稿の書き方について、くどくど述べるつもりはありません。『プロっぽい文章』でも申しましたが、改行ごとに一マス空けるだの、カギ括弧の最後は「。」をつけないだのというのは、物書きにとって至極当然のこと、いわゆる文章の身だしなみです。

ただ、身だしなみやマナーというのは、正式なものを求めてゆくと実に細かく、「今さら誰もそんなこと気にしねえよ」というものまであります。

公募に出す原稿においても、本来は細かいルールがあります。ただ、これらを守ったところで、選考に有利になるようなことはまったくありません。今回はそんな「どうでもいいルール」を紹介します。

ワープロ書体を避け、正字で書く

正字とは、新聞類がようやく採用を始めた本来の漢字です。

・「類」↓「？」
・「啞然」↓「？然」
・「掴む」↓「？む」
・「噛む」↓「？む」
・「顛末」↓「？末」
・「体躯」↓「体？」
・「蠟燭」↓「？燭」
・「壺」↓「壺」

と、まあこんなところでしょうか。出版されている本を見ればわかるとおり、ほとんどは正字が使われているはずです。ワープロ書体でもまったく問題はありますが、正字を使うことにより、より高い国語見識をアピールできるそうです。

（縦書きPDFでは、正字は文字化けしてご覧になれません。『なろう』に投稿の際は、むしろワープロ書体でないといけないようです）

禁則処理の体裁

禁則処理というのはわかりですね。行の冒頭に、句読点やカギ括弧の「閉じ」があつてはいけないのです。

これらはパソコンで執筆すれば自動で処理してくれるため、普段は特に気にすることはありません。

しかし、この禁則処理には二種類あるのをご存知でしょうか？

無理やり文字を詰めて句読点を入れる「追い込み」と、原稿の欄外に入れる「ぶら下げ」です。文芸出版物では「ぶら下げ」が一般的なので、応募原稿を印刷する際にも「ぶら下げ」とすることをお勧めします。

（『一太郎』の場合、「文書スタイル」の「体裁」で設定できます）

傍点

言葉を強調したいときに、文字の横に傍点を振ります。あまり多いと文章がうるさくなりますが、効果的に使えば非常に有効なアイキャッチャーポイントになります。

この傍点、『なろう』では黒点を使っている人がほとんどですよ

ね。応募原稿は明朝体で書いていると思いますが、本来、明朝体に振る傍点は、ゴマルビョ、、、、『です。些細なことで、これこそ選考にはまったく影響ありませんが念のため。

原稿用紙換算

公募の要項には、次のようなものがあります。

・原稿枚数及びフォーマット

400字詰め原稿用紙換算200枚から400枚。

データ原稿の場合の出力形式は、A4用紙ヨコにタテ書き、適宜の行間をとり、40字×40行で出力してください。

タイトルの横に、原稿用紙換算枚数をご記入下さい。

このような場合、普通は単純に一枚を原稿用紙四枚に換算します。つまり、 40×40 のフォーマットで百枚書けば、規定の原稿用紙換算400枚ちょうど。

しかしこれ、実際に原稿用紙と同じ 20×20 で置き直すと400枚に満たないのです。

いったいどちらが本当の枚数なのか？

答えは、「どちらでもよい」です。そもそも枚数規定というのはいい加減なものらしく、中には350枚までの規定なのに700枚の作品が一次を通過した例もあるのだから。

まあ、さすがにそれはやりすぎとしても、一割程度の規定オーバーは許されるようです。（もちろん規定枚数に満たない場合も）

ですから、「 40×40 を四枚分とする」としたら規定を越えてしまった、という場合は 20×20 での置き直しを根拠に、逆にちよつと少ない場合は「 40×40 を四枚分とする」を根拠に算出すればOKです。

変に書き加えて文字通り「蛇足」となるよりは、そのまま送ってしまった方がいいですね。もちろん、そのときは正直な原稿用紙換算枚数を書く必要はありません。規定枚数に収まらなくても、規定内の枚数を表記しておきましょう。

梗概って何？

たいていの公募には、1200字程度の梗概を添付するように指示があります。梗概とは、つまり「あらすじ」です。

『なるう』の「あらすじ」とは別物です。

「果たして彼の運命は！ 続きは本文をご覧ください」

なんていうのはいけません。ちゃんと最後まで書いてください。

例えばミステリーであっても、ネタバレを嫌がって

「○○の正体は実は で、それを知った●●に無理矢理×××

……！」

と、肝心なところを伏せ字にするのも御法度です。（なんですかつ、このヒワイなあらすじは！）

ちゃんと要領よく、原稿用紙三枚程度にまとめること。これも、「1200文字に空白は含めるかどうか」なんてことはどうでもいいです。文字数は、あくまで目安なので。

ちなみに、梗概を書くのが苦手という人。どうして苦手なのか教えましょう。（厳しいことを言います。泣かないでね）

それはずばり、「あなたが書いた小説は、1200字のあらすじを書けるだけの中身がない作品だから」です。

何ひとつ重要なシーンがないから、何をどう書けばいいかわからない。（はつきり言ってどうでもいいストーリー）自分で書いた梗概を読むと、あまり面白そうに感じられない。（間違いなくつまらない作品です）

だいたい、小説は書けるけどあらずじが苦手なんてあり得ないです。それは自ら「私は小説がヘタだ」と言っているようなものだからね。

梗概というのは応募前のやつつけ仕事になりがちですが、苦手な人は最初に書いてしまうのもひとつの手です。面白そうならあらずじが書ければ、きっと作品も面白いものができるのではないのでしょうか。

手書き原稿

今どき少数派だと思いますが、「応募はワープロ原稿に限る」という記載がない限り、原稿用紙に手書きで書いて応募してもOKです。ただし、選考には不利です。（どう考えたって読みにくいですからね）

手書きを理由に落選することはありませんが、よほど面白いものでない限り、読んでももらえないと思った方がいいです。それでもあえて手書き原稿で応募する人は、次のことに気をつけてください。

- ・丁寧な、読みやすい字で書く

字のウマヘタは関係ありませんが、殴り書きみたいな原稿はやめましょう。また、いくら達筆だからといって、草書で書き綴るのも控えてください。読めません。

- ・黒のペンで書く

鉛筆はもつてのほかですが、ボールペンも読みにくいのでやめましょう。必ず、「黒インクのペン」で。昔は「黒、もしくは青のペン」と言われましたが、今は黒に限った方が無難ですね。ちなみに鉛筆がNGなのは、何枚もコピーを取った場合に写らなくなるからです。

・修正箇所のある原稿を送らない

締め切り間際のプロの原稿じゃあるまいし、斜線で消して欄外に修正文を書いたような原稿を送りつけてはいけません。もうそれだけで読む気をなくします。

本来は修正液を使うのも不可。一文字でも間違えたら、原稿一枚全部を書き直してください。小説を書く者が、その程度の手間を惜しんではいけません。

応募原稿に限っては、手書きは百害あって一利なし。小説を書くなんてほとんどお金のかからない趣味だし、まして公募を目指すのなら、パソコンとワープロソフト、プリンタぐらいはそろえましょう。（あと国語辞典もね）

その他の注意点

・ページナンバー

原稿には必ずナンバーを振ってください。万が一バラバラになったら、誰にも元に戻せません。

・右肩を閉じる

原稿の右肩を閉じてください。紐で縛るなら、穴を開けてL字形に。ダブルクリップが無難です。厚くなりすぎる場合は二つに分けてもOKですが、必ずひとつの封筒に入れてください。リングはまとまりが悪いのでNGです。

・余計なものを添付しない

編集部への挨拶文は不要。設定資料やキャラクター紹介、世界地図も入れてはいけません。（そんなものを見ないと理解できない小

説を書くんじゃないよ。小説のことは全部小説の中で決着をつけるの！)

・ヘンな匂いをつけない

昭和のラブレターじゃあるまいし、まさかこっそり香水を忍ばせる人はいないと思いますが。よくあるのがタバコの臭い。封筒から出したとたん、「臭え！」と辟易することがあるそうです。これも読む気が失せるとのこと。気をつけましょう。

与太話 その？ 役に立たない応募原稿のルール（後書き）

今回の内容は、半分以上が『円城寺まどかがナンボのもんじゃい！』でお世話になった下読み編集者様の話が元になっています。「くだそうです。」「くらしいです。」と伝聞系の文章が多いのはそのためです。

また、これらはあくまで一個人の見解のため、原稿応募の際は主催者発表の要項をよくご確認ください。

第十六回 円城寺まどかをフルボッコ!? (『霧乃宮一族の滅亡』批評公開)

「悪文排斥」第十六回。今回から数回にわたり、再び拙作の書評を公開します。

批評作業をしていただいたのは『円城寺まどかがナンボのもんじやい!』でお世話になった編集者様。(公募の下読み経験もある現役のプロ編集者です)

評価を受けたのは拙作、『霧乃宮一族の滅亡』。怪談をテーマにした公募の落選作です。

<http://ncode.syosetu.com/n98199/>

すでに「文章、視点に関する基本的なことは問題ない」とのことです、今回は「読みながら指導が入る」という形式になりました。

(指導をよりわかりやすくするため、「作品も合わせて全文掲載」の形を取りました。数回にわたって連載するほどのボリュームになつてしまったのはそのためです)

より実践的な内容ではありますが、相変わらず台詞や構成については同じことを言われていたり。サブタイトル通り、『円城寺まどかをフルボッコ!』の状態ですね。

レポートでは編集者様が言及した部分を色分けしてわかりやすく記載していたのですが、画面上ではそうもいきません。編集者様の言葉は『編)【】』として、それに対する私の言葉は『ま)』とします。

それではさっそく行ってみましょう。

編)【おことわり】

作業の最初に「表記揺れ」を実行しました。応募作「外行きの文章ですので、やはり事前に「最低限の瑕疵つぶし」を経ていたほうが印象はよくなります（一太郎/A TOKという優れたツールをお使いなのですし）。お手許の元原稿と履歴なしファイルでの表記揺れ/文体実行の結果を見比べてみるのもおもしろいと思います（「履歴なしファイル」作成後にも手を入れているので、「履歴のない修整点」が何箇所ありますが、これについてはご容赦ください）。

また、「作品内容から漢字表記を多めにした」とのことですが、これには疑問が残ります。言葉は単なる暗号、読者の脳の中で文意（「書き手が暗号に封入したもの」）がデコードされて初めて「存在」となるものですので、表記体裁にこだわってもほとんど意味がないと考えられるからです。例えば、「平易かつ明快な文章でありながら、ぞつとするような恐怖を誘う」、こんな観点を持ったほうが有意義なのではないでしょうか。

ですので、「多くの『プロ作家』の原稿にも散見する、どうにも違和感の残る漢字表記（これは編集・校正に携わる者特有の感覚かもしれませんが）」については、ひらがなに置換しました。特に「云う」、これは辞書類に規定のない「非正式の漢字表記」ですので、「多数表記」ではありましたが置換しました。

ま)作品の時代背景からあえて難読文字を多用したのですが、さっそくダメ出しされましたね。

しかし、僭越ながら、

＜表記体裁にこだわってもほとんど意味がない

とは思いません。「平易かつ明快な文章でありながら、ぞつとするような恐怖を誘う」のはまさしく私の目指すところでありますが、文体とは小説世界に則した言葉の選択や、何を漢字で何を平仮名にするかといった些細なことから構築するものだと思います。

まあ、きつと今のところは「そんなことにこだわっても自己満足の域を出ない」ということでしょうね。そんなわけで、ここに掲載された作品は全文にわたって校正が入っています。

よろしければオリジナルの原稿と見比べてください。（『なろう』投稿分とは章立てが異なります）

序章 霧乃宮紗江子の死

やさしい母でした。

うらかな春のそよ風のように、その顔にはいつも柔らかな微笑みを浮かべていました。

着物を着て庭の桜の木の下に立つその姿は、まるで一幅の絵画のように美しく、私たち子供にとっても自慢の母でした。

江戸時代から薬問屋として栄えた名家、霧乃宮の末裔。大正の御代^よとなった今ではすっかり落ちぶれてしまいました^みが、気高い矜持だけは失わなかったのでしょう。年老いても、その立ち居振る舞いには優雅なものさえ感じられました。

長らく患っていた肺病のせいで、二年前、ついに床に臥せってしまつまで、母はあの古く薄暗い霧乃宮邸で、孤独な毎日を過ごしていたのです。

家を出ていった彰一兄さんへの恨み言は、たまに訪ねていく私にも、玲子姉さんにも漏らすことはありませんでした。思い浮かべる

母の顔は、いつも慈愛に満ちた微笑みを浮かべています。本当に、やさしく誇り高い母だったのです。

だから――。

だから今、死の間際にある母の姿が、私にはどうしても信じられませんでした。いえ、私だけではありません。姉夫婦の屋敷、矢野邸。――その離室に集まった誰もが、玲子姉さんにいも、亮平義兄

編）【応募原稿でのルビは、よほど特殊な読ませ方をする場合以外避けたほうがベターと思います。読む側としては正直煩わしいですし、「ルビで小細工するより前にやるべきことがあるんじゃないの？」が、下読みの偽らざる実感だと感じます】

さんも、そうして、駆けつけたお医者様までも、その顔に恐怖と驚愕の色を浮かべ、たじろぐように後ずさったのでした。

「こんな……こんなことがあるのですか」

亮平義兄さんが、かすれた声で言いました。布団に横たわる母を指す手が、目に見えて震えています。亮平さんにすがりつくようにしている玲子姉さんの面は、薄暗い洋燈の下でもわかるほど蒼白で、声も出ないようでした。無理ありません。三日前に吐血して以来、意識のなかったはずの母は、低い呻き声を上げながら、射抜くような目で私たちを見ているのです。血走った双の目。白髪は逆立ち、唇はめくれ、それはまるで鬼が乗り移ったかのような、恐ろしい怒りの形相でした。

「突然意識が戻るのには、そう不思議なことではない。人間には、まだ説明のつかないことがいくらかもあるからのう。きっと、紗江子さんは何か言い残したいことがあるのではないか？」

傍らで見守る、年老いたお医者様の声は冷静なものでした。しかし、落ち着いた口調とは裏腹に、いちばん驚いていたのはお医者様自身だったでしょう。もう決して目覚めることはないと自ら診断し、死を迎えようとしていた母が、いきなりカツと目を見開いたの

ですから。肺病特有の壊れた笛の音のような呼吸と、土色にむくれた両の足。死は、すでにそこまで迫っているというのに。

それは、目覚めたというよりは、何かが憑依したといったほうが正しいのかもしれませんが。眉間に皺を寄せ、大きく見開かれた目。寧猛な鼻と、今にも？みつかんばかりの口。昔日の面影はどこにもない鬼の形相。——こんな恐ろしい顔をした母を、私たちは見たこともありませんでした。

地の底から何かが這い出てくるような獣じみた呻き声は、離室の窓を叩きつける春の夜の嵐と、闇を引き裂く雷光と相まって、今にも姿の見えぬ魔物が現れる前触れのようにです。私は思わず、ごくりと唾を？み込みました。

本当に、これが母なのでしょうか。あのやさしく、凜とした表情の裏に、今まで鬼の顔を隠していたのでしょうか。私は霧乃宮紗江子の娘として、三十七年もの間まったく気づきませんでした。今まさに命の灯火が消えようとしている瞬間、どういわけか母はついにその仮面を脱ぎ捨てたのかもしれませんが。

「お母ちゃんが言いたいことって……？」

亮平さんの腕をぎゅつと？んだまま、玲子姉さんが上擦った声で、誰にともなく問いを發しました。

「そこまではわからん」

枕元で見守るお医者様が、答えにならない言葉で返します。

母の心残りが何なのか、私は何となく予測もついていました。私たちに一言も愚痴ることはありませんでしたが、

？それはおそらく、霧乃宮の家に戻ってこない彰一兄さんのことでしょう。二十年前、放蕩にふけていた父がついに帰らなくなると、それを機に、彰一兄さんも母と私を残して家を出ていきました。カフェで出逢った、女給との駆け落ちでした。

女学校を出た私も、その二年後には結婚し、母は長い間、あのただっ広い霧乃宮邸で、孤独な毎日を送ることになりました。

あれつきり、一度も姿を見せない彰一兄さん。母はきっと、最後に息子に一目会いたいのに違いありません。？【この箇所の指摘については後述】

私は怖いというよりも気の毒で、母が横たわる病床ににじり寄りました。

「お母ちゃん、どうしたの？ 何か欲しいものがあるの？ ——みんなここにいるよ。お母ちゃんのために、みんな集まったんだよ」私は幼い子供に言い含めるような口調で話しかけました。すると母は、そんな私さえも般若の面のようにつり上がった目で見据えるのです。真っ赤に充血した目の奥には、確かに憤怒の炎が渦巻いていました。

そうして、あろうことか母はその口から言葉を発したのです。

「……まあだ……ここに来ておらん者が……おる——」

それは、明らかに母のものではない、ひどくしわがれた低い声でした。さすがのお医者様も、思わず小さな悲鳴を上げます。あまりのことに、亮平さんと姉さんは馬鹿みたいに口を開けたまま、声も出ないようでした。二人寄り添い、目の前で起きている恐ろしい事態に震え上がっています。

私は、怖いとは思いませんでした。どんな変貌を遂げようと、ここにいるのはたった一人の母。もう、余命幾許もない私の親なのですから。

「お母ちゃん、みんないるよ。私も、お姉ちゃんも、亮平さんも」
「嘘をつけ！」

母はぴしゃりと言いました。その顔が、さらに怒りに引き歪みます。

「まだ……みんなそろってはおらん——」

どうしてそんなことがわかるのでしょうか。どうして、私の言うことに答えられるのでしょうか。もう、とつくに目はこの世を映してはいないはずなのに。耳は轟く雷鳴さえ聞こえていないはずなのに。そ

うして、死期はすぐそこに迫っているのに。それなのに母は、今にも？みかからんばかりの勢いで吠え立てるのです。本当に、悪い憑きものにも取り憑かれたようでした。

「まだ、誰か来ていない親族がおられるのか？」

少し冷静さを取り戻したのか、お医者様が声を潜めて尋ねました。姉夫婦は互いに見交わし、首を振ります。答えるつもりはないようです。

「実は、長男が――」

私は姉夫婦を気に懸けながら、遠慮がちに口を開きました。

「香奈恵！」

「香奈恵ちゃん――！」

編）【ここまでで感じることをお伝えします】

まず、作品冒頭から多数の固有名詞（「人物」を登場させるのは定石から外れます。読者が一度に識別できる人数はせいぜい3人、それも各人物のキャラ立てがすばとおこなわれるのが前提で、名前／立場だけでは識別できないのです（現状では「キャラ立て」の要素はほぼ皆無、例外的に言葉が費やされている「母」についても――悪言をお許してください――美文調の記述と感じます）。したがって、この時点で「『誰が誰だかわからない』なにがなんだかわからない」事態が発生しつつある」と言えるようなのです。読者の側には「繰り返し読んで『誰が誰か』を記憶しなければならない義務」はないわけですから、「読者にすんなり記憶してもらおう工夫」を心懸けてください。

また、この場面が冒頭に配置された理由は「基本的な事実関係を読者に提示する」だと思えますが、ならば、その「伝えておかなければならない事実」を、潔く、すばと、主人公自身の「声」で伝

えるのが、これも基本です。

「実は重要でない場面をだらだらと進行させながら、強引な回想を繰り返して解説をする」。これもお伝えしにくいことですが、現状の書き方はまさにその「多くの応募者が犯す誤り」に当てはまってしまうようです（「書き手の都合のみで」「読者の都合を考慮しないで 提示されている解説」と考えられる部分を『』で表示したので参考になさってみてください）。

いずれにせよ、作品冒頭に関しては読者も覚悟しているので、「書き手の都合による解説」もある程度は受け入れてもらえます（ただ、その「解説」そのものにできるかぎりの魅力を与えるのが書き手の義務とも言えるのですが）。とにかく、「場面記述と解説の混在（？や、のちの？の記述が作品もしくは各ブロックの冒頭もしくは末尾 以外にある）」、これだけは避けるようにしてください。

以下、編集者によるリライトです。

《一家・一族の歴史や確執などというものは、他人から見れば実際にどうでもいい話だろう。実際、わたしの一家に起こったものもろの出来事はいくぶんの教訓、そして現象面での猟奇性のようなものを含んではいるものの、それを他人に伝えることに関しては正直躊躇せざるを得ない。

ただ、最初から最後まで「それ」に立ち会ったがゆえの鮮烈な印象といったものがあるのも確かで、この感覚をなんとかしてわかってもらいたいという否定しがたい感情があるのも事実なのだ。

だから、拙い筆と自覚しつつも、あえて「それ」を書き記してみたい。

前提になるのは、絶望の中で死んだ母の憎悪、そしてその怨嗟の対象である私の兄・彰一の放蕩だ。

いまから二十年前、明治三十六年の夏のある日、明け方にこっそり戻ってきて着替えなどを漁りはじめた兄を、激昂した母がなじつ

た。

「おまえは本当に理解しているのかい。いま出ていったら、この家の敷居は二度とまたげないんだよ。しかも、相手があのおぼずれの女給とあつては、もう世間の笑いものじゃないか。この家を守るためには、おまえの戸籍さえ抹消するしかなくなるんだよ」

当時九歳だった私は兄の部屋に向かいで寝ていたわけだが、細く開けた障子の隙間から見える寝乱れた寝間着姿の母は文字通り般若の形相で、手許に包丁でもあればためらいなく刺し殺していただろう――」以上は結末を読まない時点（「ここより前だけを読んだ時点」）で書いてみました。

案の定、姉夫婦は血相を変えて異口同音に私を咎めます。私は口を噤み、力なくうなだれました。

？姉夫婦の前で、彰一兄さんのことは禁句なのです。

それは、仕方のないことかもしれません。家を出た彰一兄さんに代わり、動けなくなつた母の面倒を見ていたのは、亮平さんなのですから。年老いた病気の母を、ひとりで放っておけない。といって姑のいる家に嫁いだ私にもどうすることもできません。私は唯一の寄る辺として、亮平さんを頼つたのでした。

亮平さんは、母を自分の家で看ると言ってくれました。自らの親はいないとはいっても、妻の親を引き取るなんてことはなかなかできることではありません。地元の名士、霧乃宮の者が、孤独な最期を遂げるなど世間の恥。いえ、母の自尊心だつてそれを許さなかつたでしょう。本当に、亮平さんには感謝してもしきれません。私たち霧乃宮家の者は、亮平さんに頭が上がらないのです。

その亮平さんが母を引き取る条件として挙げたのが、彰一兄さん

との関係を絶つことでした。実は、私たち妹には、彰一兄さんは自分の居場所を告げていたのです。それはここからさほど遠くもない場所で、ハイヤーで迎えに行けば、母の死に目に間に合うかもしれません。

しかし、季節の折の手紙のやりとりさえも、この一件があつてからは、亮平さんに禁じられていました。それは、自分勝手に家を飛び出した彰一兄さんに対する報いなのです。母が臨終の間際にあつても、彰一兄さんは呼ばないこと。死に目には会わせないこと。？

「どんな事情があるのか知らんが、最後『最期』死にざま／死の瞬間』の望みぐらいいかなえてあげるのが子のつとめではないのか？このままでは、紗江子さんが気の毒じゃろっ」

何となく、事の次第を察したのでしよう。お医者様の口調は、諭すようでした。それは言われるまでもありません。私自身が、どれほど口惜しいことでしょう。恩ある母の、最後の願いさえ聞き届けてあげられないなんて！

私はすぐるような思いで、亮平さんを見ました。しかし無情にも、亮平さんは頑として首を縦には振りませんでした。人の死を、母の死を持つても許せないことなど何があるのでしょうか。

所詮、これが赤の他人と血のつながった親子の情の違いなのでしょう。でもそんなこと、口が裂けても亮平さんには言えません。孤独な母の看病を引き受けてくれたのは、他ならぬ他人の亮平さんなのですから。

「——早く、呼べ……あの子を、早くここに呼んでくれ」

ぞつとする、悪魔めいた声が狭い部屋に木霊します。窓から差し込む稲妻が、暗い離室の中に夜叉のような母の顔を蒼白く浮き立たせました。ひよつとして、母の魂はすでに黄泉への旅路に向かつていたのかもしれませんが。私たちの目の前にいるのは、老婆の姿をした鬼——悪鬼そのものでした。

私たちは恐れ、戸惑い、絶句するばかりです。

「——おつて……」

また、母が何か言っています。

「何？ お母ちゃん」

「謀^{たばか}りおつて……おまえらは、よつてたかつて儂を謀りおつて——」

私は心底驚きました。何を言っているのでしょうか。母は、いったい何を恨んでいるのでしょうか。それはあまりに呪詛の響きに充ち満ちていて、死の間際の意識の混濁の中で発せられた台詞とはとうてい思えませんでした。やはり、母は何かを恨んでいるのです。

「お母ちゃん、何を言ってるの？ 私たちがお母ちゃんを騙すなんて、そんなことするわけないじゃない」

玲子姉さんは遠巻きに、弱々しく言いました。すると母は、さらに眉根を寄せて玲子姉さんを睨^ねめ付けました。

「黙れ」

私たちは戦慄し、動くこともできません。もう、半ば死んでいる老婆に、誰もが逆らえずにいたのです。爛々と狂気の光を放つ目で、射すくめられたみたいです。さすがの私も、手はじつとりと汗ばみ、背筋に冷たいものを感じました。

「姉さん、お母ちゃんは何のことを言っているの？ 謀^もるつて——」

「そんなこと私が知るわけないでしょう！」

玲子姉さんは半狂乱になり、泣きわめくばかりです。

「亮平さんは？ お母ちゃんの言っていることに、心当たりはないのですか。それとも、やっぱり彰一兄さんに会いたいのでしょうか？」

「し、知らん。俺は知らんぞ。恨まれることなど何ひとつない。だいたい、人に世話になつておいて何て言い種だ。彰一君に來られたら、俺の立場がないことくらいわかるだろう。えい、こんなことなら……！」

母など放っておけばよかった——さすがにその一言は娘の私たちの前で言つてはいけなないと気づいたらしく、亮平さんは口を噤みました。かれがただの憐れみや義憤に驅られて母を引き取ったわけではないことはわかっていました。

亮平さんはただ――。

いえ、今はよしましよう。どんな理由があれ、母が世話になったことには間違いないのですから。それに、今さら彰一兄さんにこのこ来られては、亮平さんの立場がないことも確かにです。生きて彰一兄さんに会えないことは、母も承知の上でしたし。

きっと私たちは親不孝な子供なのでしょう。死の床にある母の、最後の願いさえかなえてあげられないなんて。窓硝子に激しく叩きつける雨音は、彰一兄さんとの邂逅を果たせぬ母の、慟哭のようでした。

「おまえたち――よくも……」

母の恨みは、よほど根深いのでしょうか。ついに、動かぬはずの体を起こそうとします。私たちは恐怖に怯え、身動きすらできせん。まさか、本当に獲って喰われるのでしょうか。――しかし、それが母の最期の言葉でした。次の瞬間、母は奇妙な音とともに、大量に吐血したのです。

「お母ちゃん！」

布団に撒き散らした鮮血は、まるで地に落ちた紅椿。肺が溶ける饅えたような甘い匂いは、花瓶の中で腐った切り花と同じ匂いでした。

地獄の花畑と化した布団の上で、母は力ツと目を見開いたまま、苦悶の表情で事切れていました。

「ご臨終です」

枯れ木のような手を取り、お医者様は厳かに告げました。それを聞き、私たちは悲しむどころか安堵の息を吐いたのです。

春の夜の嵐は、さらに激しさを増したようでした。

編）【 結末まで読んだのちの印象として、「序章はそもそも不

要？」と感じます。」

ま）ふ、不要ですか！ 情報の開示とそのやり方がマズかったのかな。しかし初っぱなから容赦がないですね

「悪文排斥」第十七回。引き続き、批評の掲載です。

第一章 桜の下に棲まう鬼

(一)

母、紗江子の遺体は、葬儀のために霧乃宮邸に戻ってまいりました。

編)【物語をこの一文から始めても問題ないように思えます】

久しぶりに訪れた、私の実家――。塀に囲まれた重厚な日本邸宅は、先代の霧乃宮家第三代当主、霧乃宮籐太郎が建てたものでした。門をくぐると玄関まで飛び石が続き、左右に広がる庭には、松の木やら、椿やらが立ち並んでおります。もう少し春が深まればツツジが咲き誇り、見事な色合いで庭を染めるのでしょう。

しかし、そんな自慢の庭も長い間手入れがされておらず、今では枝も伸び放題に伸びています。昨夜の嵐から一転した春晴れもその陽差しを遮られ、広大な屋敷は鬱蒼とした印象を与えるのでした。そのせいか、季節外れの寒さがいつそう身に滲みます。縁側から見える庭の桜は五分咲きでしょうか。天気はよくとも思わぬ花冷えに、せっかく咲きかけた花びらは縮こまってしまったようでした。

玄関をくぐると、家の中は湿気った黴臭い空気が漂っていました。霧乃宮邸は広く、部屋は大小合わせて十二を数えます。かつて薬問屋として栄えていたときには、屋敷の中に幾人もの使用人を住ませ、寝起きを共にしていたのでした。しかし、それも霧乃宮紗江子

が養子として迎えた第四代当主、つまりは私の父である竜三に代替わりしたときを境に、商売は立ち行かなくなっていました。

何のことはありません。父、竜三は突然手に入った莫大な金にたがが外れ、放蕩にふけるようになってしまったのです。

霧乃宮の財産をほとんど食い潰し、拳げ句の果てに出奔してしまつたとき、母はむしろ、ほっとした顔を見せておりました。――大切な家屋だけは失わずに済んだ――と。

女郎に入れ込んで出ていったと聞かされたのは後年のことです。そんな頃、時を同じくして彰一兄さんがカフェの女給と駆け落ちしたというのは皮肉なもので、口さがない近所の人々からは、「親子そろって商才よりも色事に長けている」と、侮蔑を込めて噂されたのでした。

やがて私も嫁いでいき、一人残された母が暮らすには、霧乃宮邸はあまりに広すぎました。部屋のほとんどは文字通り開かずの間だつたようで、家の中の空気は淀みきつています。取り敢えず、雨戸も障子も開け放たねばなりません。私たちは時季外れの寒さに震えながら、家中の襖を開けて廻りました。そうして仏間に布団を敷き、母の遺体を北枕にして安置します。霧乃宮紗江子逝去のお触れは、すでに廻っていたのでしよう。葬儀の段取りをする「お取り持ち」と呼ばれる近所の方々が、次々と屋敷を訪れていました。

私たちは仏壇に？燭を灯し、死臭を隠すための香を焚くと、あとはもう、することがありません。死者の身内は葬儀に手も口も出さないのが、この地の仕来りでした。

「お婆ちゃん、ねえ、どうして起きてくれないの？　由希子が来たんだよ。由希子だよ。ねえ、お婆ちゃん」

物いわぬ骸と化した母に、姪っ子の由希子ちゃんがすがりつきま

す。
「由希子と遊ぼうよう。お手玉しようよ、お婆ちゃん」
「由希子、やめなさい」

涙まじりに呼びかける由希子ちゃんを、玲子姉さんはそつとなだ

めました。舌つ足らずな子供のような喋り方ですが、由希子ちゃん
はもう十九歳です。生まれつきおつむりが弱く、体は大きくとも三、
四歳の知恵しかありません。色白でおかっぱの由希子ちゃんは、ま
るで日本人形のよう。しかし切れ長の目は赤ん坊のように無垢その
もので、何となく倒錯めいた感じのする子でした。

そんな由希子ちゃんを、母は不憫だと言っていたいそう可愛がつて
いたのでした。もちろん由希子ちゃんも懐いていましたし——です
から突然訪れたお婆ちゃんの死を受け入れられないのでしょうか。必
死に呼びかける姿は、涙を誘わずにいられません。

しかし、姉さんと亮平さんにとって、由希子ちゃんは尽きること
のない悩みの種でした。特に亮平さんは、由希子ちゃんが自分の娘
であることを未だに受け入れられないようで、事あるごとに由希子
ちゃんを折檻していると聞きます。亮平さんは鉄鋼の貿易によつて
一代で財を成した方で、ゆくゆくは養子を迎え、家督を譲るつもり
でした。ですが由希子ちゃんが白痴

編) 【白痴は要注意語句です。時代設定を考えれば「さほど違和
感はない」とも言えますが、あえて使用する必要がある?とも感じ
ます】

ま) はい、承知の上です。香奈恵の一人称ということで、私の中
では必要を感じました。

とあつては、それもままなりません。

霧乃宮の末裔である私たち兄妹は、ここに来てなぜか子宝に恵ま
れませんでした。彰一兄さんのところも子供の話は聞いたことがあ
りませんし、私も——結婚して十九年目になる夫、頼長聡太郎子爵
との間に、ついに子供はできませんでした。霧乃宮の血縁としては
由希子ちゃんは唯一、姉夫婦が授かった子なのです。かつて栄華を
極めた霧乃宮家は、その没落と時を同じくして、一族の血さえも途
絶えようとしているのです。

「お婆ちゃん、起きてよ、ねえ——」

「やめんか、由希子！」

なおも亡骸にすぎる由希子ちゃんに苛立ちを覚え、亮平さんは彼女の？をびしりと打ちました。たちまち由希子ちゃんは幼子同然に火がついたように泣き出します。「どうして由希子に限ってこんな子に生まれてきたのだ」とは、未だ亮平さんが口にする繰言で、幼少の頃から秀才の名をほしいまま

編）【恣／辞書を引いてみてください】

にしてきたかれにとっては、自分の子供がこうであることが耐えられないのでしよう。亮平さんはよき人でありましたが、娘のことに関する限り、どうにも我慢が利かぬようでした。

「由希子ちゃん、こつちにいらっしやい」

私はそつと自分の胸に由希子ちゃんを抱き寄せました。

「お婆ちゃんねえ、もう由希子ちゃんとお話できないの。遠いところに行っちゃうんだよ」

ゆつくりと諭すその言葉は、自分自身に言い聞かせていたのかもしれません。母が亡くなったことを未だ受け入れられないのは私も同じです。

「遠いところ？」

「そつ、遠いところ。お星様になるの」

由希子ちゃんは、私の言うことをどれほど理解しているのでしょうか。泣き腫らし、鼻水でぐしゃぐしゃになった顔で、ぼんやりと私を見つめています。

亮平さんは、そんな私たちを忌々しげに見ると、露骨に舌打ちをして立ち上がりました。所詮、義理の親でしかない霧乃宮紗江子の死は、かれにとってはそれほど感ずるところもないようです。私は何だか腹立たしくなり、座したまま亮平さんを睨め付けました。

「香奈恵ちゃん、仏さんの前やから……」

玲子姉さんは困惑気味に、場を取りなそうとします。悪いのは明らかに亮平さんなのに、私のせいだと言わんばかりに。私はそんな姉さんに対しても怒りが湧き起こり、思わず口を開きかけました。しかし、私の怒声が口について出ることはありませんでした。座敷に漂う不穏な空気を打ち消したのは、誰かが玄関を慌ただしく駆け込んでくる物音でした。

私も、亮平さんも、玲子姉さんも、開け放たれた襖の向こうに訝しげな目を向けます。やがてそこに現れた人物を見て、居合わせたみんなが息を？みました。

「彰一兄さん……」

思わず眩きが漏れました。ひどくげっそりと痩せ細った？、広くなった額と真っ白になった髪。気弱そうな目には涙を浮かべて、それは変わり果てた姿ではあったけれども、霧乃宮彰一——彰一兄さんに間違いありません。

お互い、会おうと思えば会える距離にいたのですが、兄も駆け落ちという後ろめたさがあつたのでしょう。この二十年、一度も姿を見せたことはありませんでした。それにしても長い年月の間、彰一兄さんはどんな人生を歩んできたのでしょうか。確かに私より一回り以上も上、すでに五十を過ぎてはいますが、その容姿はさらに十も年老いたかのようです。刻まれた皺が苦労の数だとすれば、とてもしあわせな人生を送ってきたとは思えません。

その彰一兄さんは息を切らしながら、呆然と立ち尽くしていました。

「おふくろ——」

横たわる母の骸を凝視したまま、彰一兄さんが力なく呼びかけます。次の瞬間、彰一兄さんはわっと喚いて遺体に駆け寄ろうとしました。

「おふくろ！」

しかし部屋に入ってきた兄の腕を、亮平さんが？んで止めました。「何しに来た」

泣きすがろうとする兄の前に、血相を変えた亮平さんが立ちはかります。

「勝手に家を出ておいて、今さら君が霧乃宮家の敷居をまたぐ資格はない。お引き取り願おう」

「ごめんなさい。私が――彰一兄さんには、私が連絡しました！」

私は亮平さんに対しての怒りも忘れ、必死に二人の間に立ち入りました。

「母がいよいよ危ないとなった三日前、禁忌を破って手紙を出したんです。このまま今生の別れとなるのはあまりに忍びなくて。母が可哀想で……ですから――！」

しかし、亮平さんは私の言葉など耳に入らないようでした。

「さあ、帰ってくれ。彰一君にいられては、取り仕切っている私の立場もないものでね」

「お義兄さん！」

私はなおも亮平さんに取りすがろうと、その黒袖を？みます。

亮平さんの言い分もわかります。矢野家の者が、矢野亮平が霧乃宮家の葬儀を取り仕切るのは、跡取りがいないからこそ。長女の夫としての義務であることが建前です。家を出ていったとはいえ、長男である彰一兄さんに出てこられては、亮平さんの立場がありません。

ただ、私はそれすらも建前であることを知っていました。亮平さんの本当の狙いは、霧乃宮の財産、霧乃宮家を我がものとする事なのです。放蕩三昧の父のせいでお金はありませんが、この帝都の一等地に構える百数十坪の土地と屋敷、さらに先代が集めた骨董を含めれば、優に一財産はあるのです。病気の母を引き取ったのも、そんな計算があったからに違いありません。

しかしそれも、彰一兄さんが出てきたとあれば、話は簡単に進まなくなってしまうです。亮平さんは、どうにかして兄を追い返そうと、躍起になっていました。

「お義母様だって、君みたいな親不孝者の顔など見たくないだろう

からネ。もう、ここには来ないでくれないか」

「申し訳ありません」

泣きじゃくりながら、彰一兄さんは地に頭をこすりつけ、土下座しました。

「許してもらえないことはわかっています。しかし、どうか焼香だけでも。——いえ、片隅に座らせていただくだけで構いません。最後に母を見送らせてください。どうか、どうかお願い致します！」

「お義兄さん、私からもお願いします。母だって、彰一兄さんに会いたかったに違いありません。何があるうと、やはり親子なのですから」

私も兄と並んで土下座し、必死に懇願しました。いくら広い屋敷といえど、すべての襖を開け放した家の中で、声は筒抜けです。騒ぎを聞きつけ、数人のお取り持ちがいったい何事かとのぞき込んでいました。心配してというよりは好奇の目です。亮平さんは頑として譲らぬ構えでしたが、それを見ると苦い表情になり、「勝手にしろ」と言い捨てて部屋を出ていきました。

？然とする人々の間に、白けた空気が漂います。

「済みません。お騒がせしまして。何でもございませんので、どうか心配なさらずに」

私は努めて明るく言い、もう屋敷の風通しは終わったと言わんばかりに、襖や障子を閉めて廻りました。久々に顔を会わせた霧乃宮一族には、まだまだ波乱が起きそうでした。

仏間に戻ると、彰一兄さんは正座したまま嗚咽を漏らしていました。手紙を見て、慌てて出てきたのでしょうか。死に目には間に合うと思ったのか、黒の喪服ではなく緋の着物を身につけています。玲子姉さんは、二十年ぶりに再会した兄にどう声を掛けていいのかわからないようで、居心地が悪そうに俯いたままでした。由希子ちゃんはその成り行きがまったく理解できず、鼻歌まじりに縁側に座っています。

「兄さん。お母ちゃんの顔、見る？」

彰一兄さんがこの二十年間どうしていたのか、私はあえて聞きませんでした。それはあとでじっくり話せばいいことですし、せっかく駆けつけてくれた兄をこれ以上追い詰めたくなかったのです。

彰一兄さんは私の言葉に頷くと、顔に白い布がかぶせられた母の亡骸に近づきました。少し長い合掌の後、ゆつくりと布をめくりま

す。
「ひっ……！」

その死に顔を見て、彰一兄さんは悲鳴と共に思わずのけぞりました。噛みつかんばかりに開かれた口腔。障子紙を丸めたように白く皺の刻まれた顔。見開かれた目は、憤怒を宿したまま天井を見ています。それは、母が死に際に見せた苦悶の形相を呈したままでした。
「……」

あまりのおぞましさに、彰一兄さんは絶句したまま唇をわなわなと震わせていました。

「お母ちゃん、最後はずいぶんと苦しんだんや」

私はそうとだけいいました。母の最期を、彰一兄さんに詳しく語る気はありません。鬼が乗り移ったような形相でこの世を、彰一兄さんを恨んで死んでいったと知れば、兄は未来永劫、罪の意識に苛まれるでしょう。彰一兄さんはそっと白布を戻すと、声を上げて号泣しました。

「おふくろ……堪忍してくれ——堪忍……」

彰一兄さんは、それだけ言うのが精一杯のようでした。それは悲しみと共に、親の死に目にも会えないような人生を歩んでしまった自らを悔いる涙でもあったのでしょうか。私は居たたまれない気持ちになって、もらい泣きしながら目を逸らしました。こんな兄の姿を見ていらなかったのです。

私が幼い頃、まだ祖父の藤太郎が健在だった頃は、しあわせな家でした。私たち兄妹も仲がよく、特に彰一兄さんには可愛がってもらった記憶があります。長い紆余曲折の果てにこのような再会を果

たすなど、あるとき誰が想像したでしょう。季節の折りに咲き誇る霧乃宮邸の庭の花は、その記憶さえも極彩色に彩っていたのに。今年の桜は、深い悲しみと共に墨染の花を咲かせるのでしょうか。私は涙を拭いながら、縁側に目を向けました。

昼下がりの、やわらかい春の陽差し——。堅い蕾が開きかけた桜の木の下に、誰かがしゃがんでいます。白い着物を着ていますが、後ろ姿からは誰なのかわかりません。いったい誰なのでしょう？私は訝しみ、首を傾げました。縁側に腰掛けていた由希子ちゃんがそのほうを指さします。

「お婆ちゃん！」

嬉しそうに駆け寄っていく由希子ちゃん。そんなはずはありません。母はここに、永遠の眠りについているのですから。私はぞっとしながら、その光景を呆然と眺めていました。

白い着物の人物は立ち上がり、こちらを振り向こうとします。誰なのでしょう。見てはいけないような気がします。しかしその瞬間、かれ——あるいは彼女——の姿は、忽然と掻き消えました。

「あ——」

驚愕の声は、私と由希子ちゃんの口から異口同音に発したものでした。？然として立ち尽くす由希子ちゃんの上に、一片の花びらがひらりと舞います。花冷えの帝都は、さらに冷え込んできたようでした。

編)

「プロローグ後の最初の場面」の枚数は1行空けを含めて約17枚、「明らかに少ない」とは言えませんが、「不足気味」ではあります。また、セリフの数は文字通り不足、「ひとつの場面にセリフ50を

配置する」を観点に加えてみてください。さらに、そのセリフもできるかぎり「生きた」ものである必要があり、「……」「お婆ちゃん！」「あ——」などはふさわしくありません（キャラの人格・内面が反映した「各キャラの思惟・思考の結果「選ばれた」言葉ではないからです。残念ながら、これらは「配置すべき50のセリフ」にはカウントされません）。「自分の作品にどうでもいいセリフなどただのひとつも配置しない」、そんなこだわりにも目を向けてみてください。

経過時間については、主人公が家に戻る↓彰一が帰還↓悶着——で実質約3分程度でしょうか。言うまでもなくこれでは不足で、17枚を費やしながら「連続した経過時間」が3分にしかないのは、「それだけ重要でないことが書かれているからだ」となります。

現状では「地の文での主人公の独白で解説をおこなうこと」に作者の主たる関心が向いていて、セリフには「地の文の連続を避けるためのワンポイント」以上の役割が与えられていない印象ですが、本来はこれが逆にならなければいけません。

- 読者にすんなり記憶してもらうためにも、基本的事実の解説はセリフ（それも「生きた」）を通じておこなう。
- 地の文での独白／解説は可能なかぎり避ける。
- ひとつの場面には最低でも10分の「連続した経過時間」を与える。

● 美文調の描写は読者をうんざりさせるだけ。そもそも「その場面の雰囲気／ムードの醸成」に役立たない描写は無意味であるばかりか有害（現状での「視覚イメージの提示」は——特に作品後半の部分で——有効と感ぜますが、肝心の「そこにいる人物の姿・表情」がまだ見えてこない印象です）。

繰り返しになりますが、現状地の文で書かれている諸要素をセリフと人物の描写に織り込む、つまりそれらを通じて読者がみずから

解釈・理解できるような書き方にするよう心懸けてみてください（もちろん、「地の文でしか書けないこと」は、すぱっと潔く解説してください）。

ま）「ワンシーンには最低二十枚以上を費やす」でしたね。

その中で、一流の人間による一流のやりとりで表現すること。「生きた台詞」とか、前回とまったく同じことを言われてる。進歩ないなあ……。

「悪文排斥」第十八回。今回はほとんど文章の校正のみです。あまり中身はありません。

（二）

私は吃驚して、縁側に駆け寄りました。右も、左も、誰かが潜んでいるのではと庭を見渡しますが、桜の下はもちろん、ツツジの茂みにも灯籠の陰にも、やはり誰もいません。帝都に吹きつける冷たい風だけが、私を嘲笑うかのように？を撫でます。思わず身震いしたのは、その寒さのせいだったのでしょうか。私はなおもぼんやりと口を開いたまま、立ち尽くしていました。今のは何だったのでしょうか。桜の木の下に現れた人影。しかし、それは一陣の風に吹き飛ばされたともいうように、忽然と掻き消えたのです。

「ねえ、お婆ちゃんは？ どこに行ったの？」

由希子ちゃんも不思議そうに辺りを見回しながら尋ねます。

「お婆ちゃん——だったのかな？」

私は？が引きつるのを感じながらむりやり笑みを浮かべ、由希子ちゃんに聞きました。

「わかんない。でも、きつとお婆ちゃんだよ。あたしを見て笑ったもん」

そう言って、由希子ちゃんは屈託のない笑顔を見せます。それじゃあ、由希子ちゃんは白い着物の人の顔を見たのでしょうか。そうして、それは母だったのでしょうか。遺体は仏間で眠りにについているというのに、魂は成仏しきれず屋敷を彷徨っているのでしょうか。それは自分の親といえど

編）【漢字で書くと「^{いえど}雖も」になるので、「云えど」はやはり誤用

と考えられます】

何となくぞつとするものがあります。

「お婆ちゃん、どこ行つたのかな」

死を理解していない由希子ちゃんは、まるで隠れん坊でもしているかのように無邪気に亡霊を捜しています。どこに行ってしまったのかはわかりません。私が聞きたいくらいです。でも、由希子ちゃんも見たということは、あれはただの幻惑ではないのでしょうか。

「香奈恵ちゃん、どうかしたの？」

玲子姉さんがそばに来て、怪訝そうな顔をしました。

「今、確かに誰かがここに立っていたんだけど……」

「この庭に？」

眉根を寄せ、玲子姉さんも探るように辺りを見回します。

「誰もいないじゃない」

「ええ、でも——」

「見間違いないじゃないの？　きっと光の加減が何か。硝子に反射した太陽のせいであんな見えただけではないか？　それより、もうそろそろ縁側の戸も閉めてちょうだい。寒くて仕方ないわ」

玲子姉さんは決めつけると、もうそれには興味をなくして奥の座敷へと戻っていきました。由希子ちゃんは他のことに気を取られてか、それとも本当にお婆ちゃんを捜すつもりなのか、気がつくところかに行ってしまったようです。私は言われたとおり障子戸を閉めながら、もう一度だけ桜の木を眺めました。確かに、姉さんの言うとおり見間違いだっただけかもしれません。本当に、光の加減が何か——。

私も、由希子ちゃんも、それが白い着物を着た人に見えたのでしよう。私は納得しないながらも、自分に言い聞かせることにしました。言い聞かせながら思い出したのは、幼い頃に母が語ってくれたあるお話です。

——桜の下には、鬼が棲まうんじゃ。

その鬼は、蒼白い顔をして庭の桜の木の下に立っているのだそうです。

——家に死人が出そうになると決まって現れる。抜け出た魂を喰らおうと、じつとこつちを窺っておるんじゃないよ。

私と由希子ちゃんが見たのは、母の魂を獲って喰おうとする鬼だったのかもしれない。

私はこの出来事が妙に気になっていましたが、やがて日暮れ前にお寺の住職が到着し、通夜の段取りを話し合う頃になると、もうそれどころではありませんでした。

線香の煙る座敷の中で、慌ただしく色々なことが決められていきます。そんなとき、亮平さんの発した言葉に私は驚き、継いで怒りが込み上げてきました。何と亮平さんは、霧乃宮紗江子の葬儀に喪主を立てないというのです。

「生憎、霧乃宮の家を継ぐ者は誰もおりませんので。務める者がおらんのですよ」

その言葉に住職も腕を組んだまま、渋い表情で考え込みました。

「どうしても喪主は立てないと言われるのか」

「ええ」

「しかし、そんな葬儀は聞いたことがない。身寄りのない無縁仏ではあるまいし、霧乃宮家ともあるう方が喪主を立てないなど、世間体というものがあるでしょうに」

「いや、私の妻も今は矢野家の者ですし、香奈恵さんも頼長の家に嫁いでおります。霧乃宮家の人間は、もう誰もおりませんので」

「彰一兄さんがいます！」

私は思わず口を挟みました。

「彰一兄さんは霧乃宮家の長男です。兄さんではどうしていけないのですか？——というより、彰一兄さんが喪主を務めるのが筋ではありませんか！」

亮平さんは鼻を鳴らし、憤る私と、そうして部屋の片隅で縮こまっている彰一兄さんをじろりと一瞥しました。その目は、まるで虫

けらでも見るような冷酷な光を宿しています。

「親を捨てて勝手に出ていったくせに、こんなときだけ我が物顔をされてもな。いくら霧乃宮の姓を名乗っているとはいえ、彰一君は自ら縁を切ったのではないか？ 見捨てられた息子に喪主を務められては、お義母様だって浮かばれんと思うが」

亮平さんはつけつけと言いました。

「そんなこと——」

「香奈恵、いいんだよ」

なおも言い返そうとする私の裾を引っ張り、彰一兄さんは止めに入りました。

「亮平さんの言うとおりだ。俺には喪主を務める資格はない」

「兄さん！」

自嘲めいて唇の端を引きつらせ、力なくうなだれる彰一兄さん。

私は助けを求め、正面に座る玲子姉さんを見据えました。

「姉さん、何とか言つてよ。お母ちゃんの葬儀がこんなことでいいの？」

玲子姉さんは気まずそうに私から目を逸らし、旦那である亮平さんをちらり、ちらりと見ながら、言いにくそうに口を開きました。

「そうねえ……でも、やつぱり、家を出ていった彰一兄さんが喪主というのもおかしな話だし——」

「どうして実の息子が喪主を務めるのがおかしな話なの！」

玲子姉さんにとっては、夫の亮平さんの機嫌を損ねることのほうがずっと罪悪なのでしょう。そんな姉さんにも腹が立ち、私はつい、声を荒らげて

編）【「あららげて」です】

しまいました。気がつくと、閉じた襖の向こうで、集まったお取り持ちの方々が耳をそばだてている気配があります。お家騒動は、かれらにとって蜜の味。舌なめずりをしながら聞き入っているはずで

す。仕方なく、私は声を潜め、小さく毒づくことしかできません。
「お母ちゃんが浮かばれないわ」

しかし、私は結局、亮平さんの決定には逆らえませんでした。亮平さんにとって、これは霧乃宮家を手中にするための大きな布石だったに違いありません。喪主を立てない——つまりは、霧乃宮家の者はもう誰もいないと、世間に明言したのです。

編）枚数10枚。やはり不足です。

ま）ここも前回と同じということですね。「枚数の不足」と、「十分に満たない経過時間」。

（一）、（二）と分けて一ブロックにして、

● 基本的事実の解説はセリフ（それも「生きた」）を通じておこなう。

とすればよかったのかな。言うのは簡単だけど、実践は難しい。改稿するにしても、相当に難儀しそうですね。

しかしこの場面、改めて読み直すと退屈なシーンです。ひょっとしてこれも「必要ない」のかもしれない。

第十九回 円城寺まどかをフルボッコ！？（『霧乃宮一族の滅亡』批評公開）

第十九回「悪文排斥」。まだまだ続く『霧乃宮一族の滅亡』、批評レポートです。今回は長すぎる気がする第二章。とりあえず全文掲載しますが、飛ばし読みでも構いません。肝心な編集者様の一言は最後にあります。

第二章 髑髏もの言う帝都の月夜

（一）

こうして、霧乃宮紗江子の通夜が始まりました。参列者の少ない、侘びしい通夜でした。襖を取り払った六畳二間の仏前に座っていたのは、私たち親族を含めても十二、三人でしょうか。二十二年前、祖父、藤太郎の亡くなったときは、ひっきりなしに弔問客が訪れていました。なかには

編）【文頭に配置される「とりわけ」という意味の「なかでも／な
かには」については、ひらがな表記をお勧めします】

財界で名を馳せるような大会社の社長様やら、地元の代議士の先生
やらもおりまして、その顔ぶれはまさしく「綺羅、星の如く」でし
たのに。母、紗江子の葬儀は、霧乃宮家の没落をまざまざと見せ付
けられたようでした。

母の死を本当に悼んでいる者は、さらに少ないのでしょうか。亮平
さんは言うに及ばず、玲子姉さんもほとほと看病に疲れ果てていた

せいか、打ちひしがれている様子はありません。その中で、もつとも悲しんでいたのはやはり彰一兄さんでしょうか。読経の間、じつと仏壇の奥を見つめて、いったい何を思っていたのでしょうか。憔悴しきった表情からは、悲しみよりも後悔の念のほうที่深いような気がします。死の間際、恨み言を並べた母ですが、今の彰一兄さんを見たら何と声を掛けるのでしょうか。何だか、母の御霊はまだこの座敷にいるような、そんな気がします。

部屋に漂う乾いた腐臭。肉の臭いを含んだ焼香の煙は、やがて彰一兄さんの座る部屋の片隅に部屋に流れていきます。それはまるで母がようやく会えた彰一兄さんを慈しんでいるようで、かれの体を包み込むように渦巻いていました。揺れる？燭の炎は、邂逅を果たした歓喜の震えでしょうか。風のない部屋であんなにも火が揺らめくのは、まったくおかしいことでした。

そして、かすかに聞こえる子供のような甲高い笑い声。母のものではありません。母は、こんな下品な笑い方をしないのですから。ひょっとして、昼下がりに見た白い着物の鬼が嘲笑っているのでしょうか。その障子を開ければ、夜桜の下には蒼白い顔をした鬼が立っているのかもしれませんが。縁側のほうからは先ほどからずっと視線を感じていますが、私は怖くてそちらを見ることができませんでした。まるで詠々と読み上げられる経文が、亡霊を呼び寄せているようです。

何となく嫌な胸騒ぎのする、落ち着かない通夜でした。息苦しくて、目眩がしそうです。母の通夜だというのに、私は悲しみに暮れるどころか早く終わってほしいとさえ念じていました。よからぬ予感がするのは、私だけでしょうか。ちらりと周りを窺いますが、みな神妙な面持ちでうなだれ、意味のわからない念仏に聞き入っていました。喪服姿が並ぶ沈痛なその光景は、並ぶ参列者さえ死んでいるみたいです。まるで座したまま息絶えた即神仏のように。

反対に、仏壇の前で眠る母は、今にも起きてきそうです。死に装束から伸びる干涸らびた手足。白い布が掛けられた顔は、まだ苦悶

の表情を残したままなのです。母に死の安らぎは訪れていないようでした。未練を残した母の怨念が屋敷に漂い、私を落ち着かない気持ちにさせるのかもしれない。

永劫とも思える長い時間の果てにようやく通夜が終わったとき、私は呪縛が解けたようにほっと胸を撫で下ろしたのでした。

わずかばかりの参列者は、明日の葬式の来訪を約束し、帰っていききました。そうすると、ただっ広い霧乃宮邸には、私たち親族だけが残りました。今夜は仏の御守りをするために、一晚中母の遺骸と過ごさねばなりません。線香と？燭の火を、絶やしてはいけません。

「亮平さんと姉さんは帰って休んでください。今夜は私と彰一兄さんがここに泊まりますので。――兄さん、それでいいでしょう？」

私は勝手に決めつけ、兄を見やりました。

「ああ、もちろん。姉さんと亮平義兄さんにはお世話になりっぱなしだし、これぐらいことはお役に立たないと」

「そうかい。まあ、そうしてくれると助かるね」

亮平さんはそう言って、おだてられて喜んでいるときの癖である鼻の穴をひくひくさせながら、満面の笑みを浮かべました。

「久しぶりに彰一兄さんと話したいこともあるけれど、まだ明日があるのだし、今日のところはいそ暇まさせていただわくわね」

玲子姉さんも、亮平さんに続いて立ち上がります。確かに姉さんも帰ってくださいとは言いましたが、玲子姉さんはいてくれてよかったのではないのでしょうか。亮平さんとはともかく、姉さんは霧乃宮紗江子の実の娘なのですし。

しかし私は言いたいのをこらえて、笑ってみせました。もともと兄と姉はあまり折り合いがよくなかったし、事実、二十年ぶりの再会だというのに、今日も二人はほとんど口をきいていません。姉さんがいないほうが、彰一兄さんとも気兼ねなく話せるでしょう。それに、その代わりと言っては何ですが、由希子ちゃんが一緒に泊まっていってくれました。

「あたしもお婆ちゃんの家泊まっていくな。ねえ、いいでしょう？」

由希子ちゃんは単純に喜んでいます。屈託のない笑顔。由希子ちゃんにとっては、お盆の里帰りとなんら変わることはないのです。

しかし、玲子姉さんは困惑し、亮平さんは眉をひそめました。

「由希子、おまえがいては迷惑だろ。一緒に帰るんだ」

「嫌だ、泊まっていくな！」

駄々をこねる由希子ちゃんに、亮平さんの顔がさらに険しくなります。

「大丈夫ですよ、お義兄さん。やることといっても、線香の火を絶やさないようにするだけです。由希子ちゃんが寝る部屋も布団もいくらでもありますから。それに……ここに泊まるのも最後でしょうから——」

また由希子ちゃんが殴られる前に、私は慌てて口を挟みました。母だって、最後の夜ぐらい可愛がっていた由希子ちゃんがいてくれたほうが喜ぶでしょう。亮平さんは仕方なさそうに溜息をつくとき、渋々承諾してくれました。

「わかった。言うことを聞かなかったら、遠慮なく殴ってやってくれ。口で言って理解できる子ではないんでネ。まったく、お義母様が甘やかしたせいで」

「そんなこと……！」

？然とする私をよそに、姉夫婦はそそくさと帰っていきました。

静寂に包まれた霧乃宮邸は、たった三人だけになってしまいました。まるで、無人の孤島に取り残されたようです。こんな空寒い屋敷に、母はたった一人で暮らしていたのかと思うと、その虚無感に押し潰されそうです。どれほど寂しかったことでしょう。私は居たたまれない気持ちで、母の前に座りました。彰一兄さんも、由希子ちゃんも、私の隣に腰を下ろします。死に装束の母を、無言で見つめる三人。仏壇の？燭が、横たわる母の骸を仄暗く照らしています。畳に映る影が、揺らめく？燭の炎に合わせて形を歪めました。それはまるで、姿の見えぬ魔物のようです。どこからか、先ほどと同じ

甲高い笑い声が、私の耳朵を撈りました。

(二)

「香奈恵、ずいぶんと迷惑をかけたね」

姉夫婦が帰ると、彰一兄さんは憔悴しきった様子で言いました。

「俺のことを恨んでるだろう？ 突然出ていったきり、二十一年度も戻らなかったんだ。許せないのは当然だと思う。言い訳をするつもりはないよ。本当に済まないことをした。香奈恵にも、おふくろにも」

自嘲気味に唇を歪めたその横顔を、洋燈の光が照らします。落ちくぼんだ？に影を落とし、それはさながら髑髏のようでした。広くなった額と真つ白になった残りの髪が、二十年という時の流れを物語っています。特徴的だった大きく聡明な印象を与える双眸さえも、人生に疲れ切ったようにかつての光を失っていました。霧乃宮の家にいた、まだ青年だった頃の彰一兄さんの面影はどこにもありません。

兄さんの目に映る私の姿も、同じように変わり果てているのです。よう。兄さんと最後に会ったのは、私がまだ女学生だったときです。学校から帰ってきたある日、この家に彰一兄さんの姿はありませんでした。あれから二十年——時間は残酷にも、人の若さを喰らい尽くしていました。そしてそれは、兄への遺恨に凝り固まつた心境に変化を及ぼすのにも充分でした。

「確かに、少し前までは兄さんのことを恨んでいたわ。兄さんが戻ってくれば、お母ちゃんだって寂しい思いをせずに済んだだろうし、お父ちゃんの代わりに薬問屋を継いでいれば、霧乃宮の家だって存続できたのにつて。自分勝手な彰一兄さんのことは許せなかったけど、でもそれも兄さんの人生かもしれないね。今までもこれからも、ずっと罪の意識を感じながら生きていくのは辛いことだろうし、そう考えると自分の生きたいように生きるのも楽じゃないんだ

ろうなつて」

「……」

彰一兄さんは何も答えませんでした。責めるつもりはありませんし、兄さんも言い訳じみたことは言わないと決めているようでした。「清花さんだっけ？ 元気にしてるの？」

駆け落ちしたと聞かされた、カフェの女給。その名を口に出すと、兄を奪い去られた憎しみに身が焦げそうです。私にとっては、霧乃宮家を破滅に導いた悪魔の名でした。一度も会ったことはありませんが、きつと獰猛な猛禽類のような顔に違いありません。赤い口をぱつくりと開け、高らかな笑いを発しているのです。

「清花は……彼女は——」

彰一兄さんは初めて私を正面から見据えました。

「いや、そうだな。仲良くやっているよ」

そう言っただけ口を噤んでしまいます。その目は明らかに何かを訴えようとしていたのに。私は訝しみました。それ以上追及することは憚られました。

「それより、聡太郎さんは？ おふくろの葬儀には顔を出さないのかい」

兄さんは自分の話題を避けるように、私の良人のことを尋ねました。季節の折の手紙で、兄妹の近況は伝えております。彰一兄さんは夫との面識はありませんが、聡太郎という名前や、私より十五歳も年長であること、爵位を持つ華族であることは知っていました。

「あの人は独逸ドイツに行つてしまつて、来月しか戻つてこないの。知らせを出したところで、間に合うわけないし」

「そうか……。せつুকお会いできると思つたのに残念だな。でも、香奈恵はしあわせそうであつたよ。子爵の奥様なら、きつと何の苦勞もないのだろうね」

嫌味ではなく、妹のしあわせを心から喜んでるように彰一兄さんは言いました。実際には華族であつたと「何の苦勞もない」ということはあり得ません。毎日、毎日、特にやることもない、うんざ

りするほど退屈な日々。話題といえば「令女界」に綴られているような、どちらの伯爵邸でどのような会合があり、どちらの奥様とどちらの令嬢がどのような絢爛な装いで姿をお見せになったか、というゴシップばかり。ほとほと倦み果ててはいても、華族の世界で生きていくには避けて通れませんでした。それはある意味、無為に時間過ぎるのを待つ牢獄と同じです。

しかし、私は何も言わず、曖昧に微笑んでみせました。彰一兄さんがどのような人生を送ってきたのかはわかりませんが、私の苦勞など、そもそも住む世界が違うかれには決して理解できないことです。同じ家で幼少時代を過ごしながら、大人になってしまえば兄妹は他人も同然でした。

「おふくろは何か言っていたかい？ 俺の、恨み言とか。それとも

……」

「ずっと、彰一兄さんに会いたがっていたわ」

死の間際は、鬼が乗り移ったような姿だったことは言えませんが。

これ以上、兄を罪の意識に苛さいませることもないでしょう。

「——他には？」

「他って？」

「何か俺に伝えたいことがあったとか」

妙に、彰一兄さんは問い詰めてきます。

「言いたいことはたくさんあったでしょうけど、私は何も聞いてないわ。最後にお母ちゃんに会ったときは、もう意識をなくしていたのだし。玲子姉さんに聞けば何か知ってるかもしれないけど」

「そう——」

彰一兄さんは、失望とも安堵とも言えぬような溜息をつきました。
「お母ちゃんの口から、何か聞きたいことでもあったの？」

「いや、何でもないよ」

怪訝な顔をする私をごまかすように、兄はつと視線を逸らしました。

「……」

何となく、彰一兄さんの態度が腑に落ちません。根が単純というか、正直者の兄さんは隠し事ができないたちで、すぐに顔に出てしまいます。歳を取っても、その性格は変わらないようでした。私は、兄が何か秘密を抱えていることを察しました。でも、言いたいことはたくさんあっても、やはり久しぶりに再会した彰一兄さんを追い詰めることはできません。その代わりにまずは、兄さんを奪った女へと向かいます。

「それより、清花さんは来ないの？ 霧乃宮家の長男の嫁が姿を見せないなんて、世間に示しがつかないのではなくて？」

彰一兄さんは困ったように頭を掻きながら、氣まずそうに俯きました。

「清花はお母ちゃんが死んだことは知らないし。俺も、香奈恵からの手紙を見て、慌てて出てきたから。せめて死に目に会えればと思っていたけど、間に合わなかったな。本当に済まなかった」

「じゃあ、明日の葬式には清花さんもいらっしやるの？」

何となく清花さんのことから話題を逸らそうとする兄を、柔らかく引き戻します。彰一兄さんはまたも何か言いたげに私を見つめ、しかし結局、口を閉ざしてしまいました。

「……兄さん……」

「済まない、香奈恵。もう、何も聞かなくていいか。霧乃宮家の者として、責任は取るつもりだ。それに、おふくろには申し訳ないけど、亮平さんの仕打ちにはどんなことでも耐えるから。俺を喪主に立てないのならそれでもいい。だから――」

「わかった」

何だか彰一兄さんが気の毒になって、私は遮りました。

「もういいよ。きっと兄さんとは一生会えないと思っていたけれど、こうして来てくれたのだし。いいよ、もう何も聞かない。その代わり、ちゃんとお母ちゃんの供養をしてあげてね」

彰一兄さんは唇を？みしめ、体を震わせていました。

「済まない。本当に済まない、香奈恵……」

兄にとっては、激しく罵声を浴びせられたほうが楽だったかもしれません。私が許したせいで、彰一兄さんは私に聞いてほしかったはずの二十年を語る機会をなくしてしまったのですから。その、決してしあわせではなかったであろう人生を。

「あれ、そういえば由希子ちゃんは？」

兄との話に夢中になっていたせいで、いつの間にか隣に座っていたはずの由希子ちゃんがいなくなっていたことに気づきました。

「兄さん、由希子ちゃんがどこに行ったのか知らない？」

彰一兄さんも、はっとして辺りを見回します。私たちは完全に由希子ちゃんのことを失念していました。

「どこに行つたんだ。さつきまでそこにいたじゃないか」

彰一兄さんは立ち上がり、襖を開けて隣室をのぞき込みました。私も縁側の障子を開け、庭を見渡します。

「由希子ちゃん、どこにいるの！」

暗闇に向かつて大きな声を出しますが、返事はありません。広い霧乃宮邸ですが、私と彰一兄さん以外に人の気配はなく、闇と静寂、そして焼香の匂いだけが漂っています。由希子ちゃんの姿はどこにもありません。

「外に出ていったのかな」

「こんな時間にか？」

彰一兄さんは不安そうな顔で玄関先を見やりました。私も兄さんの傍らに立ち、土間を見下ろします。草履は残っていますが、幼子同然の由希子ちゃんのこと、裸足で出ていったとも限りません。

「『赤マント』にでも掻つ攫われたらどうするんだ」

『赤マント』——。それは最近、新聞を賑わせている誘拐犯のことでした。帝都ではこのところ若い女が何人も行方不明になっており、それは裏地が赤いマントを羽織つた、洋装の紳士の仕業だと噂されるのです。こんな時間に外に出れば、由希子ちゃんも『赤マント』に攫われてしまうかもしれません。

「俺、心配だから見てくるよ」

彰一兄さんはそう言って、玄関を下ります。

「一人で大丈夫なの？」

「出ていったとしても、まだそれほど遠くには行っていないだろう。ひよっとして庭先にいるのかもしれないし。香奈恵はここで待っていてくれ。どっちみち、おふくろを一人にすることはできないだろう。確かに彰一兄さんの言うとおり、仏様を放っておくわけにはいきません。」

「わかった。私も、もう少し家の中を探してみるわ」

「そうしてくれ。由希子ちゃんがいなくなったなんて、亮平さんに何て言い訳していいかわからいからね。大丈夫、必ず見つけてくるよ」

由希子ちゃんが失踪したと聞いたって、亮平さんは意に介さないでしょうけど――。しかし私はその言葉を？み込み、黙って頷きました。

彰一兄さんが出ていってしまうと、霧乃宮邸はやけにがらんとしたようでした。？燭の芯が燃える音が聞こえるほどに静かです。昼間でも寂しくなるほどに広い屋敷は、夜になると発狂しそうな寂寥感に包まれます。私は仏間に戻って手燭の？燭に火を灯し、隣室の襖を開けました。しかし、押し入れもない六畳の和室には、誰もいません。

「由希子ちゃん、どこにいるの」

自らを鼓舞するように、ことさら大きな声を張り上げます。返事はありません。発した声が、木霊しているような錯覚に襲われます。空気は冷え冷えとして湿り気を帯び、自分が生まれ育った家でありながら、どこか薄気味悪さを感じさせました。

「由希子ちゃん！」

私はさらに大声で、姪っ子の名を呼びました。手燭の光が襖に私の影を大きく映し、嘲笑うかのように揺らめきます。やはり返事はありません。一人が住まうには広すぎる霧乃宮邸。今ここにいるのは、私と母の遺体だけなのでしょうか。不意に心に湧き起こる猛烈

な孤独感と恐怖。私はそれをむりやり押し込め、荒々しく南側の障子戸を開けました。暗闇に手燭の炎を掲げますが、ここにも人の気配はありませんでした。

失望と安堵の入り交じった溜息を吐き、私はさらに屋敷の奥へと向かいます。しかしそのとき、誰かがゆっくりと歩く足音が耳につきました。

「由希子ちゃん？」

答えはありません。しかし確かに、衣擦れと畳を踏みしめている音です。近づいているのか、遠ざかっているのかわかりません。静寂が押し包む屋敷の中で、その音はやけに大きく聞こえました。

「ねえ、由希子ちゃんなの？ そうなら返事をしてちょうだい」

言いながら、私は自分の発した台詞に何だか笑いが込み上げてきます。由希子ちゃんでないなら、いったい誰がこの家にいるのでしょうか。自嘲しようとして失敗し、唇の端が引きつるのを感じました。戦慄しながらも、正体を確かめずにはいられません。何しろ、存在がわからないものほど怖いものはないのですから。たとえば

編) 【仮令ノ辞書を引いてみてください】

ま) 引いてみました。『仮令——もしそうであっても。仮に。』……この場合、「例え」じゃないんですね。勉強になりました。

それが、死に装束に身を包み、夜叉の形相を呈したまま徘徊する母だったとしても。

それは、霧乃宮に生まれ育った者としての矜持だったのでしょうか。没落した旧家とはいえ、他人に土足で上がられるような真似を許すわけにはまいりません。私は意を決し、足音の聞こえる炊事場のほうへと向かいます。

私は一旦、仏間から縁側へと出ました。桜が見える家の東の縁側は北へと延び、突き当たって左に折れています。足音が聞こえるのは、その先にある炊事場のほうでした。しかし炊事場は土間ですか

ら、実際にはその隣にある、かつて使用人が寝起きしていた部屋の辺りを誰かが徘徊しているのでしょう。私は手燭に灯る小さな炎を頼りに、暗い回廊を進んでいきます。障子から差し込む月影は蒼く、いつそう闇が深まるようです。

北の、東西に延びる縁側は、炊事場に辿り着く手前に屋敷の南へと通じる廊下とも通じており、かれ——それとも彼女——は、そこを歩いているようです。ひどく、ゆっくりとした足取りです。

私は必死に恐怖をこらえ、縁側から廊下へと向かいました。

「そこにいるのは誰？」

毅然とした声で誰何しました。掲げた？燭が、怪しい人影を映します。照らし出されたのは黒い髪と黒い着物、それと対照的な、夜目でもわかるほどの白い肌——。しかし、それが誰なのかを理解したとき、私は拍子抜けして大きく息を吐いたのです。

「由希子ちゃん……」

体から、一気に力が抜けてしまいました。思えば至極当然なことです。この家に残ったのは、私と彰一兄さんと由希子ちゃんだけだったのですから。呼んでも返事がないことから、闖入者か、はたまた幽霊かと思っていました。よく考えればそれは由希子ちゃんに他なりません。

私はもう一度溜息をついて、彼女に歩み寄りました。

「由希子ちゃん、こんなところでどうしたの？ 突然いなくなるから心配したじゃないの。さあ、お婆ちゃんが寂しがっているから、あつちの部屋へ戻りましょう」

呆けた表情の由希子ちゃんの手を取り、私は諭すように言いました。

「助けてって……」

「え——？」

「女の人だね、助けてって言っているの」

由希子ちゃんは何を言っているのでしょうか。私は眉をひそめ、まるでどこかで聞いた怪談でも話しているような姪っ子を見やりました。

た。彼女の目は、悪意の欠片もない澄んだ眸をしています。

「女の人が私を呼んだのよ。寒いんだって。暗くて、息が苦しいって」

由希子ちゃんが虚言を吐いたり、私を騙そうとしていることは考えられません。【白痴】である彼女には、他人を謀るような知恵はないのですから。信じられませんが、由希子ちゃんは本当に幽霊でも見たのでしょうか。白昼に現れた桜の木の下の鬼といい、この屋敷にはいったいどれほどの亡霊が巣くっているのでしょうか。本当に、長い歴史のある旧家などろくなものではありません。その歴史は、数多の人の血にまみれているのに違い不大的のですから。それは、私が嫁いだ頼友家とて同じでしたけれど。

「とにかく、お婆ちゃんのところに戻りましょう、ね。由希子ちゃんがいないと、お婆ちゃんだって寂しがるわよ」

もう一度言い、由希子ちゃんの手を取って仏間へ向かおうとします。しかし、由希子ちゃんは抗うようにその場を動かこうとしません。「可哀想だよ。寒いんだって。真っ暗で苦しいんだって。ねえ、叔母ちゃん、助けてあげてよ」

真剣な眼差しで、なおも繰り返します。私は自分が粟立つのを感じながら、むりやり由希子ちゃんの手を引きました。叫びだしたいのを必死でこらえているせいで、呼吸が荒くなります。普通なら馬鹿馬鹿しい話と一蹴したのかもしれませんが、壮絶な母の死を目の当たりにして、ずいぶんと気が立っていたのかもしれませんが。思えば昨日だってほとんど寝ていないのですから。恐怖は苛立ちとも、怒りともつかぬ感情に変わり、思わず由希子ちゃんを睨みつけてしまいました。由希子ちゃんもそんな私から険悪な雰囲気を感じたのでしょうか。もう、何も言わず導かれるままについてきます。

仏間に戻ると、私はその白い手を握ったまま、仏となった母の前に座りました。かつて、たった一人でこの家で暮らしていた母は、屋敷の中に何かがいることを知っていたのでしょうか。由希子ちゃんの前に現れた幽霊、そして桜の木の下に立つ鬼は、お母

ちゃんの前にも姿を現したのでしょうか。しかし、そんな話は聞いたことがありません。もつとも、私には隠していたのかもしれないが。

隠しているといえば、彰一兄さんは何を隠しているのでしょうか。お母ちゃんも、彰一兄さんも、玲子姉さんも、みんな昔から私には肝心なことは何ひとつ話してはくれませんでした。上の二人とは歳の離れた三人兄妹の末っ子で、両親にとつても、兄さんや姉さんにとつても、私はいつまでも幼い子供の「香奈恵ちゃん」なのです。

私は長いこと何も知らないふりをして、じつと霧乃宮家を見てきました。母は養子に迎えた父、竜三を決して愛しておらず、使用人の一人と通じていたこと。そんな母を、玲子姉さんは軽蔑していたこと。——玲子姉さんは女学校を出てすぐ、霧乃宮家から逃げるように亮平さんと結婚したのはそのせいです——

彰一兄さんはおかしいくらい父とそっくりで、とても霧乃宮家を背負っていけるような甲斐性はないこと。そして、そのことを祖父の藤太郎はずっと憂いていたこと。どのみち、霧乃宮家は没落の一端を辿っていたのです。

私は結構な歳になつてからも、何も気づかない、無垢な「香奈恵ちゃん」を演じてきました。自分が無邪気な子供でいることが、崩壊しそうな家族をつなぎ止める唯一の鎧であること、それが私の役割であることを、幼少の頃から知っていたからです。

そうして、遠からず霧乃宮家は終焉を迎えることも……。

白い布がかぶせられた母の遺体。それに目をやりながら昔に思いを馳せると、私の双眸にはようやく悲しみの涙が溢れたのでした。

編)

分量があり、その多くが「行動の描写」であることから、この場面は興味を持続したまま——ただし、それぞれの固有名詞（「各登場人物」）の識別はまだできませんが——おもしろく読めました。

ま）おおっ！ ひょっとして、初めて褒められたのでは！？

自分の中では「描写過多」ぐらいに思っていたので、意外なお言葉です。これぐらいじっくりと小説世界を見据えて書き込まなければダメなんですね。このへんの感覚が自分じゃさっぱりわからなくて、今ひとつ自信が持てないでいました。なるほど、今までは「行動の描写」が足りなかったようです。

しかしそれでも「誰が誰だかわからない」とは。自分ではかなり意識的に書き分けたつもりでしたが……。

キャラの書き分けって、難しいですね。

（どうでもいいけど、サブタイトルぐらい校正の手を入れてほしくなかったなあ。『髑髏もの云ふ帝都の月夜』が、『髑髏もの言う帝都の月夜』って、なんか間抜けだ……）

「悪文排斥」記念すべき（？）第二十回。『霧乃宮一族の滅亡』
第三章からの批評レポートです。

第三章 血染めの系譜

（一）

ほどなくして、彰一兄さんが駆け込んでくる足音が聞こえました。
私は慌てて目元を拭い^{ぬぐ}ます。

編）【「拭」は新常用漢字ですので、その意味でもルビ不要です】

息を切らせて部屋に入ってきた彰一兄さん。

「由希子ちゃん！」

何事もなかったかのように私の隣で正座している由希子ちゃんを
見て、彰一兄さんは安堵の笑みを浮かべました。

「よかった。由希子ちゃん、いたのか……」

心優しい兄のこと、姪子^{めいこ}を心配してそこらじゅうを奔走したに
違いありません。外は今日も冷え込んでいるのに、その額には汗が
滲^{しみ}んでいました。

「家のいちばん奥——昔、使用人が寝起きしていた部屋の前にいた
のよ。足音が聞こえてきたから、最初は幽霊でもいるのかと思っ
たわ」

私は先ほど感じた恐怖を冗談に紛らわそうと、努めて明るく言い

ました。少し声が震えていたかもしれません。

「幽霊なら、足音なんてしないのじゃないのかい？」

彰一兄さんはそれには気づかなかった様子で、鼻で笑って私の戯言を一蹴します。

「それにしても、由希子ちゃんは何でそんなところに言たんない？」

「それが――」

私が言い淀むと、それまで懨然とした表情で座っていた由希子ちゃんは突然に立ち上がり、柳眉を逆立てて彰一兄さんを見据えました。

「女の人がね、助けてって言ったんだよ。暗いところに閉じこめられているの。苦しいんだって」

由希子ちゃんの言葉は、まるで予言者の宣告のように薄暗い仏間に響き渡ります。そして、自らの役割は終えたと言わんばかりに、再び座り込んでしまいました。

立ちこめる麝香の煙が揺らいだのは気のせいでしょうか。通夜の最中に聞こえた品のない笑い声が、またも耳朶をかすめます。私は戦慄して言葉を失いましたが、彰一兄さんもそれを聞き、顔色が一変します。蒼褪めたその表情から、明らかな動揺が見て取れました。

「兄さん、どうしたの？」

私は訝しみ、じっと兄を見ました。由希子ちゃんの言葉に、彰一兄さんが本気で恐怖を覚えたとは思えません。何か知っているのでしょうか。

「いや、何でもないよ」

むりやり笑おうとしたのか、？が引きつっています。それは昔と変わらぬ、何か隠し事をしているときの兄の癖でした。顔を背け、目を合わせようとしないのも同じです。彰一兄さんは、いったいどれほどの秘密を抱えているのでしょうか。そうして、それはどれほどの重荷なのでしょうか。

私はしばし逡巡しましたが、意を決して言いました。

「兄さん、何を隠しているの？」

「え——」

彰一兄さんは心底驚いたように瞠目しました。よもや私からそんなことを聞かれるとは思ってもよらなかったでしょう。兄の中では私は今でも「小さな香奈恵ちゃん」なのですから。

「ここには私と兄さんしかいないわ。由希子ちゃんはいても問題ないでしょう。さつきは聞き損ねたけど、もう全部吐き出したら？ お母ちゃんも死んじやったし、誰にも何も隠すことなんてないじゃない」

「隠してるって……俺は別に何も——」

そう言う彰一兄さんの目は泳ぎ、額には走って帰ってきたときのものとは違う、じつとりとした汗が浮いていました。

「よく考えたらおかしいものね。いくらカフェの女給との駆け落ちだからって、二十年もの間、一度も家に戻らなかったなんて。お母ちゃんがそこまで頑なに兄さんを許さなかったともとうてい思えないし、兄さんは私たち兄妹とも会おうとしない。——私ね、兄さんの家まで行ったことがあるんだよ。手紙に書いてあった住所を頼りに。でも、そこには全然知らない人が住んでいた」

「そ、それは……」

「いいのよ」

言い淀む兄さんを、私は遮りました。

「兄さんが誰とどこに住んでいるかはもういいの。それより……ねえ、どうして家を出ていったの？ 本当は駆け落ちなんかじゃないんでしょう。本当は、清花さんなんていないんでしょう？」

「……」

彰一兄さんは文字通り言葉を失い、馬鹿みたいに口を開いたまま呆然と立ち尽くしていました。私がそこまで見抜いているとは考えてもみなかったでしょう。かれは自らを落ち着けるようにゆつくりと浅い呼吸を繰り返し、やがて観念したのか、力が抜けたように座り込んでしまいました。

「いつから、知っていたんだ？」

「いつからかな。ただ、真面目で人のいい彰一兄さんが、たった一人の女性のためにすべてを捨てるなんて考えられなくて。もちろんそういう人もいるのだろうけど、少なくとも兄さんはそんな人間じゃないわ。そう思うと、他に理由があったんじゃないかなって考えるようになったの」

私の言葉を聞きながら、彰一兄さんは自嘲の色を浮かべてうなだれました。その様子は、妹の私から見てもひどくやつれていました。「……わかった。白状するよ。どうせ、もう時効なのだし」

それでも彰一兄さんは、なおも言うのを躊躇っているようでした。言いかけては唇を湿し、なかなか話そうとしません。私は辛抱強く待ちます。ようやく口を開いた彰一兄さん。

しかし、次に兄の口から発せられた言葉を聞いたとき、今度は私が見開いたまま絶句する番でした。

「俺は……実は——」

意を決したように、堅く目が閉じられます。

「俺は——親父を、殺したんだ」

一瞬、私は兄が何を言っているのか理解できませんでした。父を——お父ちゃんを殺した。

「そんな……そんなはずはないわ。お父ちゃんは放蕩三昧の挙げ句、若い女郎に入れ込んで駆け落ちしたって！」

「ということになっているが——」

「なっているって、だってお母ちゃんが……！」

言いかけて、私はふと気づきました。思えば父が蒸発したという証拠はどこにもありません。もともと不在がちな父でしたが、ある時を境に、まったく姿を見せなくなったのです。訝しむ私に、女郎と駆け落ちしたと言ったのは、他ならぬ母でした。私はそれを疑うこともなかったのです。

「まさか……」

呆然とする私に、彰一兄さんが頷きます。激しい喉の渴きを覚えながら、私はひどくのろのろと、北枕で眠る母に目を向けました。

「おふくろも知っているよ」

それは、お母ちゃんも共犯ということでしょうか。さすがの私も予想だになかったことで、体の震えが止まりません。

「どうしてお父ちゃんを殺したの？」

信じられないのに、聞きたくもないのに、聞かずにはいられません。

「殺すつもりはなかった。と言ったところで言い訳にしかないが。清花のことで口論になって、つい――」

兄の話によると、清花さんという女性と付き合っていたのは本当のようでした。霧乃宮家の跡取りともあるう者がカフェの女給に入れあげるのを見かね、父が諫言した。それが口論となり、父を突き飛ばしたところ、打ち所が悪くて死んでしまったそうです。

話し終え、膝の上で握りしめる兄の両拳は真っ白でした。まるで、死に装束から覗く母の踝のように。

「それ、本当なの？」

やはり私には信じられません。偶然とはいえ、気弱な彰一兄さんが父を殺めることができたなんて。

「ああ。騒ぎを聞きつけて、すぐにおふくろが飛んできたよ。うろたえるだけの俺と違い、死体を見たおふくろは、蒼褪めながらもそれを埋めることを思いついた。霧乃宮家から殺人犯を出すわけにはいかない。おふくろは、親父の命より霧乃宮家の世間体のほうが大事だったんだ」

「埋める……？」

私はぼんやりと反芻しました。お父ちゃんを殺し、死体を埋める。それはまるで、いつか読んだ新聞記事のように現実味がありません。

『帝都に現る赤マント』

『忽然と消ゆる若き女性』

『依然、行方は知れず』

『殺害し、山中に埋めたか』

扇情的に書き立てる帝都新聞。それを読みながら、いつたい人を

殺して埋めるとはどんな気持ちだろう。どんな人でなしの極悪人だろうと想像したのですが、まさか自分の兄がそれと同じ所業をしていたとは夢にも思いません。

「埋めるって、どこに？」

私の問いかけに、彰一兄さんは縁側に面した障子のほうを指さしました。

「あの桜の木の下に」

「……」

私の耳朶に、誰かが生暖かい吐息を吹きかけます。一瞬、背筋がぞくりとします。思い出すのはこの季節、いつも縁側で桜を眺める母の姿でした。あれは、父の亡霊を見ていたのでしょうか。白昼に現れた鬼は、父、竜三の怨念なのかもしれません。きっと母もあの鬼を見ていたのでしょうか。

出奔したと思っていた父は、ずっと庭の下にいたのです。その遺体は土の中で腐っています。蛆虫は父の腐肉を喰らい、脳漿を啜り、どす黒い血に濡れて蠢いていたのです。恨みを込めた眼球は溶け、呪詛の言葉を凍り付かせた舌は抜け落ち――丸々と肥えた蛆虫は眼窩を這い、暗い口腔を舐め、やがて蠅となって屋敷を飛び回っていたのでしょうか。

母はすべてを知りながら、色づく桜を眺めていました。思えばそれは何とおぞましい光景でしょう。父は今もこの庭に、白骨死体となつて埋もれているのです。

私は絶句したまま、いつまでも彰一兄さんを見ていました。本当に、かれは彰一兄さん

なのでしょうか。気のせいか、障子の隙間から誰かが覗いている気配がしました。

編)

人物の数が絞られたこと、十分な「連続した経過時間」が展開されていること、人物たちが「落ち着いて、言葉を選びながら」やりとりをしていることなどから、この場面は十分なレベルにあると感じます（おもしろく読めました）。

「最初の場面からこのスタイルで記述していれば……」と悔やまれます。

繰り返しになりますが、「解説すべきことはすばつと（＝映画「スター・ウォーズ」巻頭の流れ去る字幕のように）語り、あとはじつくり、落ち着いて」が大切だと思います。

ま）またも褒められた！

……と、図に乗ってはいけませんね。「ようやく、小説としての最低条件を満たしてきた」というだけのことです。

この調子でもう一ブロック行きます。

(二)

「おふくろが生きていたときは、迷惑がかかると思ってたずっと黙ってきた。でも——」

そう言っただけの母を見やる彰一兄さん。その目には、再び涙が浮かんでいます。

「ごめん、おふくろ。やっぱり俺は、墓場まで秘密を持っていくことはできなかったよ。せつかくおふくろが逃がしてくれたのに」

涙は止めどなく溢れ、嗚咽に変わります。彰一兄さんは、もう自責の念に耐えられなかったのでしょう。今まではただ、母のために沈黙を守っていたにすぎません。しかしその母も亡き今、彰一兄さ

んに秘密を守り通す気力はありませんでした。

「家に戻ってきたら、おふくろや香奈恵の顔を見たら、俺は心が折れて、何もかもぶちまけてしまっただろう。だからこの二十年間、一度も帰ってくることはなかった。いや、帰ることができなかったんだ」

彰一兄さんは、なおも独白を続けました。

「おふくろの死に目に会えないことは覚悟していた。兄妹にも会うことはないだろうと思っていたし、俺のせいで霧乃宮家が終わってしまうことも、本当に申し訳ないと思っている。でも、とにかく、俺が秘密を守らなければ……それが——おふくろの願いだったから。それが、俺のできる最後の親孝行だと思っていたから——」

苦悶の表情で語る彰一兄さんの姿は、あまりに痛々しいものがありました。二十年間、いつたいどれほどの苦しみを背負ってきたのか。やつれ、変わり果てたその姿が、罪の意識に煩悶した年月を物語っています。自首したほうが、ずっと楽だったに違いありません。一人で抱えるには大きすぎた秘密。ずっと誰かに打ち明けたくて、そうして今、兄さんは私に話すことでようやくその咎を償い終えたのです。

それを思うと、私はもう彰一兄さんを責める気にはなれませんでした。

「辛かったね」

兄とはいえ、親殺しの犯人にあまりに甘い言葉でしょうか。でも、霧乃宮家の血に翻弄された彰一兄さんの人生だって、同情せずにはられません。

「済まない、香奈恵」

「もういいよ」

私は泣き崩れる彰一兄さんに寄り添いました。

「それより、そのこと玲子姉さんは知っているの？」

「まさか。俺が玲子に言うわけじゃないか。そんなことを知ったら、あいつのことだ、真っ先に警察に駆け込むだろうよ。もちろ

ん、おふくろだつて玲子には言うはずない」

それは確かにそのとおりです。玲子姉さんは、自らが霧乃宮家に生まれたことを憎んでいるとでもいうように、一刻も早く家を出たがっていました。ろくに仕事もしない父のことは愚弄していましたし、どういうわけか、彰一兄さんとも折り合いが悪かったのです。

そして、外で多くの妾をつくる父への復讐のように、使用人と姦通している母を蔑んでいましたし、そのせいで母も玲子姉さんに対してはずいぶんと気を遣っているようでした。玲子姉さんが母を引き取ったのは、娘としての義務感や憐憫などではなく、含むところのある亮平さんの指図だったのでしょうか。そんな姉さんに、母がこのような大それた秘密を語ったとは思えません。

私は自分が震えていることを自覚しながら、恐る恐る母の遺体に目を向けました。誇り高い母だとは知っていましたが、霧乃宮家の体裁を守るために、そこまでするとは思いませんでした。

でも考えてみれば、父が妾を何人も囲っていることを知りながら、母は決して養子である父を追いつくとはしませんでした。離婚すれば世間の笑いものになる。母にとっては、自分のしあわせよりも世間体のほうが大切だったのです。もし、霧乃宮家から人殺しが出たということが知れ渡れば、それは耐え難い屈辱だったに違いありません。彰一兄さんの罪を隠し通すためなら、殺人の片棒を担ぐことも厭わなかったのでしょうか。

「ねえ、あそこに誰かが立っているよ」

不意に、由希子ちゃんが部屋の奥を指さします。私と彰一兄さんは、思わずその方向を見ました。

「さつき私を呼んだ人だ。よかった、助かったんだね」

嬉しそうな笑顔を見せる由希子ちゃん。しかし、そこには誰もいません。彼女には、この世の者ならざる者が見えるのでしょうか。霧乃宮家に取り憑く亡霊たち。桜の木の下で眠る父は、いったいどんな顔をしているのでしょうか。由希子ちゃんに聞いてみたい気がします。

私は何となくうんざりして、溜息をつきました。

「私は、父の死体があることも知らずここで暮らしていたのね。亮平さんが知ったらどう思うのかな。死体のある家——それでも、霧乃宮家を手に入れようとするのかしら」

「何だつて？」

怪訝な顔で、彰一兄さんが言いました。

「亮平さんがこの家を欲しがっているのかい？」

「そうよ。財産はほとんど残っていないけど、屋敷や広大な敷地は充分お金になるだろうから。そんな下心でもなけりゃ、いくら私が頼んだとはいえ、お母ちゃんを引き取ったりなんてしないわ。お金なんて腐るほど持っているのに、本当に欲深いというか……」

しかし、彰一兄さんは腕を組んで俯き、何か考えているようでした。

「それは妙だな」

「どうして？」

彰一兄さんの言葉に、今度は私が首を傾げる番でした。

「考えてもみ給え。香奈恵が言うとおり、亮平さんがこの屋敷を手に入れて、いったいどんな得があるんだい？」

「それは……」

「確かに——」

言い淀む私を、兄さんが制します。

「確かに、わずかばかりとはいえ、霧乃宮家の財産は残っている。しかし、亮平さんほどの人が躍起になって奪うような価値はないはずだ。くれるというならいざ知らず、今さらこの屋敷程度の金を得るために、あと何年生きるかもわからなかったおふくろを引き取るはずがないと思うんだが」

「……」

彰一兄さんの言葉に、私は呆然としてしまいました。言われてみれば、そのとおりの気がします。亮平さんは、打算的な人です。自分が損をしてまで人のために動くことを、何よりも嫌います。義理

立てするだけの理由で母を引き取るはずがありません。

「それじゃあ、亮平さんはどうしてお母ちゃんの面倒を引き受けたの？ 嫌がる玲子姉さんを説き伏せてまで。それに、お母ちゃんの葬儀に兄さんを喪主に立てなかったのだって、霧乃宮家に乗っ取るための布石だったと思うんだけど」

彰一兄さんは、眉根を寄せてなおも考え込みました。

「俺も亮平さんの性格をよく知っているわけじゃないが、何かたくさんでいるのは事実だろうな。まあ、喪主を立てなかったのは、俺への当てつけとしても。目的が本当にこの家だとして、亮平さんには何の得があるのか……」

私にわかるはずがありません。兄さんも押し黙ったまま、答えを求めるように仏壇に目を向けました。漂う麝香の煙に、気まずい沈黙がまじります。燭台で燃える？ 燭の炎は、その静寂を躊躇いがちに破るように、かすかな音を立てて揺らめきました。

「お母ちゃん、やっぱり玲子姉さんの家に行ってから何かあったのかな」

私は沈黙に耐えかね、もうひとつの疑問を口に出しました。

「何かって？」

「うん、実はね——」

一瞬、言っのを躊躇いましたが、やはり彰一兄さんにも話しておいたほうがいいでしょう。

「お母ちゃんの最期【微妙ですが、「期」でもOKと感じます】、結構大変だったんだよ。意識は三日前からなかったのに、臨終の間際になって目を覚まして」

言いながらそのときの鬼の形相を思い出し、私は戦慄しました。思わず布団に横たわる母から目を背けます。

「それはもう、何かが乗り移ったみたいに恐ろしい顔をして、『まだ、ここに来ておらん者がいる』って」

脅かすつもりはありませんでしたが、そう言う私の口調は、昨夜のしゃがれた母の声にそっくりでした。

「お、俺のことか？」

彰一兄さんは、驚愕に目を睜りました。私はゆっくりと頷きます。
「多分、そうだと思う。お母ちゃんが会いたがっていた人なんて、兄さんしかいないはずだし」

「……」

彰一兄さんは、再び苦悶の表情を浮かべてうなだれました。

「いえ、違うの。兄さんを責める気はないわ。——ただ、お母ちゃんは『騙された』というようなことを言っていたから……」

私の脳裏に、昨夜の母の言葉が甦ります。

——謀り^{はたか}おつて…… おまえらは、よつてたかつて儂を謀りおつて

……

それが何を意味するのも、ずっと気になっていたのです。

「俺にはわからん。何しろ、二十年間一度もおふくろに会っていないのは本当だ。そのことを恨んでいたと言われれば返す言葉もないが——しかし、俺は自分が二度と霧乃宮家を訪れないことが最良だと思っていたんだ」

「だから、兄さんを責めるつもりはないわよ。目を覚ましたいつでも意識は混濁していたのだろうし、出た言葉に何の脈絡もなかったのかもしれないけど、でも、お母ちゃんの最後の言葉だったから、どうしてほしかったのかなと思って」

「たとえ亮平さんのところでひどい仕打ちを受けていたのだったとしても、おふくろを見捨てた俺に文句を言える筋合いはない」

彰一兄さんは、自嘲の響きを交えて言いました。

「そもその原因はすべて俺だからな。身から出た錆だ。誰に何を恨まれようとも、仕方ないじゃないか。そりゃあ、おふくろだって俺を恨んでいたし、失望もしていたと思うよ」

私は彰一兄さんの言葉に、どこか釈然としないものを感じていました。確かに霧乃宮家の矜持を重んじた母であれば、兄さんには失望していたのかもしれませんが。しかし、『謀る』とはどういうことなのでしょう。彰一兄さんが、いつ母を謀ったというのでしょうか。

もつとも、死の間際の謔言であれば、何の意味もなかったと考えるのが筋かもしれませんが……。

薄暗い座敷を、再び沈黙が支配します。畳に落ちる影が、大きく揺らめきました。気がつくと、仏壇に灯された？ 燭が消えかかっています。私は立ち上がり、燃え尽きようとしている線香と？ 燭を取り替えました。本来は金箔で塗られていたはずの霧乃宮家の仏壇は煤で真っ黒に汚れ、位牌の向こうは地獄へと続く通路のようです。母の魂は、すでに黄泉の旅路を歩んでいるのでしょうか。

ぼんやりと物思いにふけていた私の傍らに、誰かが立ちます。

「由希子ちゃん？」

それまで黙って座っていた由希子ちゃんが、突然立ち上がって仏壇の向かいの襖を見ていました。

「由希子ちゃん、どうしたんだい？」

彰一兄さんも、怪訝な顔で言いました。お人形さんのように整った顔立ちの由希子ちゃんは、その瞳も硝子玉であるかのように、どこかこの世ならざるものを映しているようでした。

「また、女の人がいるの」

由希子ちゃんはそう言つて、部屋の奥を指さしました。私と彰一兄さんは驚いて顔を見合わせます。普通であれば、そんな怪談めいた話に取り合うはずありませんが、なんせ通夜を終えた夜。傍らには母の遺体が眠っています。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められているかと思うと、いくら白痴の姪っ子が口にする戯言とはいえ、笑い飛ばすことはできませんでした。死霊がさらに靈魂を呼び寄せたのか、それとも霧乃宮家には私たちの与り知らぬ死体がまだ埋められているのか。本当に、脈々と続いてきた家系などというものは、ろくなものではありません。

由希子ちゃんは何かに誘われるように、部屋の襖を開け、ゆらり、ゆらりと歩いていきます。

「ちよつと、由希子ちゃん」

彰一兄さんも立ち上がり、彼女の後を追います。私は手燭の？ 燭

に火を灯し、慌てて二人を追いました。由希子ちゃんをむりやり連れ戻そうかと思いました。なぜかそうすることは躊躇われました。それは彰一兄さんも同じのようで、まるで由希子ちゃんに導かれるように後についていきます。

「兄さん、何か見える？」

私は声を潜めて問いを發しました。

「いや、何も」

答えは短く、目は前を見据えたままです。私たちは口もきかず、暗い廊下をゆつくりと歩いていきました。床板の軋む音だけが、闇に響きます。手燭の炎に照らされる兄の顔は蒼白でした。おそらく私の顔も死人のように蒼褪めているのでしょう。まるで私たちが、霧乃宮家を徘徊する幽鬼のようです。

由希子ちゃんが向かうのは、先ほどと同じ家の奥、かつて使用人が住まった部屋が並ぶところのようでした。そこは三畳の狭い部屋が三つ続いており、由希子ちゃんが足を止めたのはその真ん中の襖の前でした。果たしてここに何がいるというのでしょうか。激しい喉の渴きと、全身が粟立つのを感じます。

しかし、私の恐怖をよそに、由希子ちゃんは何の躊躇いもなくその襖を開けました。

思わず目を背けます。

「香奈恵……！」

彰一兄さんが私の手を取りました。

「大丈夫、誰もいない。いや、いるはずないじゃないか」

その言葉を聞き、私は恐る恐る目を向けました。淀んだ空気に、饅えた臭いがまじっています。手燭が照らすその部屋は何もなく、彰一兄さんが言うとおり、誰かがいるわけでもありません。由希子ちゃんが足を踏み入れたので、仕方なく私たちも後に続きます。三畳間のそこは、大人三人が入れば息苦しさを感じるほどの狭さでした。

「由希子ちゃん、ここに何があるんだい？」

彰一兄さんが、幼い子供に話しかけるように由希子ちゃんに問いかけます。由希子ちゃんは無言で、壁の一部を指さしました。私はつられて、そのほうに手燭を掲げます。暗がり映し出される白壁は、何となく染みで汚れているようですが、それ以外に変わったことはありません。

「何があるの？」

私は眉をひそめました。

編）【客観的表現で、一人称の語り手にはなじみません】

ま）え、「眉をひそめた。」って、客観記述になるんですか？ これは知らなかった。何て書けばよかったんだろ。私は怪訝に思った。「私は訝しんだ。」かな。

「何もあるわけが……」

言いかけて、彰一兄さんは鋭く息を？みます。

「こ、これは——！」

何かに気づいたのか、彰一兄さんの口から驚愕の声が漏れました。壁を指さす手が震えています。私は意味がわからず、さらに一歩進み出て目を凝らしました。

しかし次の瞬間、その正体に気づいた私は、衝撃のあまり危うく手燭を落とすところでした。

「な、何なの。これは……」

その問いに答えられる者は誰もいなかったでしょう。壁に浮かぶいくつもの染み。

おお——！ しかし染みと思っていたそれは、一面に若い女性の顔を描いていたのです！ 表情は苦悶に歪み、目は助けを求めるように私たちを見据えています。私も彰一兄さんも、蛇に睨まれた蛙のように身動きができずにいました。

「伯父さん、叔母さん、助けてあげてよ」

壁に浮かぶ女性の気持ちを代弁するように、由希子ちゃんが私の

裾を引きます。私は声を発することもできず、呆然と立ち尽くしていました。異様な寒気を覚え、齒の根も合わないほど震えています。

「香奈恵、行こう。ここにいるのは、まずい」

ようやく絞り出すように、彰一兄さんが言いました。

「由希子ちゃんも戻ろう、ね」

「でも、この人も助けてって言っているよ」

「大丈夫だから。さあ、行こう」

彰一兄さんは両手にそれぞれ私と姪っ子の手を引き、足早に部屋を出ます。私は必死に恐怖に耐えながらも、あの女性が追ってくるような気がして、何度も後ろを振り返りました。本当なら、とつくにこの家を出たかったのですが、母を一人残していくわけにはいきません。逃げる先は、同じ屋根の下の仏間しかありませんでした。私たちは転がり込むように部屋の襖を開けました。

しかし、そこで待ち受けていたものは――私は今度こそ、自分が発狂したのかと思いました。布団の上で、手を組んだまま永遠の眠りにつく母。なのに顔を覆っていた白い布は、まるで自らの意思で払いのけたとでもいうように、その胸元に落ちていました。そうして、あるうことが臨終の間際と同じ夜叉の形相で、仏間に戻ってきた私たちを睨んでいたのです。その目には相変わらず、憤怒の炎を宿して。

恐怖は限界を超えたのでしょうか。私は自分が絶叫を発していることにも気づかぬまま、その場で気を失ったのです。

編）おもしろかったです！

ま）ありがとうございます！

与太話 その？ 神の視点・補足

批評公開の途中に申し訳ありません。次話の『円城寺まどかをフルボッコ？』があまりにつまらないから、少しまともな話でもしようかと……

というわけでもないのですが、完結前にどうしても言いたいことが出てきたので。

（「悪文排斥」は、この批評公開をもって終了です）

今さらですが、人称と視点の補足です。

第二回で詳しく解説したつもりでしたが、どうやら『三人称・神の視点』いわゆる純正（完全）三人称については、いろいろと誤解もあるようです。

自称「小説における視点マニア」の円城寺まどかが、「神の視点」についてもう一度詳しく解説します。

そもそも現在においては純正三人称が書けない——事実上一人称しか書けない——プロ作家というのもめずらしくなく、まして最初から最後まで神視点を貫く作品というのは、ほとんど絶滅しています。若い人の中には、「純正三人称の小説を読んだことがない」という方もいるのではないでしょうか。

純正三人称は、「人物の内面を表情や行動から推察させる」という高度なテクニクを必要とし、読み手にも一定の読解力を要求されるため、「出来のいい純正三人称ほど地味な印象になる」というデメリットもあります。「書いたところで誰も理解してくれない」と、今や三人称と言えば人物視点の疑似三人称（複数視点）を指し、本来の「三人称」は廃れてしまいました。ある意味、「現在は疑似三人称ができれば充分。純正三人称は必要ない」とも言えます。

しかし、作家本来の実力が如実に表れるのも純正三人称であり、本来の意味での「文章力」を身につけるには、これを体得するしかありません。

ただ、読んだこともない純正三人称には誤解も多いようで、「神の視点と思っているものは実は違うものだった（疑似三人称だった）」ということも多々あるようです。

●誤解してませんか？

基本的には全てを客観的に描く純正三人称。演劇を、観客席から眺めている自分を思い浮かべてください。その場で、自分が見聞きしていること、感じる空気、匂いを言葉によって伝えます。

ですが純正三人称であつても、

「主人公の内面を（ ）を使って記述すること、および、『彼は○○』と断定するのは、完全にOK」

です。

「感情を抑制した内面描写」ともいうのでしょうか。——田中芳樹御大の『銀河英雄伝説』は、純正三人称で、主人公にとどまらず大勢の内面に踏み込んでいますが、この「感情を抑制した内面描写」が抜群に巧いです。ぜひ一度参考にしてみてください——神の視点と人物視点の違いは、要は地の文が「誰の声か」ということで、作中の人物の主観なら疑似三人称（三人称・人物視点）です。

なかには神の視点というには人物の視点でありすぎる（主観記述が多すぎる）、純正三人称への過渡期、「不完全純正三人称（なんだそりゃ？）」とでもいうべきものがあつたりしてややこしいのですが。見極め方は、自由間接話法（つまりは人物の独白）以外の通

常の地の文で『こつち・こちら』という意味合いの言葉が書かれていないかがひとつのポイントになります。

（もつと簡単な方法は、三人称で書かれている作品の主人公の名前を、「僕」、「私」に置き換えてみてください。主人公の外見は客観的に描写しているはずなので違和感が残りますが、それ以外の部分が一人称として読めてしまうのなら『疑似三人称（人物視点）』です。それが意図的ならいいのですが、「これ以外の三人称の書き方がわからない」のであれば、「一人称しか書けない作家」ということです。主語を置き換えるだけで三人称なら誰も苦労はしません。）

繰り返しになりますが、主人公以外の人物に対しては、

「まるで。。。と言いたげに」、「さも。。。と言わんばかりに」、「。。。と思っているに違いない」

などが使えます。このような推察＋表情やしぐさ、または口調、行動＋台詞があれば人物の内面を描写するのは充分であり、「わざわざ読者に違和感を与えてまで主格となる人物を入れ替え、内面を独白する野暮な技法（複数主格）」は、本来必要ないのです。

複数視点、つまり主格となる人物を入れ替えることに違和感を憶えないという人は、純正三人称を読んだことがないのだと思います。もちろん三人称・人物視点は、一定の条件を満たした上で入れ替えることはOKですが、読者は面食らいます。

（しかし主人公の目線でありながら、「主人公」語り手ではない」という理由で立ち位置（視点）を変えることが許されるなんて、パチンコ屋の景品換金システムにも似た屁理屈だと思っんですけどね。）

実際、純正三人称そのものと言える映画では、登場人物が片っ端

から内面を独白（ナレーション）するなんてあり得ないでしょう？
そんなことをしたら、俳優の演技力——小説で言うところの文章力——なんて、ほとんど関係なくなってしまうからね。

一人称や疑似三人称が悪いわけではありませんが、一度、純正三人称も書いてみることをお勧めします。書くことそのものが一人称とはまったく違いますので難儀します。しかし、「客観的に人物を描く」のは、一人称でも必要となる技術です。

偉そうなことを言いましたが、いつもの如く口先だけです。私も「出来のよい純正三人称」を書ける自信はまったくありません。
（笑）

「悪文排斥」第二十一回。『霧乃宮一族の滅亡』批評レポート、第四章からです。今回も言葉の指摘に終始し、あまり中身はありません。

第四章 春の火刑の焼け野原

(一)

「やあ。起きたのかい、香奈恵」

私が目を覚ますと、目の前には安堵したように笑う彰一兄さんの顔がありました。一瞬、自分がどこにいるのかわくなり、慌てて体を起こします。

見慣れぬ木目の天井と、麝香の香り。言わずと知れた、霧乃宮邸の仏間でした。

「ああ、大丈夫か？ まだ早いから、寝ていればいいよ」

隣で静かに寝息を立てている由希子ちゃんを気遣ってか、彰一兄さんは囁くように言って私を押しとどめます。

「私は……」

どうなったのでしょうか。事態を把握しようと、辺りを見回します。仏間の障子からはやわらかな陽が差し込み、雀の囀りが耳に届きました。どうやら気絶してそのまま朝まで寝入ってしまったようです。昨夜、恐ろしい顔で私を睨んだ母の顔には、再び白い布が掛けられていました。果たして今も、布の下では悪鬼の形相を呈しているのでしょうか。気にはなりましたが、それを確認しようとは思いません。

せんでした。小さな祭壇に目を向けると、位牌の前で焚かれる？燭と線香は火を絶やしていません。彰一兄さんが一晩中仏の守りを務めてくれたようです。

「吃驚したよ。部屋に戻ったら、突然倒れてしまったから。前日も徹夜だったろうし、きつと疲れていたんだな」

彰一兄さんは、明るい口調で言いました。私は気を失う前後のことを思い起こします。由希子ちゃんに誘われるままに屋敷の奥へと行き、そこで見たもの。そして、戻ってきたときの母の顔。思わず身震いしたのは、朝の冷気のせいではありませんでした。

「ねえ、兄さん。あれはなんだったのかな。あの女の人はいつたい

——」

脳裏には、何かを訴えようとする女の顔が今も焼き付いています。
「香奈恵」

彰一兄さんはやつれた顔に、泣くとも笑うともつかぬ表情を浮かべて私を遮りました。

「考えないほうがいい。——昨日は疲れていたんだよ。あの部屋には誰もいない。いるわけじゃないじゃないか」

「でも、兄さんだって見たでしょう。壁一面に浮かぶ女の顔を。私だって悪い夢だと思いたいけど、やっぱりこの屋敷には何かあるのよ」

「……」

今度は彰一兄さんが黙る番でした。「霧乃宮家にある何か」——庭に埋められた父、竜三の憤怒と、仏間に横たわる母の狂気が呼び寄せた悪霊は、いくら否定しようとも確かに屋敷の中にいるのです。

「私、もう一度見てくるわ」

障子から差し込む朝の光が、私を奮い立たせました。魑魅魍魎の跋扈する夜は終わり、霧乃宮家に今いるのは、生ある者だけのはずです。私が生まれ育った屋敷に他人が土足で踏み上がられるのは、たとえ幽霊であれ我慢がなりません。私は布団を払いのけて立ち上

がると、縁側に出る障子戸に手を掛けました。

「香奈恵！」

その瞬間、彰一兄さんは私の手を？み、再び引き留めました。

「誰もいない。俺が確認したんだ。あの部屋はもちろん、屋敷の中にいるのは、俺たちだけだよ。だから、香奈恵が行く必要はない」

「兄さん……」

かれは、なおも何かを隠しているのでしょうか。私を見据える目は、これ以上追及しないようにと必死に懇願していました。父の殺害さえ打ち明けてくれた彰一兄さんが、今さら何を隠す必要があるのか。相当に訝しみましたが、どうやら力ずくでも私を押しとどめるつもりようです。

「わかった。兄さんがそう言うのなら間違いないわね」

私は力なく溜息をつく、兄の手を振りほどきました。もちろん、その言葉どおり納得したわけではありません。ただ、今はその理由を聞いても、かれは何も話してくれないでしょう。

「済まない、香奈恵……」

彰一兄さんは安堵したように息を吐き、ここに来てから何度目かになる謝罪の言葉を口に出しました。

「もういいわ。きつと私の見間違いなのだろうし。それより、由希子ちゃんを起こして今日の準備をしておかないと。すぐに近所の方も集まってくるわ」

十九歳という立派な娘であるはずの由希子ちゃんは、まるで純真無垢の赤ん坊のように安らかな顔で寝息を立てていました。昨夜のことは、まるで意に介していないようです。【白痴】である由希子ちゃんの目には、この世の者もあの世の者も、区別なく映るのでしょいか。生きることにはあまりに辛く、いつか訪れる死は幸福の安らぎになるであろう彼女にとって、生と死の境界はあやふやなのかもしれない。

私は何となく姪っ子が不憫に思え、夢の世界から引き戻すのを躊躇いました。

そんなとき、帝都の静寂を打ち破るように、遠くから自動車の音が聞こえました。やがてそれは、霧乃宮邸の前で止まります。私と彰一兄さんは顔を見合わせ、障子を開けて表を見やりました。門の前に停まっているのは、一台の黒塗りのオースチンでした。

「亮平義兄さん？」

中から出てきたのは、まぎれもなく亮平さんです。まだ珍しい黒の洋装にステッキを持つその姿は、まるでキネマ館のスクリーンに映し出された弁士のようにでした。

「もう来たのか……」

予想外に早い来訪に、彰一兄さんも驚きの声を上げました。

「早く由希子ちゃんを起こさないと。——由希子ちゃん、起きてちょうだい。お父様がいらつしやったわよ」

つい先ほどは眠りを妨げることを躊躇いましたが、もうそんなことは言っていられません。私は勢いよく布団をめくると、寝ぼけ眼の由希子ちゃんを引き起こしました。

「お父様よ。さア、お顔を洗っていらつしやい」

今まで寝ていたことが知られば、またどんな嫌味や折檻が待ち受けているかわかりません。取り敢えず由希子ちゃんを部屋の外に出し、慌てて布団を押し入れに仕舞い込みます。

亮平さんが入ってきたのは、何とか場を取り繕った直後でした。

「お早うございます。朝早くからご苦労様です」

亮平さんが入ってくるなり、彰一兄さんは畳に手をついて頭を下げました。まるで主人を迎える使用人のような態度です。一方の亮平さんは、尊大な態度で睥睨していました。この場合、亮平さんも座して畳に手をつき、挨拶を交わすのが礼儀ではないでしょうか。一瞬怒りを覚えましたが、彰一兄さんがちらりと目線で咎めるのに気づき、私も仕方なくそれに習いました。

「お早う。彰一君と香奈恵ちゃんこそご苦労だった【ネ】」。

編） キャラ表現なのかもしれませんが、この「ネ」は奇妙に感じ

られます。

ま)すみません。これも自己満足でしかないみたいですね。

「一晩中、仏の守とあつては一睡もできなかったかっただろう」

「いえ、お義兄さんにはお世話になりっぱなしで。私にはこれぐらいしかできませんから」

彰一兄さんは畳に頭を擦りつけんばかりにして言いました。本来なら、いくら歳上といえど、妹の旦那である亮平さんを「お義兄さん」と呼称する道理ありません。もちろん、それは承知の上での意図的なものでしょう。霧乃宮家を捨てた負い目が、自らを卑下させるのかもしれませんが。

しかしそれは、亮平さんの氣に入るようでした。自尊心を満足させたときの癖である鼻の穴をひくつかせながら、恰幅のいい体を揺すります。

「今さら遅いかもしれないが、彰一君にとっては最後の親孝行だったネ。きつとお母様も喜んでおられるよ。長年会えなかった息子とゆつくり一晩過ごせたのだから」

「亮平さん！」

たつぷりと嫌味を含んだ言葉に、私は思わず憤慨しました。しかしそれさえも、彰一兄さんは私の裾を？み、首を振って諫めます。

「お義兄さんには感謝しております。母の最期を看取っていただいたこと、勝手に出ていった私にも、葬儀の参列をお許しいただいたこと。本当に、何とお礼を申し上げればよいか……。不甲斐ない私のせいで、ご迷惑をおかけしました」

「なに、義理とはいえ子が親の面倒を看るのは当然のことだ。だいたい、霧乃宮紗江子ともあろうお方が孤独な死を遂げたとあつては世間様に示しがつかない。それに、親戚筋にある私にとつても名折れだからネ。何も案ずることはないよ。今後のことは、すべて私が取り仕切るから。彰一君だって、自分の生活があるんだ。今さら霧乃宮家のことで、頭を悩ませたくはないだろう？」

極めてもの柔らかな言い方ではありましたが、それは「霧乃宮家の権利は自分のものだ。誰にも口は出させない」という言い条に他なりませんでした。

「そう言っていただけでは幸いです。凡庸な私では、今後どうすればいいのか見当もつかず、途方に暮れていましたので。これ以上お世話になるのも心苦しいのですが、どうかよろしく願います」

「乗りかかった船だからネ。安心し給え、霧乃宮家の名を辱めるようなことはしないから」

私は頭を下げたまま、体をわなわなと震わせていました。唇を？みしめる顔は、蒼白だったに違いありません。やはり亮平さんの狙いは霧乃宮家の財産だったのです。彰一兄さんはそれをわかっていながら、どういうわけか、いとも簡単に手放してしまいました。

「ところで、玲子は？　一緒にいらっしゃったのではないのですか？」

彰一兄さんは平伏したまま、亮平さんを見上げて問いを發しました。

「ああ、取り敢えず私が一番にいないと格好がつかないだろう。あいつは後から、ハイヤーでやってくるよ。それにしても……えい、ここは線香臭くてかなわん」

本当に嫌でたまらないと言いたげに鼻に皺を寄せ、亮平さんは仏間を出てどこかへ歩いていきました。亮平さんの姿が見えなくなると、私は思わず溜息をつき、ゆっくりと立ち上がりました。

「兄さん、これでいいの？」

いいわけはありませんが、聞かずにはいられません。

「お母ちゃんがずっと守ってきた屋敷が、亮平さんに取られちゃうんだよ。兄さんが一言、『渡さない』って言えば、家は残るかもしれないのに。多少のお金なら聡太郎さんに――夫に頼めば工面できるから……だから、私たち兄妹で家を守っていこうよ」

私は悔しさと悲しさのあまり、涙を浮かべていました。これでは母も浮かばれません。しかし、彰一兄さんは私の言葉にも首を縦に

は振りませんでした。

「もういいよ。屋敷を残したところで、誰かが住むわけじゃないし。俺は戻ってくるつもりはないんだ。それに、おふくろが守ってきたのはこの屋敷ではない」

私は眉根を寄せて兄を見ました。

「それは、どういう意味？」

「いや、つまり……。ともかく、悪いようにはしないから。霧乃宮の者として、ちゃんと責任は取るつもりだ」

「……？」

彰一兄さんの言葉に、私はますます首を傾げました。かれは何を知っているのでしょうか。そうして、何をたくらんでいるのでしょうか。聞きたいことは山ほどありましたが、それ以上彰一兄さんを問い詰めることはできませんでした。

——責任は取るつもりだ。

その意味はわかりませんが、彰一兄さんは何かしらの考えがあるようです。今まで気づきませんでしたでしたが、口元を引き結んだ意志の強さを表す顔は、亡くなった母にそっくりでした。

彰一兄さんを招いたのは私でしたが、ひよっとしたら母の導きだったのかもしれませんが。私はもう何も言わず、今日の葬儀の準備に取りかかることにしました。

葬儀自体を取り仕切るのはご近所の「お取り持ち」ですが、かれらは葬儀が終わった瞬間に「お客様」へと変貌します。二日間の労をねぎらい、もてなすのは、私たち親族の役目です。

私は下準備をするため、彰一兄さんを仏間に残して台所へと向かいます。その途中、廊下ですれ違ったのは、先ほど部屋から追いやった由希子ちゃんでした。若い娘ならではの、艶やかな黒髪に白い肌。大きな瞳は純真無垢を表すかのように澄み渡り、口元にはあどけない笑みを浮かべていました。つられて、私も思わず？がゆるみます。

「由希子ちゃん、お早う。目が覚めた？ お婆ちゃんのお部屋に戻

って、ちょっと待っていてね」

子供と同じような言葉で大の大人に言い含めるのは、どうにも違和感があります。しかし、次に由希子ちゃんの口から発せられたのは、返事とはまったく別のことでした。

「昨日の女の人、お父様とお知り合いなのかな？　お父様は女の人がいる部屋に入っていていったわ」

「え……？」

思いがけぬ言葉に、私は驚愕しました。夢か現か、昨夜現れた壁一面に浮かぶ女人の顔。何の用があるのか、亮平さんはあの部屋に足を踏み入れたというのです。

「それ、本当なの？」

「うん。でもね、お父様は『由希子があっちに行つてなさい』って言うの。私ももう一回あの人に会いたかったんだけどな。ねえ、あの人は大丈夫だったのかな？」

確かに由希子ちゃんの話では、女人は助けを求めていたということです。いったいあの女は誰なのでしょう。そして、何から逃れようとしていたのでしょうか。見知らぬ彼女もまた、霧乃宮家の呪いによつてこの世にとどまっているのかもしれない。

私は由希子ちゃんに仏間に戻るように告げ、亮平さんが入っていたという例の部屋へと向かいます。彰一兄さんとの約束を忘れたわけではありませんが、やはり昨夜のことが気になって仕方がなかったのです。彰一兄さんは何を知っているのでしょうか。そして、亮平さんがあの部屋に何の用があるのでしょうか。私は嫌な予感にせかされるように、足早に廊下を進みました。すでに夜は明けたせいか、屋敷の中を彷徨う悪霊とすれ違うこともありません。

しかし、その代わりにばったり出くわしたのは、ちょうど襖を開けて出てきた亮平さんでした。

「香奈恵ちゃん」

「亮平さん……」

私たちは同時に驚きの声を発しました。

「どうしたんだネ、こんなところで」

亮平さんは、さも奇遇だと言わんばかりに尋ねました。その顔は一見、喜色を浮かべていますが、私を見る目はこの場から追いやろうとする小昏い瞋恚の炎に燃えています。

編)【小昏い？ 辞書類に記載ありません】

ま)小昏い——ええつと、「暗い」と同じ、後ろ暗い、やましいという意味ですが……ひよつとして当て字になるんでしょうか？

ここは霧乃宮邸。あとから思えば、屋敷の中において私が気を遣うことは何ひとつないはずです。しかし、命令しなれた亮平さんの高圧的な態度に、私はつい萎縮してしまいました。どう言い訳をすればいいのでしょうか。一瞬、狂気のように頭脳を回転させます。

由希子ちゃんの見たものや昨夜の出来事を話しても、亮平さんは馬鹿馬鹿しいと一蹴するだけに違いありません。また、普段から由希子ちゃんの虚言を快く思っていないかれのことです。幽霊騒ぎを正直に話したところで、由希子ちゃんが折檻を受ける火種をつくるだけでした。

「いえ、今日の精進落としての用意をしようと台所に来たのですが、何やら物音が聞こえたもので……亮平さんだったのですね。安心しました」

私はそう言つて、むりやり笑つてみせました。

「ああ、驚かせて済まなかったネ」

「ところで、亮平さんこそどうしてこんな部屋にいらつしやったのですか？　ここは以前、使用人が寝起きしていた部屋です。使われなくなつてずいぶんと経つのですが、何かありましたか？」

昨夜の出来事は伏せ、「ふと疑問に思つた」という風を装つて首を傾げます。

「いや、ついに霧乃宮邸も住む者が居なくなつたかと思うと、何やら感慨深いものがあつてネ。ついうろろとこんなところまで来て

しまつたんだよ」

「そうでしたか……祖父が健在だった頃はまだ多くの使用人を雇い、賑やかな屋敷だったのですが。何だかもう、遠い昔のように思えますね」

私はさも共感したかのように、しんみりと言いました。どうせ、霧乃宮邸を値踏みしていたのに違いありません。ここが幽霊屋敷だと知れば、亮平さんは何と云うのでしょうか。手に入れるのを、諦めてくれるのでしょうか。しかしそれは、私の口から告げることではありませんでした。

「そうだね。ずいぶんと、昔の話だ」

亮平さんの相づちは、どうでもいいと言いたげでした。

「忙しいのに悪かったネ。食事の準備をしなければいけないのだろう？　じきに玲子も来るから、手伝わせることにしよう」

それは、この話はもう終わりだという合図に他なりません。私は作り笑いを浮かべて軽く会釈すると、踵を返して台所へと向かいました。背中には、射抜かれるような視線を感じます。それが亮平さんのものなのか、それとも別の誰かなのか、確かめる勇氣はありませんでした。

編）この場面も「要件を満たした記述」ですが、この時点で「壁に現れたのは亮平が殺した女」と読者は察すると思います。

ま）やっぱりそうですか？　今になって読み返すと、人物のみんながみんなが思わせぶり、自分でも話の進め方にぎこちなさを感じます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2128s/>

円城寺まどかの悪文排斥！

2011年12月17日12時58分発行